

平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一三―一二

平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物新築工事に伴う平安京跡・公家町遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

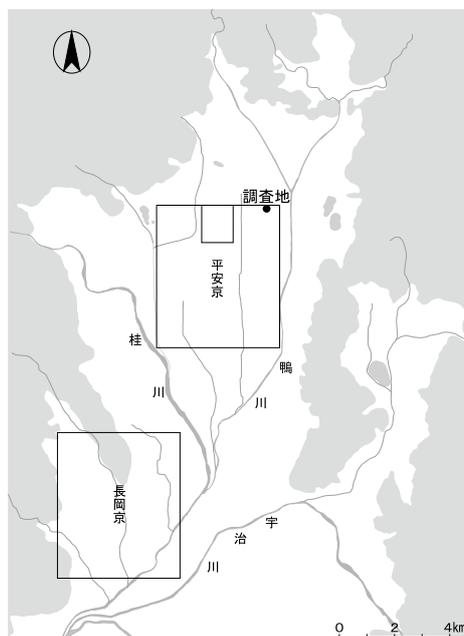
平成26年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡（文化財保護課番号 11H193）
- 2 調査所在地 京都市上京区京都御苑3
- 3 委 託 者 株式会社 熊倉工務店
- 4 調査期間 2013年10月3日～2013年12月7日
- 5 調査面積 416㎡
- 6 調査担当者 小松武彦
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「船岡山」・「相国寺」・「聚楽廻」・「御所」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 小松武彦
付章1 竜子正彦
付章2 丸山真史（奈良文化財研究所）
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査の経過	1
(2) 調査地の位置と歴史的環境	3
(3) 周辺の調査	5
2. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 第1面（江戸時代末期から昭和時代）	8
(3) 第2面（江戸時代後期）	13
(4) 第3面（江戸時代中期）	17
(5) 第4面（江戸時代前期）	19
3. 遺 物	22
(1) 土器・土製品	22
(2) 瓦・埴類	33
(3) 銭貨	36
(4) 金属製品	37
(5) 石製品	38
4. ま と め	39
付章1 土塊サンプルについて	46
付章2 動物遺存体の所見	48

図 版 目 次

図版1	遺構	第1面平面図（1：150）
図版2	遺構	第2面平面図（1：150）
図版3	遺構	第3面平面図（1：150）
図版4	遺構	第4面平面図（1：150）
図版5	遺構	1 北区第1面全景（南から）
図版6	遺構	1 南区第1面全景（北から） 2 井戸72（西から）

	3	石列1 (東から)
図版7 遺構	1	北区第2面全景 (南から)
	2	南区第2面全景 (北東から)
図版8 遺構	1	溝150・177、土坑190 (東から)
	2	溝145 (西から)
	3	溝258・262 (東から)
	4	土坑82 (西から)
	5	土坑231・232 (北東から)
図版9 遺構	1	北区第3面全景 (南西から)
	2	南区第3面全景 (北から)
図版10 遺構	1	溝102 (北東から)
	2	溝197 (西から)
	3	溝102断面
	4	井戸280 (北から)
図版11 遺構	1	北区第4面全景 (南西から)
	2	南区第4面全景 (北から)
図版12 遺構	1	柱列1・石列5・溝189 (東から)
	2	溝146 (北から)
	3	溝192・集石204 (北から)
図版13 遺物		土坑249出土土器
図版14 遺物		土坑187出土土器
図版15 遺物		土坑201出土土器
図版16 遺物		土製品・塩壺・信楽甕
図版17 遺物		棟丸瓦・軒丸瓦
図版18 遺物		軒平瓦・輪違瓦・塼
図版19 遺物		銭貨・金属製品

挿 図 目 次

図1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図2	『禁裏』(京都大学附属図書館所蔵)	2
図3	調査区配置図 (1 : 400)	2
図4	調査前全景	3

図5	作業風景	3
図6	遺構養生	3
図7	関係説明風景	3
図8	周辺調査地点位置図 (1 : 5,000)	5
図9	調査区北壁・東壁断面図 (1 : 40)	7
図10	溝239実測図 (1 : 50)	8
図11	建物1平面図 (1 : 100)	9
図12	建物1断面図1 (1 : 60)	10
図13	建物1断面図2 (1 : 60)	11
図14	建物1断面図3 (1 : 60)	12
図15	建物2平面図 (1 : 100)	13
図16	建物2断面図 (1 : 60)	14
図17	溝150・177・土坑190実測図 (1 : 100)	15
図18	土坑231・232実測図 (1 : 50)	15
図19	溝145実測図 (1 : 50)	16
図20	溝102実測図 (1 : 100)	17
図21	溝197実測図 (1 : 50)	18
図22	溝189実測図 (1 : 50)	18
図23	柱列1・石列5実測図 (1 : 100)	19
図24	溝146実測図 (1 : 100)	19
図25	溝192実測図 (1 : 50)	20
図26	集石204実測図 (1 : 50)	20
図27	土坑229出土土器実測図 (1 : 8)	22
図28	土坑265出土土器実測図 (1 : 4)	23
図29	土坑264出土土器実測図 (1 : 4)	24
図30	土坑249出土土器実測図 (1 : 4)	24
図31	土坑248出土土器実測図 (1 : 4)	25
図32	土坑250出土土器実測図 (1 : 4)	26
図33	土坑231・232出土土器実測図 (1 : 4、95・98のみ1 : 8)	26
図34	溝145出土土器実測図 (1 : 4)	27
図35	井戸280出土土器実測図 (1 : 4)	28
図36	溝102出土遺物実測図 (1 : 4)	29
図37	土坑187出土土器実測図 (1 : 4)	30
図38	溝146出土土器実測図 (1 : 4)	30
図39	土坑129出土土器実測図 (1 : 4)	31

図40	土坑201出土土器実測図（1：4）	31
図41	土坑196出土土器実測図（1：4）	32
図42	土坑205出土土器実測図（1：4）	32
図43	土坑218出土土器実測図（1：4）	33
図44	棟丸瓦・軒丸瓦拓影・実測図（1：4）	34
図45	軒平瓦・輪違瓦・軒丸瓦拓影・実測図（1：4）	35
図46	塼実測図（1：4）	36
図47	銭貨拓影（1：1）	36
図48	金属製品実測図（1：4）	37
図49	硯実測図（1：4）	38
図50	硯	38
図51	第1面遺構配置図（1：300）	40
図52	『安政造営内裏図』（京都大学附属図書館所蔵）	40
図53	第2面遺構配置図（1：300）	41
図54	『寛政度御造営内裏平面図』（寛政2年：1790）	41
図55	第3面遺構配置図（1：300）	42
図56	『宝永度御造営内裏平面図』（宝永6年：1709）	42
図57	第4面遺構配置図（1：300）	43
図58	『延宝度御造営内裏平面図』（延宝3年：1675）	43
図59	御所敷地変遷および現況図	44

表 目 次

表1	御所関係年表	4
表2	遺構概要表	7
表3	遺物概要表	22

平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡

1. 調査経過

(1) 調査の経過

調査地は京都御所の清所門南東に位置する。当地に、京都御所参観者休所棟建設が計画された。そのため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という。）が試掘調査を実施したところ、江戸時代の火災層や路面などを検出し、遺構が良好に遺存していることを確認した。その結果を受けて、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が調査を行うこととなった。

調査地は平安京左京北辺四坊一町に当り、平安時代後期には左近衛中将源憲俊邸、鎌倉時代初期には藤原忠行邸が所在したとの記録が残る。江戸時代、慶長16年（1611）に徳川家康による内裏新造で敷地の拡張に伴い御所内に取り込まれた。京都御所の絵図『禁裏』（図2）によると「番所」・「御使番部屋」とされる建物が記載されており、当該建物に関連する遺構の検出が想定された。

調査は、残土置き場を場内に確保するため北区・南区に分け反転して行い、建築設計による掘削深度までを対象とした。

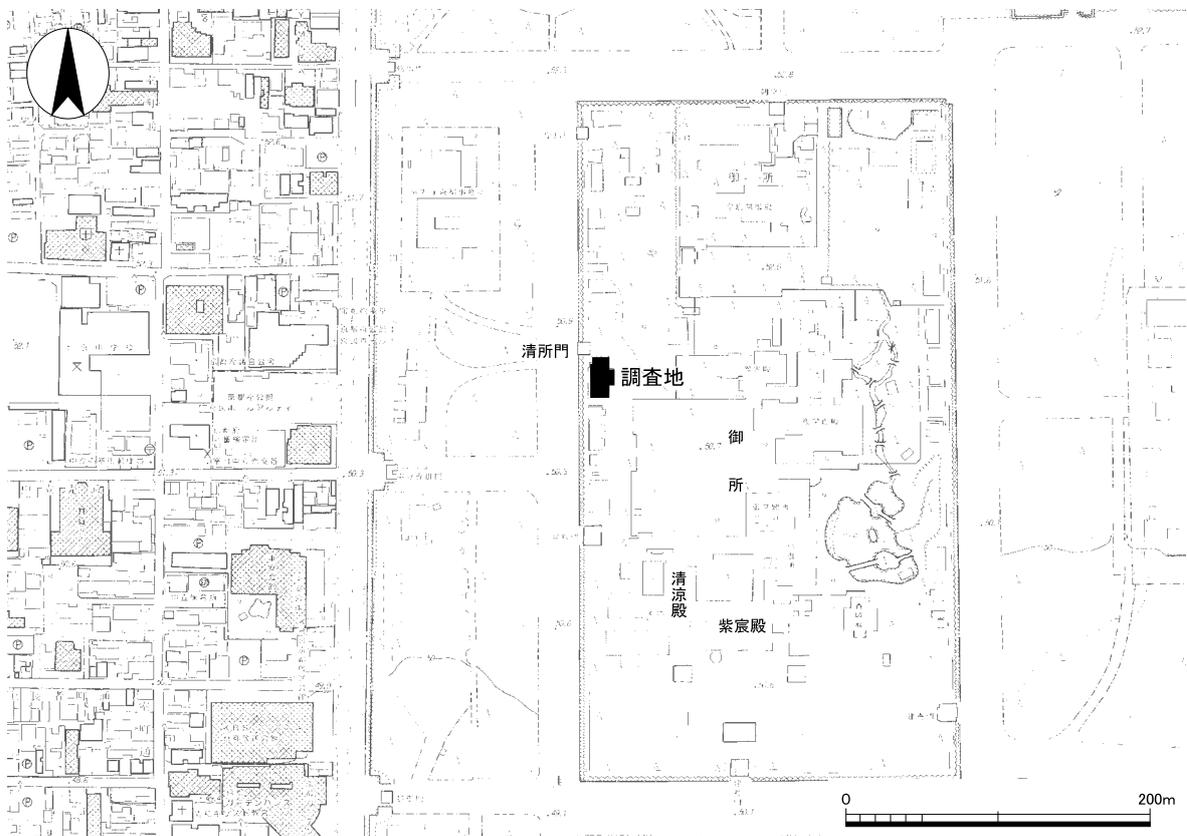


図1 調査位置図（1：5,000）

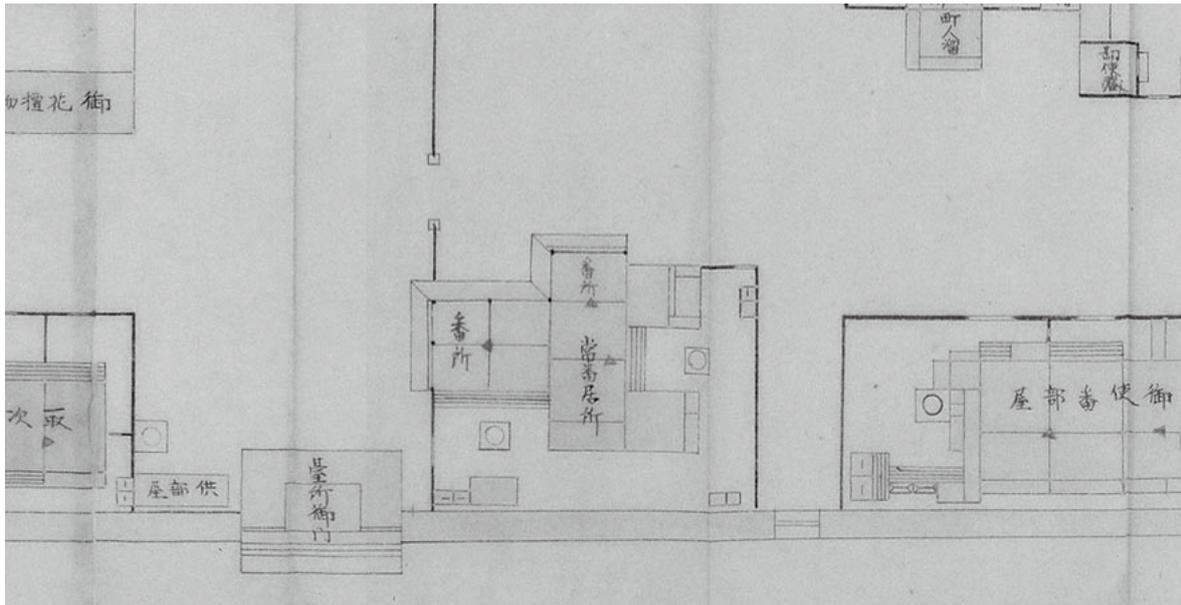


図2 『禁裏』（京都大学附属図書館所蔵）

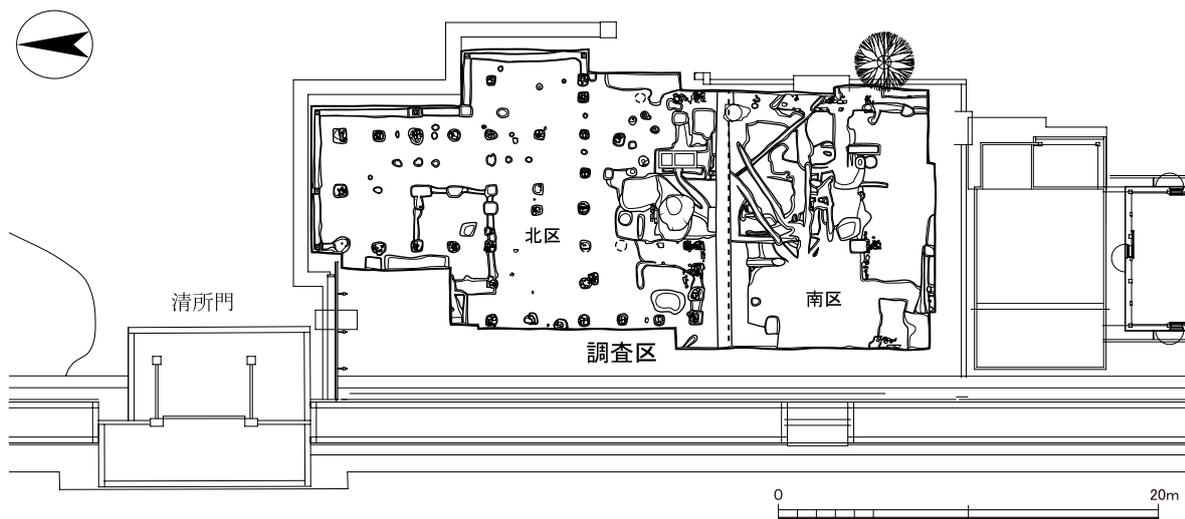


図3 調査区配置図（1：400）

2013年10月3日から重機で現代層を掘削し、以下第4面までの調査を行った。その結果、第1面では安政二年（1855）に完成した安政度内裏以降の番所建物跡、第2面では嘉永7年（1854）の火災で焼失した寛政度内裏（造営）の番所建物跡・堀・石組溝・焼土層、第3面では天明8年（1788）の火災で焼失した宝永度内裏の番所の石組溝・焼土層、第4面では宝永5年（1708）の火災で焼失した延宝度内裏の番所の雨落ち溝・西築地東雨落ち溝と江戸時代前期の土坑などを検出した。なお、設計深度より深い遺構は養生を施し、埋め戻して12月7日で調査を終了した。

また、11月6日には、宮内庁職員を対象に関係者説明会を開催した。

(2) 調査地の位置と歴史的環境 (表1)

内裏(御所)は、延喜13年(794)に平安京遷都されて以来、大内裏の中にあったが天徳4年(960)に焼失、その後も度々焼失、再建が繰り返され、そのたびに京内の貴族邸宅や後院の仮御所が里内裏とされていた。しかし、安貞元年(1227)の火災以降は、内裏は再建されず、荒廃していく。その後、天皇は貴族邸宅を里内裏として転々としていたが、元弘元年(1331)に光厳天皇が即位した時、「土御門大路の北、東洞院大路の東、正親町小路の南」の左京北辺四坊二町にあった土御門東洞院殿を皇居と定めた。これが現在の京都御所の始まりとなる。

当初の御所は現在の紫宸殿と清涼殿の辺りにあり、一町四方余りと規模は小さかった。この御所も放火などの火災で焼失と再建を繰り返し、戦国時代には荒廃していたが、近世初めに足利義昭を奉じて入京した織田信長によって、元亀2年(1571)に修造される。その後を引き継いだ豊臣秀吉も天正19年(1591)に天正度内裏造営を行うと、同時に御土居造営など京都の都市改造の一環として御所周辺に、公家を集住させ公家町を形成した。

江戸時代に入り、慶長18年(1613)の慶長度内裏は、徳川家康が秀吉の造営した建物を全て取り壊し、敷地を拡張して新たに造営されたものである。規模は東西115間半、南北129間余りの矩形である。さらに、寛永19年(1642)の寛永度内裏は、小堀遠州を総奉行として造営を行い、慶長度内裏の北東隅を残して北と東へ拡張する。これ以降の造営は火災を契機とした修復・建替えなどに



図4 調査前全景



図5 作業風景



図6 遺構養生



図7 関係者説明会風景

表1 御所関係年表

出来事	西暦	内裏変遷	年号	御所出来事
鎌倉幕府滅亡 南北朝分立 義満 花御所 南北朝合一	1333		元弘元年(1331)	里内裏の土御門東洞院殿に光厳天皇が即位
	1336		元弘3年(1333)	土御門の北、東洞院の東、正親町の南、高屋の西方一町
	1378			
	1392		明德3年(1392)	土御門東洞院殿の後小松天皇に後龜山天皇(南朝)より三種の神器が渡る
正長土一揆	1428	[応永度内裏]	応永8年(1401)	土御門東洞院内裏、小御所より出火して炎上
			応永9年(1402)	足利義満、応永度土御門内裏を新造
			嘉吉3年(1443)	応永度土御門内裏、放火され火災
			文安3年(1446)	再建
			報徳元年(1449)	土御門内裏、山城の地震で崩壊
応仁の乱	1467	[康正度内裏]	康正2年(1456)	足利義政、14年を経て康正度土御門内裏を新造
			文明9年(1477)	朝廷、幕府に土御門内裏の修造を命じる
			文明11年(1479)	完成
			文明12年(1480)	内裏修造
山城一揆 天文法華の乱	1485			
	1536			
信長 入京	1568	[永祿度の修造]	天文9年(1540)	朝廷、足利義晴に内裏の修造を命じる
			天文12年(1543)	織田信長、内裏修理料四千貫を献上
			天文18年(1549)	足利義輝・細川晴元、内裏の築地を修理
			永祿10年(1567)	朝廷、山科言継に築地を修理させる
室町幕府滅亡 秀吉 都市改造 に着手 関ヶ原の戦い 江戸幕府	1573		元亀2年(1571)	完成
	1586			
大阪夏の陣	1600 1603	[天正度内裏]	天正17年(1589)	豊臣秀吉、内裏修造(全面改築)に着手
			天正19年(1591)	完成
			慶長16年(1611)	徳川家康、豊臣秀吉建造の建物を取り壊して新造
寛永通寶鑄造	1615 1636	[慶長度内裏]	慶長18年(1613)	完成、東側の柳馬場を取り込んで著しく規模が増大する
			元和6年(1620)	女院御所、武家詰所を新造
小類隣み令発布	1685	[寛永度内裏]	寛永18年(1641)	慶長度造営の内裏を取り壊し、小堀遠州を総奉行として本格的な内裏造営に着手、敷地は北へ拡大する
			寛永19年(1642)	完成
			承応2年(1653)	六月二十三日、内裏炎上
			承応3年(1654)	再建
			承応4年(1655)	完成、小御所が現在地に定まる
			万治4年(1661)	正月十五日、内裏炎上
			寛文2年(1662)	再建
			寛文4年(1664)	完成
			寛文13年(1673)	五月八日、内裏炎上
			延宝2年(1674)	再建
享保の改革	1716	[宝永度内裏] (第3面)	延宝3年(1675)	完成
			宝永5年(1708)	三月八日、内裏炎上、再建
寛政の改革	1787	[寛政度内裏] (第2面)	宝永6年(1709)	完成、敷地が東と北へ拡大。 常御殿が現在地に定まる。
			天明8年(1788)	正月晦日、天明大火、内裏炎上
			寛政元年(1789)	再建
天保の改革	1841	[安政度内裏] (第1面)	寛政2年(1790)	完成、宝永度内裏の南北が少し拡大されて現在の規模となる。 紫宸殿前方の南側は中央部だけを拡張する。 紫宸殿・清涼殿・飛香舎などを裏松固禪の『大内裏図考証』に基づいて平安時代の様式に戻す。 紫宸殿前方の南側は中央部だけを拡張する。
			嘉永7年(1854)	四月六日、内裏炎上、再建
安政の大獄	1858	[安政度内裏] (第1面)	安政2年(1855)	完成、寛政度造営と同様、古制に基づいて再建。 南側は東西両端の入り隅部が拡張され、現在の規模となる。
			元治元年(1864)	蛤御門の変、元治大火
明治維新	1868		慶応元年(1865)	東北部の大きな入り隅部が張出され、全体に現在の規模となる

よるもので、承応2年（1653）火災後の承応度内裏（承応4年：1655）、万治4年（1661）火災後の寛文度内裏（寛文4年：1664）、寛文13年（1673）火災後の延宝度内裏（延宝3年：1675）、宝永5年（1708）火災後の宝永度内裏（宝永6年：1709）、天明8年（1788）火災後の寛政度内裏（寛政2年：1790）、安政元年（1854）の火災後の安政度内裏（安政2年：1855）と、火災のたびに再建を繰り返し、敷地規模や建物の配置などが変化した。

最も大きな変化は宝永度内裏で、敷地がさらに北と東へ広がり、南側の東西125間半、西側の南北198間となる。面積も寛永度内裏の14,265坪から22,201坪と拡大する。東西幅は現在の御所とほぼ同じとなった。

その中で、寛政度内裏は紫宸殿・清涼殿・飛香舎などの舎殿を裏松固禪の『大内裏図考証』に基づき、平安宮内裏に準じた復古様式によって造営し、その後の安政度内裏は寛政度内裏を踏襲して再建されている。現在の京都御所は慶応元年（1865）に北東隅が拡張され、今の規模となっているが、主な建物は安政度内裏のものである。

（3）周辺の調査（図8）

調査地は京都御所内にあり、周辺は1949年に国民公園「京都御苑」として自然や景観が保存されていることから、開発は少なく調査事例も少ない。

1975年に御所内の北東部で行われた調査1では、一条大路の路面と溝、平安時代および鎌倉時代から江戸時代の遺構面が検出された¹⁾。1999年に御所の南東隅で実施した調査2では、宝永5年

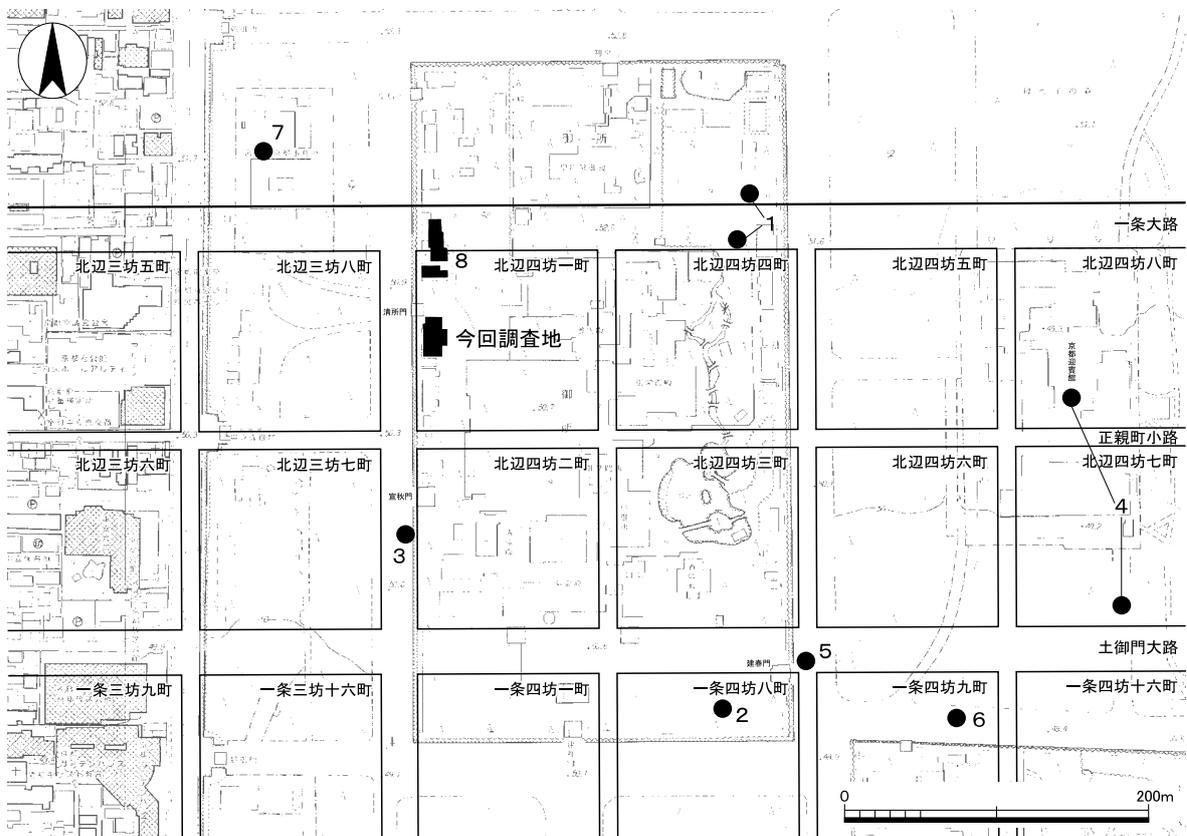


図8 周辺調査地点位置図（1：5,000）

(1708)と天明8年(1788)の火災層をともなう道路敷や柵列、寛政度内裏の造営時に敷地を南側へ拡張した時に築かれた南北築地などを検出した²⁾。2000年に宣秋門外の西南側で実施した調査3では、弥生時代後期の遺物包含層、平安時代から室町時代の柱穴・土坑・集石、桃山時代から江戸時代末期の火災層を含んだ路面を検出した³⁾。1997年から2002年にかけて御苑北東側で実施した調査4では、古墳時代と飛鳥時代の流路、平安時代の園池や道路、鎌倉時代の地業・道路・柱列、室町時代の建物や濠、江戸時代の公家町の建物・能舞台・園池・道路などを検出した⁴⁾。2001年に建春門外の北東側で実施した調査5では、平安時代の柱穴・落込みと、宝永5年(1708)の火災で焼失した花山院邸の建物を検出した⁵⁾。2002年に大宮御所北側の「広小路」で実施した調査6では、宝永5年(1708)と寛文13年(1673)の火災で焼失した鷹司邸の建物・築地・蔵を検出した⁶⁾。2009年に御苑北西側で実施した調査7では、平安時代の土坑、室町時代の礫敷面と江戸時代の一条邸の建物・井戸・地業・池を検出した⁷⁾。2012年に清所門の北東脇で実施した調査8では、江戸時代中期から後期の取次部屋・対屋の建物跡・雨落ち溝を検出した⁸⁾。

今回も建物遺構と御所の西築地内溝にあたる石組溝が検出された。一部ではあるが建物や内裏造営の変遷を明らかにする資料を得ることができた。

註

- 1) 松井忠春・佐々木英夫「平安京推定一条大路跡第二次調査概要」『古代文化』第29巻9号 古代学協会 1976年
- 2) 長戸満男「平安京左京一条四坊」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 3) 上村和直「平安京左京北辺三坊」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 4) 『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 5) 鈴木久男・西村洋子「平成13年度発掘調査」『平安京左京一条四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 6) 東 洋一「平成14年度発掘調査」『平安京左京一条四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 7) 丸川義広『公家町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-5 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 8) 小松武彦『平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年

参考資料

藤岡通夫『京都御所〔新訂〕』中央公論美術出版 1987年

2. 遺 構

今回の調査は、建物基礎の構造から掘削深度に規定があったため、江戸時代の遺構を対象として調査を行った。

(1) 基本層序 (図9)

基本層序は、地表下0.02mまでが碎石、0.02～0.05mが1層のにぶい黄褐色砂泥で粗砂混、0.05～0.1mが2層の褐色焼土で炭混(第1面整地層)、0.1～0.14mが4層の褐色砂泥で炭・焼土混(第2面整地層)、0.14～0.2mが5層の褐色焼土、0.2～0.35mが7・8層の暗褐色焼土・暗オリーブ褐色砂泥の粗砂混じり(第3面整地層)、0.35mが17層の褐色砂泥で小礫混(第4面整地層)となる。

各面で検出した遺構は、第1面が安政度内裏(1855)以降現代までの遺構、第2面は嘉永の火災(1854)で焼失した寛政度内裏以降の遺構、第3面は天明の火災(1788)で焼失した宝永度内裏以

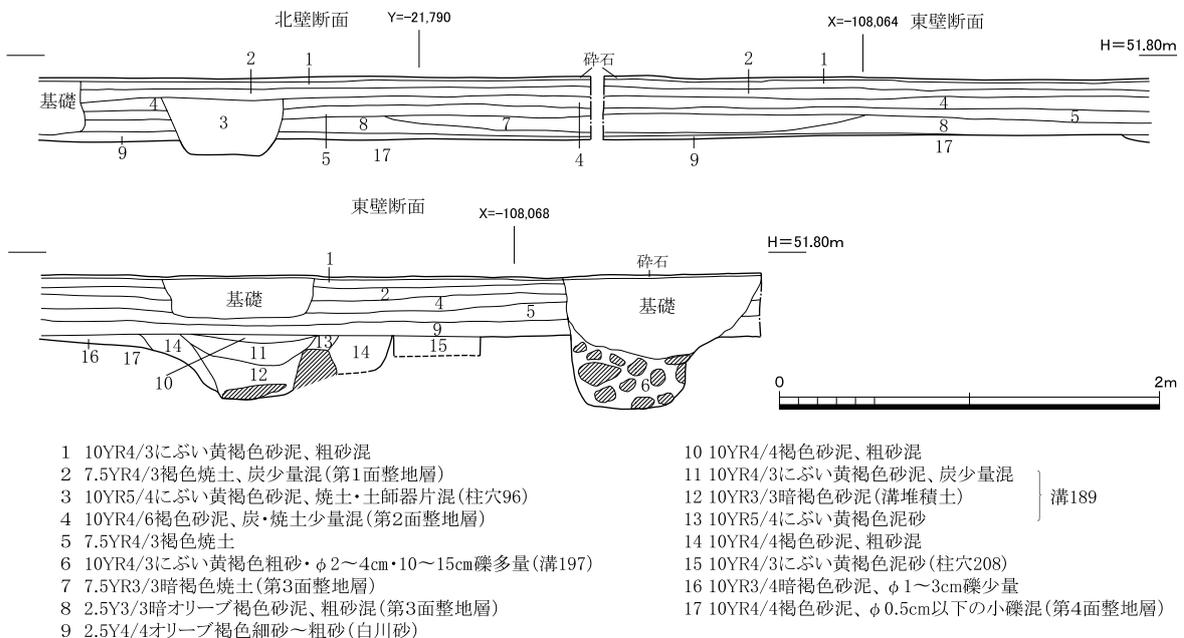


図9 調査区北壁・東壁断面図(1:40)

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代前期 (延宝度内裏前後)	溝146・189・192、柱列1、石列5、集石204、 土坑129・187・196・201・203・205・218	
江戸時代中期 (宝永度内裏以降)	溝102・197、石列3・4、井戸280	
江戸時代後期 (寛政度内裏以降)	建物2、石列2、溝145・150・177・258・262、 土坑82・190・231・232・248・249・250・264・265	
江戸時代末期～昭和時代 (安政度内裏以降)	建物1、石列1、塀1、井戸72、池71、溝239、 土坑224・229	

降の遺構、第4面は宝永の火災（1708）で焼失した延宝度内裏以降の遺構と延宝度内裏以前の遺構を検出した。

（2）第1面（江戸時代末期から昭和時代）（図版1・5・6）

建物1（図11～14）北区で検出した礎石建物である。この建物は解体修理して復元されるため礎石は全て抜き取られている。検出したのは礎石の据え付け穴を28基である。掘形は0.8～0.4mの方形で、据え付け石は花崗岩の切り石が使われている。建物は北側が番所、南側が常居番所に分かれている。番所側は東西2間（5.88m）、南北4間（7.84m）で、北と東には半間の縁（廊下）が付く。常居番所側は東西6間半（12.94m）、南北2間（4.9m）で、東側には半間の縁（廊下）が付く。南には中央に2間分の空間を設け、東西に東西2間（3.92m）、南北3間（5.88m）の建物を取り付く、東側は一部のみを検出した。

池71 常居番所建物の南中央部で検出した漆喰池である。東西2.1m、南北1.9m、深さ0.2mである。北寄りに直径0.7m、深さ0.2mの穴があり、いわゆる魚溜まりと思われる。

井戸72（図10、図版6）常居番所建物の南中央部で検出した井戸である。東西2.4m、南北1.9m、深さ0.8m以上である。本来は石組が組まれていたと思われるが、後世に壊され瓦が廃棄されていた。

堀1（長押堀）建物1と西築地との間に現存する東西方向の堀である。東西4間半（7.1m）で、

基底部の地覆石には花崗岩の切り石が据えられる。土壁の表面は白色の漆喰で化粧が施され、中央部には1間（1.97m）の出入口があり、各柱には南側に添柱が取り付けられている。

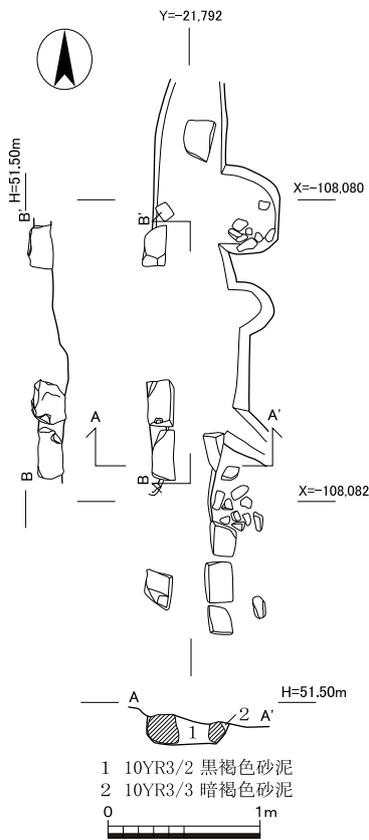


図10 溝239実測図（1：50）

溝239（図10）南区の東で検出した南北方向の石組溝である。石組のほとんどが抜き取られており、側石の1段目を東側で2石、西側で3石と、底部の敷石の一部が残存する。検出長は3.8mで、北と南端は攪乱されて不明だが、掘形幅は0.7m、内法幅0.3m、深さ0.2mほどである。埋土は黒褐色砂泥である。

石列1（図版6）南区で検出した東西方向の石列である。検出長は2.2mで、0.1～0.2m大の河原石が据えられていた。御使番部屋北側の堀に付随する遺構と思われる。

土坑224 南区の南西寄りで検出した南北方向の漆喰遺構である。南北1.8m、東西0.6m、深さ0.3mの長方形を呈する。堆積状態から便所跡と思われる。

土坑229 漆喰遺構224の西側で検出した埋め甕である。上部は攪乱を受け、直径0.39mの甕の底部が残存していた。埋土状況から水甕として使用していたと思われる。

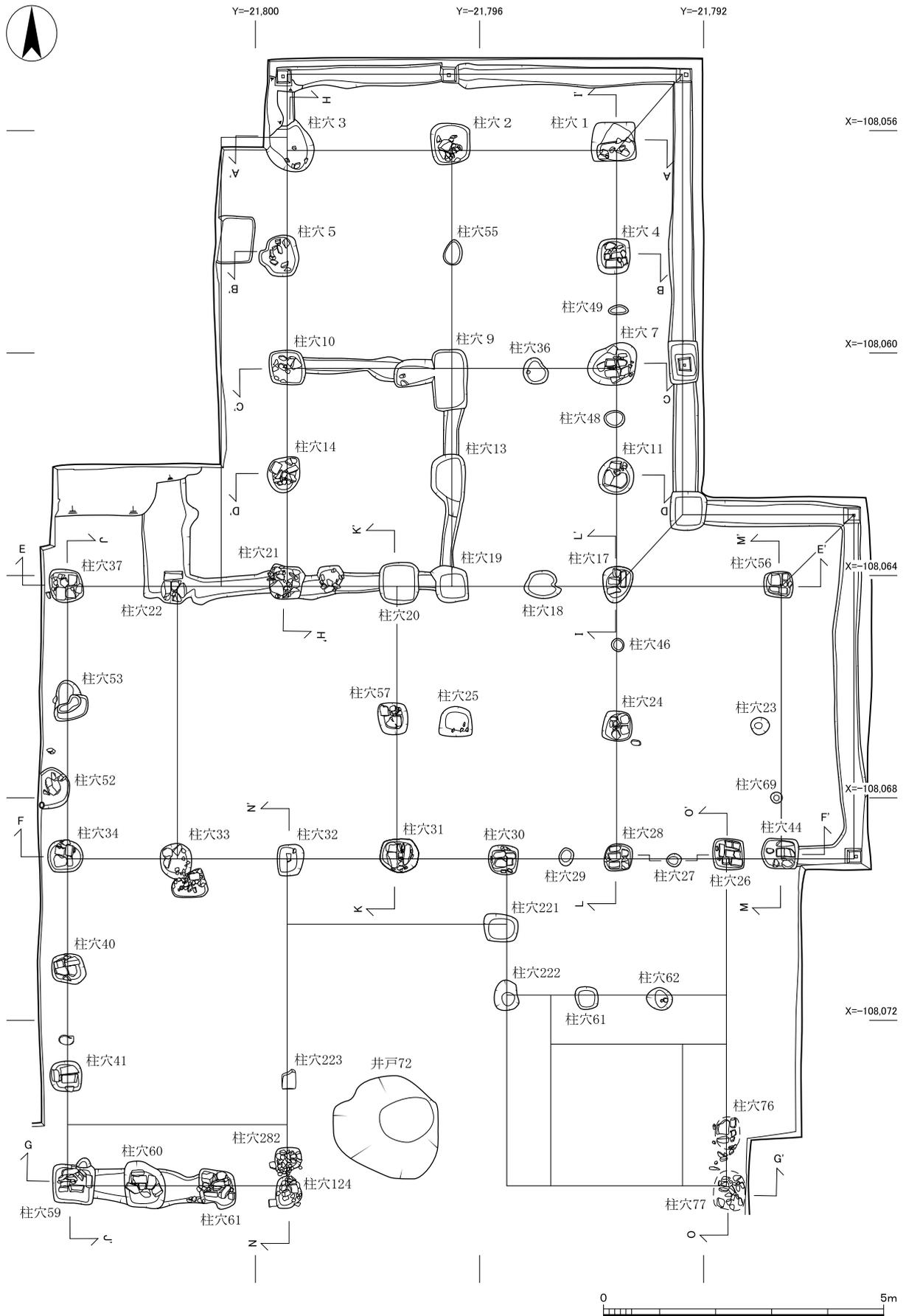


图11 建物1平面图 (1:100)

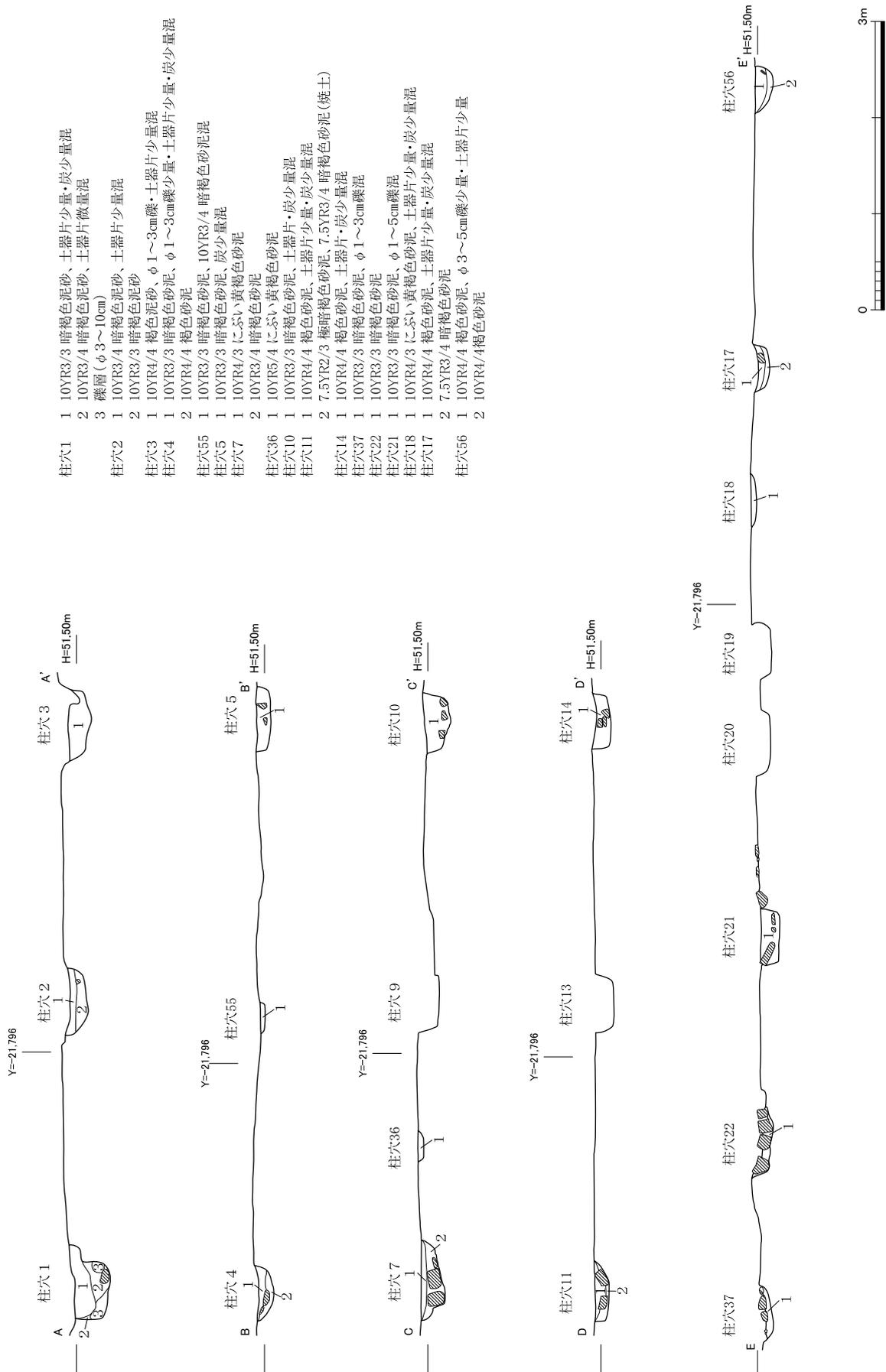


图12 建物1断面图1 (1:60)

(3) 第2面 (江戸時代後期) (図版2・7)

建物2 (図15・16) 建物1の下層で検出した礎石建物である。検出した位置が建物1より2.85m南、0.3mほど東寄りである。東西4間(7.84m)、南北3間(5.88m)で、東・西に半間(0.98m)の縁が付く。番所建物の番所側と考えられる。柱穴97・123の埋土から出土した土塊の組成分析を行った(付章1参照)。

溝150 (図17、図版8) 建物2の北東で検出した東西溝である。検出長は東壁から西へ1.3m、幅0.5m、深さ0.1mで、10~20cm前後の河原石が詰まっていた。

溝177 (図17、図版8) 建物2の北側で検出した東西方向の溝である。検出長は西壁から東へ5.9m、幅約1m、深さ0.3m程で、断面形は逆台形を呈する。埋土には3~40cm大の河原石や花崗岩の割石などが詰まっていた。

土坑190 (図17、図版8) 溝150西端下と溝177東端上の間で検出した土坑である。左・右に0.4~0.6m大の花崗岩の切石を円弧状に並ぶ。溝117・150と同じく建物2に付随する雨落ち溝の関連遺構と思われる。

溝145 (図19、図版8) 北区の南で検出した東西方向の石組溝である。西側は攪乱されていた

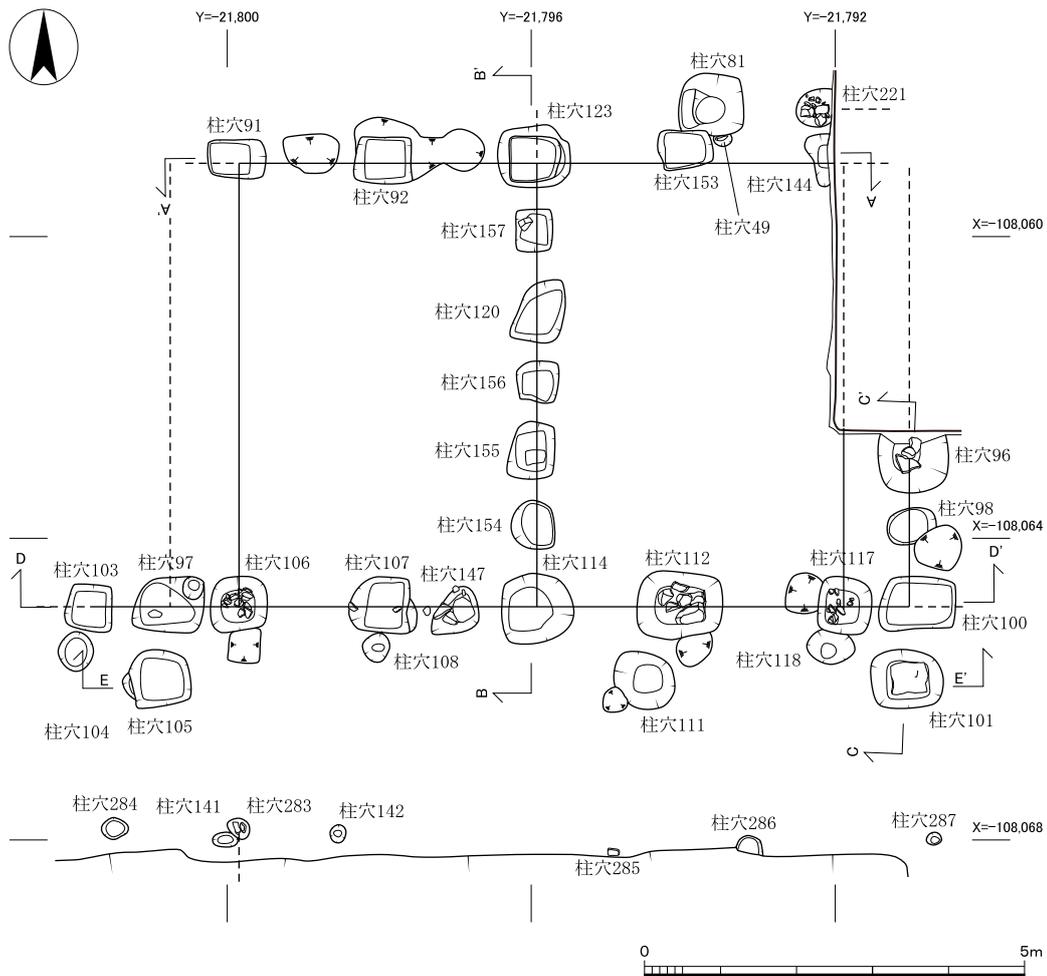
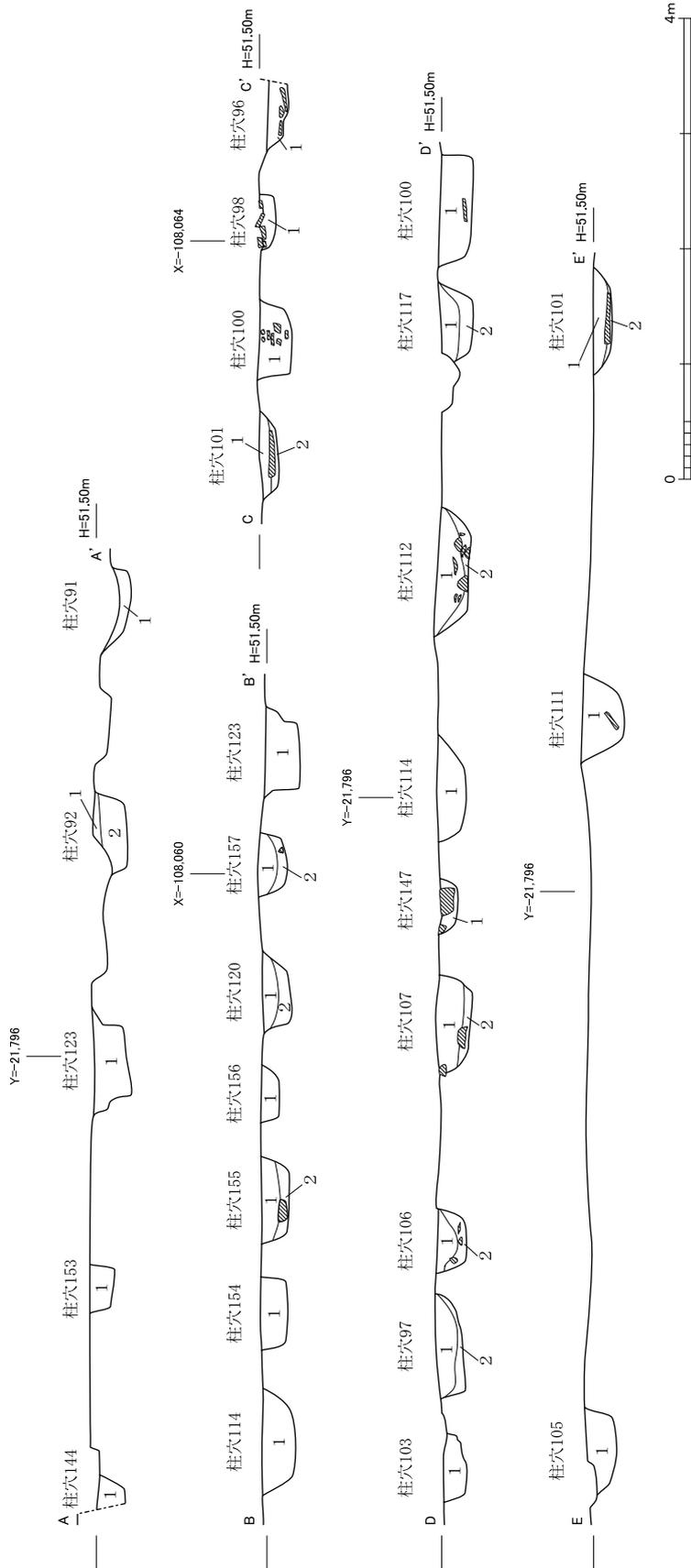


図15 建物2平面図 (1:100)



- | | | | | | |
|-------|---|---|-------|---|-------------------------|
| 柱穴144 | 1 | 7.5YR3/4 暗褐色壤土、 ϕ 6~8cm礫・瓦片微量・炭・土師片少量混 | 柱穴106 | 1 | 5YR3/2 暗赤褐色砂泥、炭・瓦少量混 |
| 柱穴153 | 1 | 10YR4/4 褐色砂泥、炭・土師片微量混 | 柱穴107 | 2 | 10YR3/4 暗褐色砂泥、炭・土器片混 |
| 柱穴123 | 1 | 5YR3/2 暗赤褐色焼土、 ϕ 3~5cm礫・炭少量・瓦混 | 柱穴117 | 1 | 7.5YR3/2 暗褐色砂泥、炭少量混 |
| 柱穴154 | 1 | 7.5YR3/4 暗褐色砂泥 | 柱穴112 | 1 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭少量混 |
| 柱穴155 | 2 | 10YR4/4 褐色砂泥、瓦混 | 柱穴112 | 2 | 10YR3/2 暗赤褐色砂泥、炭少量混 |
| 柱穴156 | 1 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 柱穴117 | 1 | 5YR3/2 暗赤褐色砂泥、土器片少量混 |
| 柱穴157 | 1 | 10YR3/2 暗赤褐色焼土、 ϕ 3~5cm礫・炭少量・瓦混 | 柱穴117 | 2 | 10YR3/4 暗赤褐色砂泥、土器片少量混 |
| 柱穴120 | 1 | 10YR3/2 暗赤褐色砂泥、 ϕ 3~5cm礫・炭少量・瓦混 | 柱穴105 | 1 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、炭微量混 |
| 柱穴123 | 1 | 10YR3/2 暗赤褐色砂泥、 ϕ 1~3cm礫中量・土器片少量混 | 柱穴111 | 1 | 7.5YR3/3 暗褐色砂泥、炭・土器片少量混 |
| 柱穴153 | 2 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 柱穴111 | 2 | 7.5YR3/3 暗褐色砂泥、炭・土器片・瓦混 |
| 柱穴154 | 1 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、 ϕ 1~5cm礫中量・土器片少量混 | | | |
| 柱穴155 | 1 | 7.5YR4/4 褐色泥砂、 ϕ 1~3cm礫中量・土器片少量混 | | | |
| 柱穴156 | 2 | 10YR3/3 暗褐色泥砂、炭・土器片少量混 | | | |
| 柱穴157 | 1 | 10YR4/4 褐色泥砂、 ϕ 1~3cm礫・土器片中量混 | | | |
| 柱穴120 | 1 | 7.5YR4/4 褐色砂泥 | | | |
| 柱穴123 | 2 | 10YR3/4 暗褐色砂泥、土器片少量・瓦中量混 | | | |
| 柱穴153 | 1 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 | | | |
| 柱穴154 | 1 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭少量混 | | | |
| 柱穴155 | 2 | 10YR3/2 暗赤褐色砂泥、炭少量・瓦混 | | | |
| 柱穴156 | 1 | 10YR3/4 暗褐色砂泥、土器片少量・瓦混 | | | |
| 柱穴157 | 1 | 5YR3/2 暗赤褐色砂泥、炭微量混 | | | |
| 柱穴120 | 1 | 5YR3/2 暗赤褐色砂泥、炭少量・瓦混 | | | |
| 柱穴123 | 1 | 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥、土器片少量微量混 | | | |
| 柱穴153 | 1 | 5YR3/2 暗赤褐色砂泥、炭微量混 | | | |
| 柱穴154 | 1 | 5YR3/2 暗赤褐色砂泥、炭・土器片少量混 | | | |
| 柱穴155 | 2 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、炭・土器片微量混 | | | |
| 柱穴156 | 1 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、炭・土器片微量混 | | | |

図16 建物2断面図 (1:60)

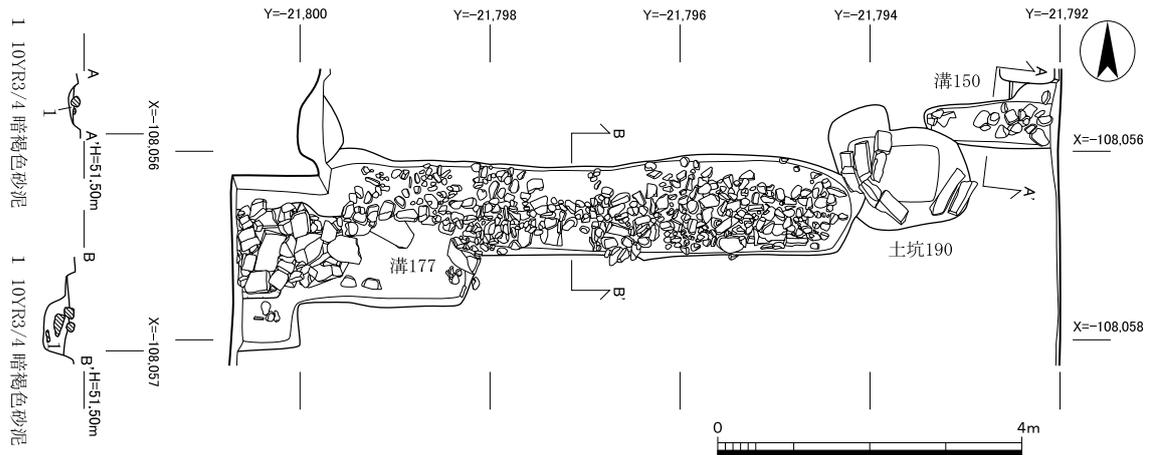


図17 溝150・177・土坑190実測図（1：100）

が、東側は残存していた。検出長は約9mで、東と西に延びる。掘形幅約1.0mで、内幅0.3m、深さ約0.4mである。側石の一部は抜き取られているが、1～2段目が残存している。底部の敷石は完存していた。石材は全て花崗岩である。埋土は焼土層と瓦が多量に破棄されている。下層は溝堆積土のにぶい黄褐色砂泥・粗砂混じりである。番所の南側の内溝にあたる。

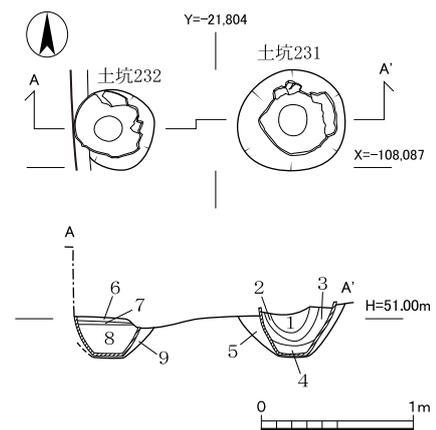
石列2 溝145の南際で検出した東西方向の石列である。東・西側はほとんどが残存していない。検出長は1.8mで、長さ0.3～0.6m、幅約0.1mの花崗岩の切り石が2列に並ぶ。幅約0.2mである。溝145と一体の遺構で、番所の南塀の地覆石と思われる。

土坑82(図版8) 北区の中央部西寄り検出した土坑である。東西3.7m、南北1.8m、深さ0.5m以上で、隅丸方形を呈する。埋土は0.1～0.5m大の花崗岩の割石が多量に廃棄されている。汚水を浸透させ排水するための施設かと思われる。

溝258・262(図版8) 南区の石列1の下層で検出した東西方向に並行する溝である。北側の溝262の検出長は6.1m、幅0.3～0.5m、深さ0.15m、南側の溝258が9.4m、幅0.2～0.4m、深さ0.2mである。埋土はいずれも黒色砂泥・礫混じりである。御使番部屋の北側の塀に付随する遺構である。

土坑231・232(図18、図版8) 南区の南西隅で東西に甕底部が据えられた状態で、2基並んで検出した。上部は攪乱され失われていたが、胴部中位から底部が残存していた。掘形の直径0.8～1.2mで、埋土は焼土層が堆積する。御使番部屋の便所にあたる。

土坑248 南区の中央部西で検出した土坑である。東西4.4m、南北2.2m、深さ0.5m以上で、方形を呈する。埋土は暗褐色砂泥・炭混じりで、多量の土師器皿



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥、5YR4/6 赤褐色焼土ブロック混
- 2 5YR4/6 赤褐色焼土
- 3 10YR1.7/1 黒色炭
- 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂、φ1～2cm礫多量混
- 5 10YR3/2 黒褐色泥砂、φ2～5cm礫混
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂
- 7 10YR1.7/1 黒色炭
- 8 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色中砂、粘質、φ2～3cm礫混
- 9 10YR3/2 黒褐色泥砂、φ2～5cm礫混

図18 土坑231・232実測図（1：50）

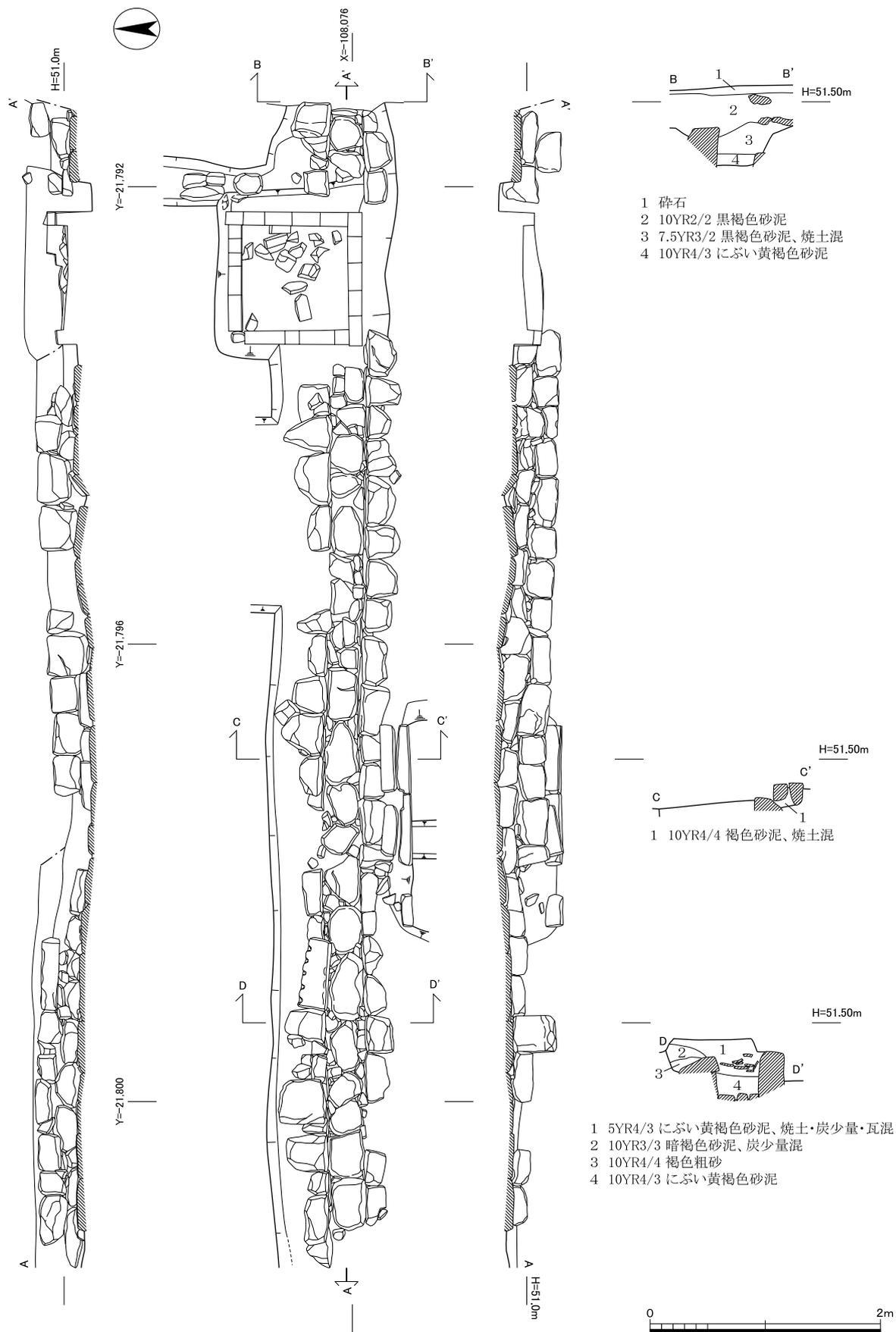


図19 溝145実測図 (1 : 50)

が含まれる。

土坑249 土坑248の東で検出した土坑である。東西1.7m、南北1.4m、深さ0.2mで、隅丸方形を呈する。埋土は黒褐色砂泥・炭混じりで、多量の土師器皿が含まれる。

土坑250 溝258の南で検出した土坑である。東西1.2m、南北0.9m、深さ0.2m以上で、方形を呈する。埋土は黒褐色砂泥・粗砂・炭混じりで、多量の土師器皿を含む。

土坑264 南区の南側で検出した土坑である。直径0.7mの楕円形で、深さ0.2mである。埋土は黒褐色泥砂で、土師器皿や陶磁器がまとまって出土した。

土坑265 南区の南壁際で検出した土坑である。東西2.8m、南北0.8m以上で、南の調査区外に延びる。深さ0.4m以上である。埋土は褐灰色砂泥の炭混じりで、土師器・陶磁器などが多量に含まれる。

(4) 第3面 (江戸時代中期) (図版3・9)

溝102 (図20、図版10) 北区南寄りで検出した東西方向の石組溝である。東壁から西へ1.6m、直角に折れて北へ2.6m、直角に西へ折れ11.4m、三たび直角に折れて南へ1.2m、西へ折れて調査区外へ延びる。検出長は計約16.8m、掘形幅1.2m、石組の内法幅0.4m、深さ0.2m前後である。側石は0.3~0.8mの花崗岩の切り石で積み、1段目のみ部分的に残存する。底部の敷石はほとんどが残存しており、花崗岩の切石と割石で敷かれている。埋土の上層は火災後の片付けなどに伴う焼

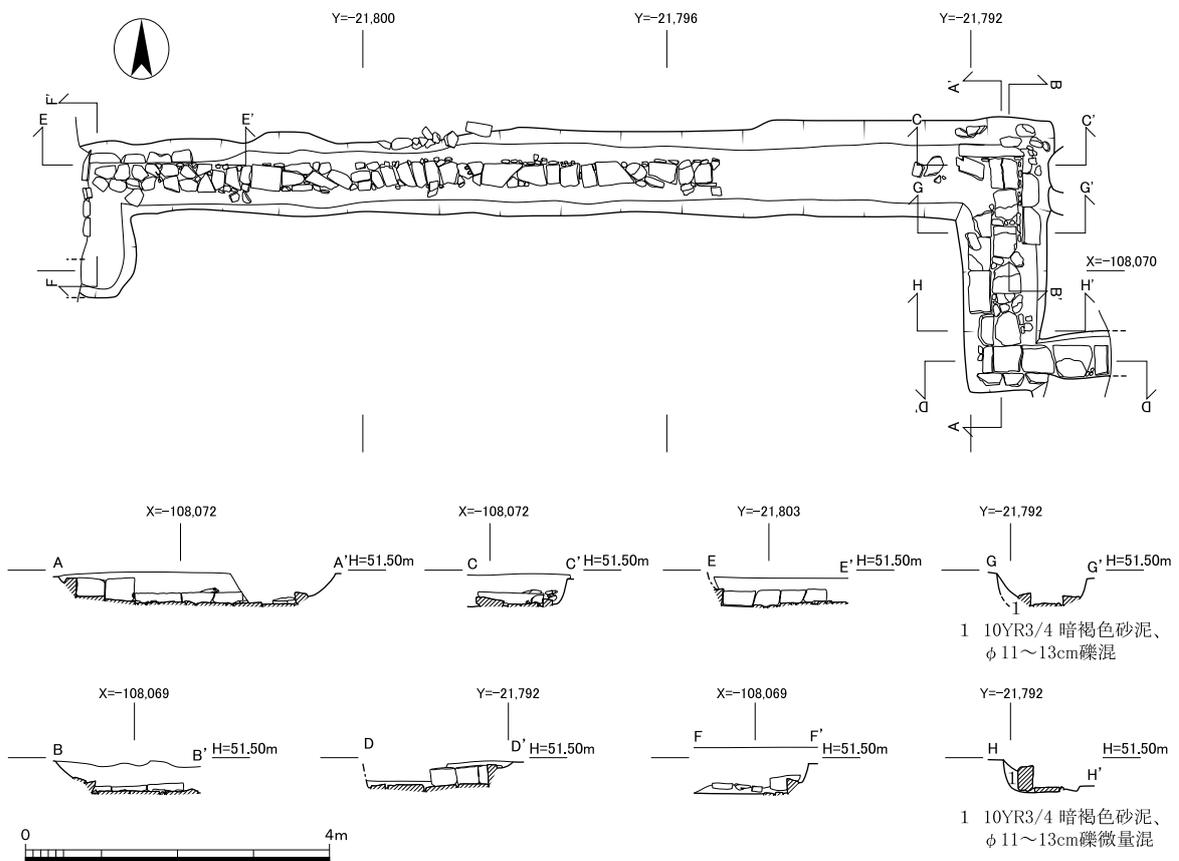


図20 溝102実測図 (1:100)

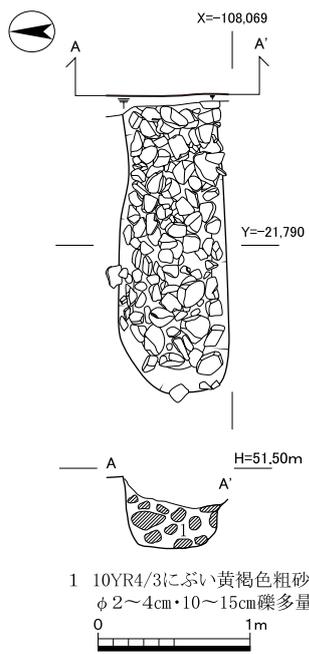


図21 溝197実測図 (1 : 50)

土層で、下層は溝堆積層のオリブ黒色粗砂である。番所建物の北側の雨落ち溝の位置にあたる。

石列3 溝102の西部北1.1mで検出した東西方向の石列である。検出長は4.0mで、0.1m前後の河原石を南に面を揃えて据えている。溝102との間には1cm前後の石が敷かれ強く締まった面で、路面状を呈する。

石列4 石列3の2.1m北で検出した東西方向の石列である。検出長は2.5mで、0.1~0.2m前後の河原石が据えられている。

溝197 (図21、図版10) 溝102の東側で検出した東西方向の溝である。検出長は東壁から西へ2.0m、幅0.7m、深さ0.45mで、埋土は0.05~0.2m大の河原石が詰まっている。番所建物の東側に取り付く扉に伴う雨落ち溝と思われる。

井戸280 (図版10) 南区やや西寄りで見出した石組井戸である。掘形直径2.0m、石組の内径1.0m、深さ0.5m以上で、底部

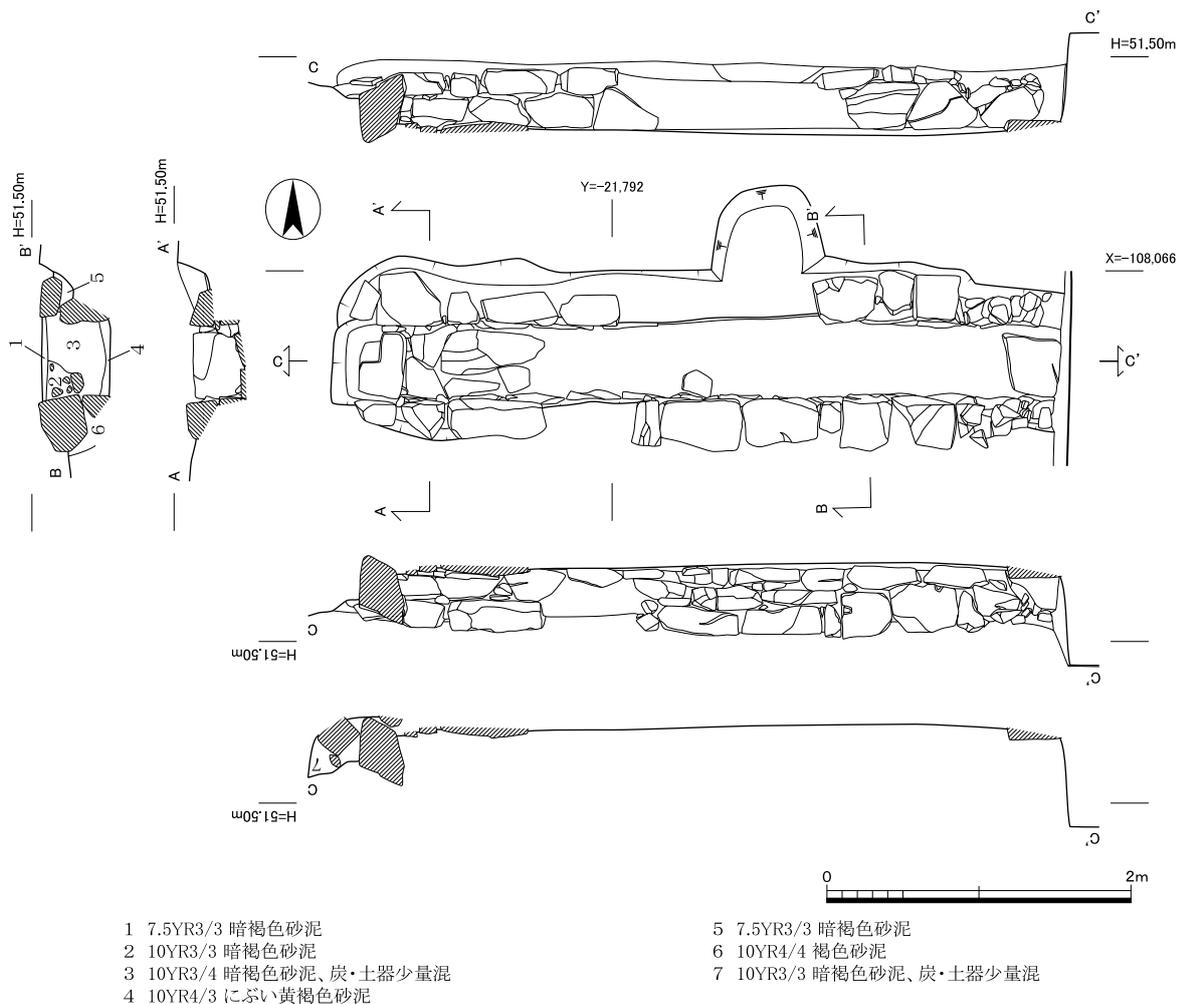


図22 溝189実測図 (1 : 50)

は未確認である。石組は0.2～0.4m大の花崗岩が使われている。番所側の井戸にあたる。

(5) 第4面（江戸時代前期）（図版4・11）

土坑187 溝102の北西側で検出した土坑である。東西2.0m、南北1.3m以上で、南は溝102に切られる。深さ0.4m以上で、隅丸方形を呈する。埋土は暗褐色粗砂・泥砂混じりで、炭・焼土を含み、多量の土師器皿が出土した。

溝189（図22、図版12） 北区の中央部東で検出した東西方向の石組溝である。検出長は東壁から4.8m、掘形幅0.8m、石組の内法幅1.2m、深さ0.25mで、東側は調査区外に延びる。側石はほとんど残存していたが、底部の敷石は一部のみ残存する。側石は0.2～0.6m大の花崗岩の割石で、2～3段が積まれている。敷石も花崗岩の割石である。埋土は上層が暗褐色砂泥の炭混じりで、下層は褐色粗砂の溝堆積土がある。番所建物の北側の雨落ち溝にあたる。

石列5（図23、図版12） 北区の中央部に前述石列3の下層、やや北寄りで検出した東西方向の

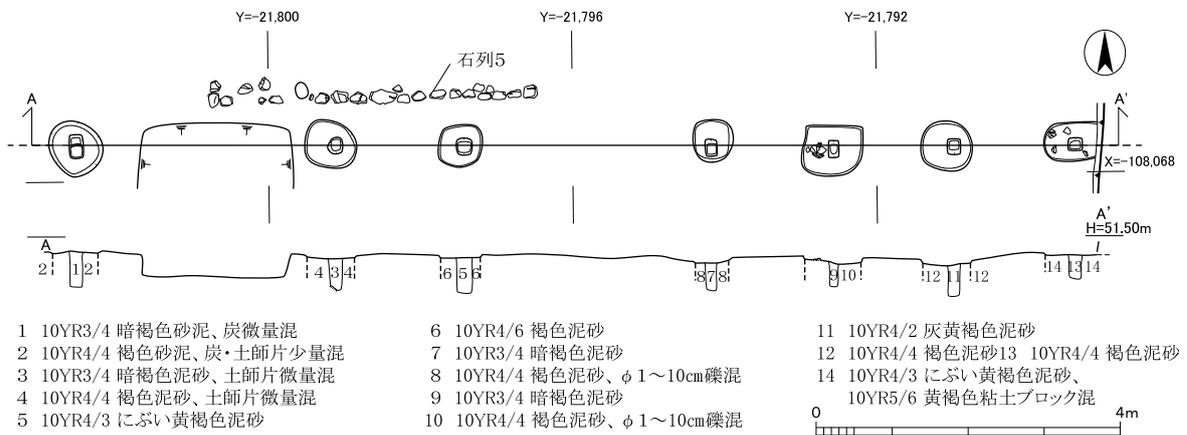


図23 柱列1・石列5実測図（1：100）

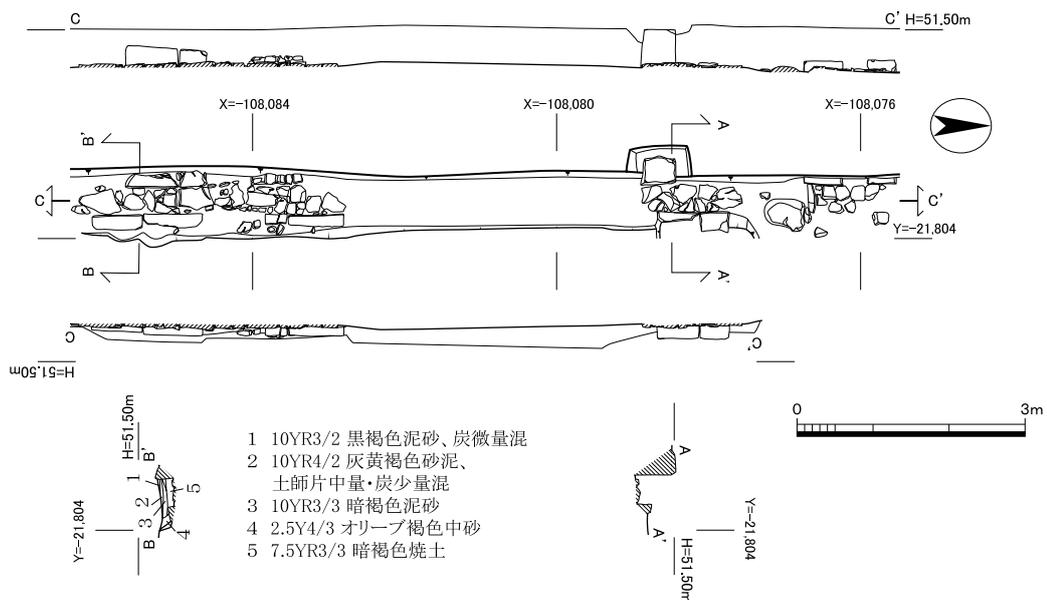
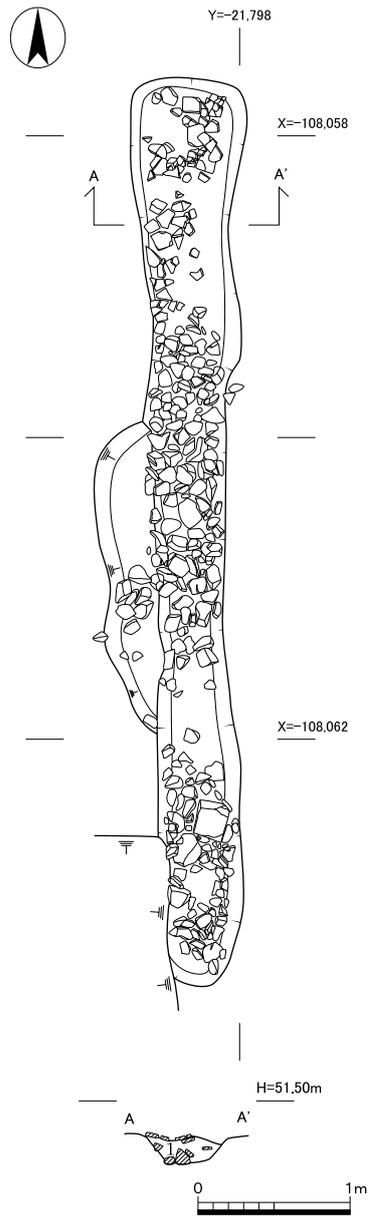
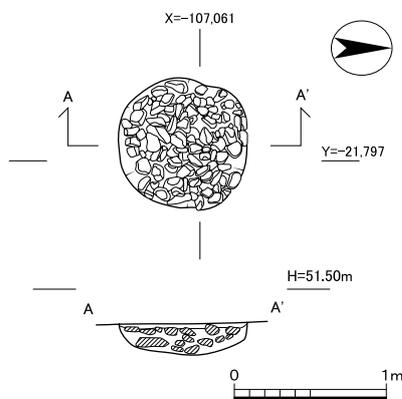


図24 溝146実測図（1：100）



1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
 図25 溝192実測図 (1 : 50)



1 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥、土師片・炭微量混
 2 礫層(φ2~10cm)、10YR3/4 暗褐色砂泥混
 図26 集石204実測図 (1 : 50)

石列である。検出長は4.3mで、南向きに面を揃えて0.1～0.4m前後の河原石を据えている。

柱列1 (図23、図版12) 石列5の0.5m南で検出した東西方向の柱列である。掘形は一辺約0.6mの方形で、柱当りが0.1～0.15mの方形の柱穴7基を検出した。柱間は東から3間は1.6mの等間、4間目が3.2mとなり、5間目から西は1基が攪乱で検出されなかったが3間で1.6mの等間である。西築地と番所建物の間の塀に伴う遺構で、4間目が通路にあたると思われる、現塀1と構造が同じである。

溝146 (図24、図版12) 北区の南西隅と南区の南西隅で検出した南北方向の石組溝である。石組はほとんど攪乱され、残存していたのが北側と南側である。検出長は北が2.2m、南が3.6mで、中央部は攪乱されている。北と南の調査区外に延びる。掘形は1.0m以上で、西肩は調査区外、石組の内法幅0.6m、深さ0.45mである。側石は1段目のみで、0.4～0.7m大の花崗岩の切石が使われている。底部の敷石は花崗岩の割石である。埋土は上層には焼土層で、下層には溝が機能していた際のオリブ褐色粗砂が堆積する。宝永度内裏以前の拡張前の西築地内溝と思われる。

土坑129 北区の南西側で検出した土坑である。東西3.0m、南北2.4m以上、深さ0.2m以上で、不定形である。埋土は暗褐色砂泥・粗砂・炭混じりで、多量の土師器皿を含む。

溝192 (図25、図版12) 北区の北西で検出した南北方向の溝である。検出長は6.0m、幅約0.6m、深さ0.2mで、断面形はU字形を呈する。埋土は0.03～0.2m大の河原石が詰まっている。建物の雨落ち溝と思われる。

土坑203 石列5の北西で検出した石組土坑である。直径1.4m、深さ0.1mの外周に、0.1～0.4m大の花崗岩と河原石を円形に配する。埋土は褐色砂泥である。性格は明確ではないが排水施設と思われる。

集石204 (図26、図版12) 溝192の東寄りで検出した。直径0.85mの円形を呈する。深さは0.2mあり、内部に3～5cm大の河原石を充填している。雨水を浸透させ排水する施設である。

土坑196 溝189の北際で検出した土坑である。東西1.5m、南北0.7mの方形を呈する。深さ0.3m以上で、埋土は暗褐色砂泥で粗砂・炭混じりで、多量の土師器皿などが出土した。

土坑201 石列5の北側で検出した土坑である。南北2.2m、東西1.3mで、不定形である。深さ0.2m以上で、埋土は暗褐色粗砂の炭混じりで、土師器皿・貝・魚骨などが多量に出土した。

土坑205 石列5の西端で検出した土坑である。東西2.0m以上で、西は調査区外に延び、南北1.2m以上で、南は攪乱されている。深さ0.15m、埋土は暗褐色粗砂・炭まじりで、土師器皿を多量に含んでいる。

土坑218 土坑205の下層で検出した土坑である。東西1.3m、南北0.4m以上で、形状は不明である。埋土は褐灰色泥砂・粗砂・炭混じりで、土師器片を含んでいる。

土坑281 南区の南側で検出した土坑で、南北1.1m、東西0.8mの方形を呈し、深さ0.4mである。埋土はにぶい赤褐色焼土の炭混じりで、壁土が出土した。壁土は組成分析を行った(付章1参照)。

3. 遺物

出土した遺物は整理箱にして58箱で、その内訳は土器類40箱で瓦類が18箱である。出土した遺物は江戸時代前期から昭和時代初期のものである。内容は土器類ではほとんどが土師器皿で、次いで肥前の染付、京焼系の施釉陶器である。瓦類では軒瓦・棟丸瓦などが出土している。少量であるが銭貨、金属製品、石製品、貝、魚骨類も出土している。

記述は時代の新しい順に報告する。なお、出土遺物の時期は京都の土器編年¹⁾に準じた。

(1) 土器・土製品 (図27～43、図版13～16)

昭和時代の土器 (20世紀前半)

土坑229 (図27) 1は信楽産の甕底部で、直径39cm、体部外面に黒釉が施されている。底部外面には「昭和十七年四月」「第貳拾四號」と墨書、中央に「宮」の宮内省の印、右下に「しがらき」の刻印がある。



図27 土坑229出土土器実測図 (1 : 8)

江戸時代後期 (京都XIV期古段階から中段階、18世紀後半から19世紀中頃)

土坑265 (図28、図版16) 土師器、染付、施釉陶器、金属製品、瓦などが出土した。2～11は土師器皿Sで、口径10.7～12.2cm、器高1.6～1.9cmであ

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、銭貨		銭貨2点		
江戸時代前期	土師器、土師質土器、磁器、施釉陶器、焼締陶器、土製品、瓦、銭貨、金属製品、貝、魚骨、鳥骨		土師器84点、土師質土器9点、磁器6点、施釉陶器2点、焼締陶器3点、土製品3点、瓦4点、銭貨2点、金属製品1点		
江戸時代中期	土師器、土師質土器、磁器、施釉陶器、焼締陶器、瓦、銭貨、金属製品、石製品、貝、魚骨		土師器12点、土師質土器2点、磁器14点、施釉陶器3点、土製品2点、瓦5点、銭貨2点、金属製品8点、石製品1点		
江戸時代後期	土師器、土師質土器、磁器、施釉陶器、焼締陶器、土製品、瓦、銭貨、金属製品、貝、魚骨		土師器67点、土師質土器4点、磁器22点、施釉陶器6点、焼締陶器4点、土製品1点、瓦21点、埴1点、銭貨4点、金属製品2点		
江戸時代末期～昭和時代	土師器、磁器、施釉陶器、瓦、金属製品		施釉陶器1点		
合計		73箱	297点 (15箱)	0箱	58箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より15箱多くなっている。

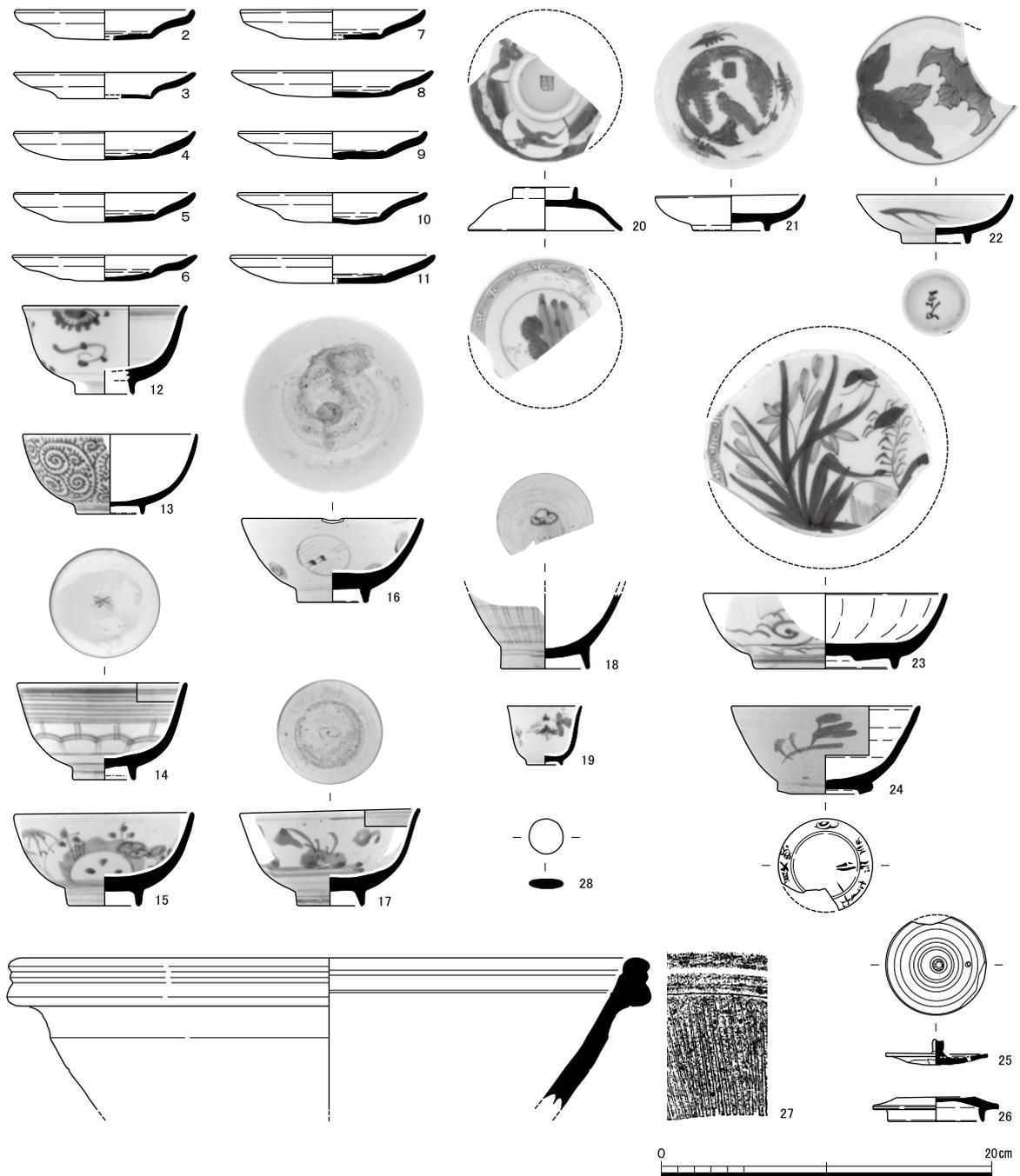


図28 土坑265出土土器実測図（1：4）

る。底部は平らで、体部は屈曲して大きく開く、口縁部が内傾し、端部は上方につまみ上げたものが多い。体部から口縁部の長さが大きい。凹線状圏線は細い棒状の器具で付加された加飾型のものである。11の外表面は丁寧なナデ調整が施されており、蓋の可能性はある。12は瀬戸美濃系染付碗で、外面に草花文で、内面口縁部には帯状の横線がある。13～18は肥前染付碗である。13は器壁が薄い、小丸碗で外面に蛸唐草文。14～17は器壁が厚い、14は横縞文、15・17は草花文、16は丸文である。16・17の見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、中央に丸文を描く。18はいわゆる広東碗で、外面縦・横線、内面にも横線と見込み草木文がある。19は肥前染付小杯で、器壁は薄く、口縁部はやや反る。外面に草木文である。20は肥前染付蓋で、外面に鳥・草木文、内面に口縁部に雷文、見込み

に草木文。21・22は染付皿で、21の内面に鳥と草木文、22は草花文である。産地は不明。23は瀬戸美濃系染付鉢で、外面に唐草、内面に草花文である。24～26は京焼系の陶器である。24は椀で、内外面とも透明釉を施す。外面には鉄絵で草木文を描く。高台畳付けに「月」・「火」・「炊」などの墨書がある。25は急須の蓋。26は合子の蓋で、灰釉を施す。27は堺・明石系の播鉢で、やや太い櫛目が全面に施される。28は土師質の土製品で、直径2.1cm、厚さ0.6cmの円盤状を呈しており、土製の基石である。京都XIV期中段階に属す。

土坑264(図29) 土師器、染付、施釉陶器などが出土した。29は土師器の蓋で、口径は12cm前半である。天井部は平坦で、

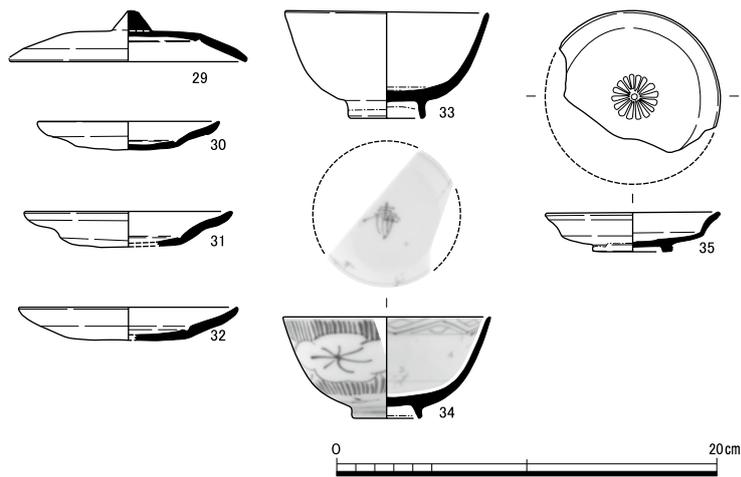


図29 土坑264出土土器実測図(1:4)

天井部は平坦で、屈曲して口縁部へ下傾する。口縁部から天井部はナデ調整を施す。やや大きめの三角柱のつまみが付く。30～32は皿Sで、口径9.4～11.4cm、器高1.6～1.9cmである。底部は平らで、体部は屈曲して大きく開き、口縁部は内傾し、端部は上方につまみ上げられる。凹線状圏線は付加型である。33は磁器椀で、見込み

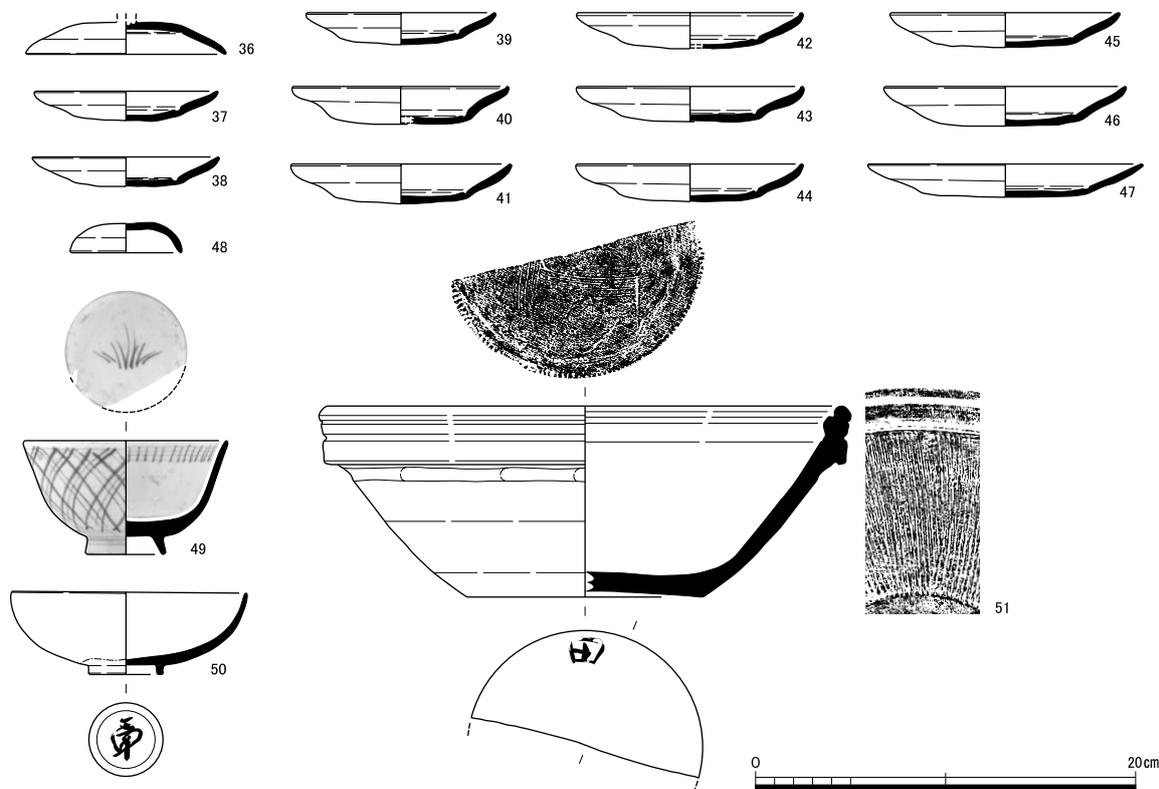


図30 土坑249出土土器実測図(1:4)

は蛇ノ目釉剥ぎ、内面に透明釉、外面には褐釉を施す。産地不明。34は瀬戸美濃系の染付椀で、内面見込みには「寿」、口縁部には襷文風文、外面には草花風な文を描く。35は京焼系皿で、畳付け以外の内外面に褐釉を施す。見込みに15弁菊花文が型押しされている。京都XIV期中段階に属す。

土坑249(図30、図版13) 土師器、染付、施釉陶器、瓦、金属製品などが出土した。36は土師器蓋で、口径10.4cm。天井部から湾曲して口縁部へ下傾する。内外面ともナデ調整が施す。つまみは欠損している。37～47は土師器皿Sで、口径9.6～14.4cm、器高1.7～2.1cmである。底部は平らなもの丸味のあるものがある。体部は屈曲して大きく開き、口縁部が内傾し、端部は上方につまみ上げられるものが多い。凹線状圏線は付加型。47は内外面とも丁寧なナデ調整が施され、凹線も浅いU字形の凹線状圏線が付加されている。三千院所蔵の天盃²⁾に類似している。48は京都産の焼塩壺蓋。49は肥前染付椀で、体部は厚みがあり、口縁部は外反する。見込みは草文、内面口縁部に格子文。外面には斜格子文。50は京焼系平椀で、器高は低く、体部はやや厚みがあり、口縁部は内湾する。高台内に墨書があるが判読できない。51は堺・明石系の播鉢で、播目は全面に施されている。底部外面に「田」字の墨書がある。京都XIV期中段階に属す。

土坑248(図31、図版16) 土師器、染付、施釉陶器、土製品、瓦、金属製品などが出土した。52は土師器蓋で、口径14cmである。内外面とも丁寧なナデ調整が施す。つまみは欠損する。53～59は土師器皿Sで、口径9.6～12cm、器高1.9～2.2cmである。底部がやや丸味のあるものと平らなものがある。体部は屈曲して外へ開き、口縁部は内傾するが端部は上方するものが少ない。凹線状圏線は付加型。60～63は肥前染付椀である。60は器壁が厚い、いわゆる「くらわんか茶椀」系である。外面に草花文。61～63は器壁の薄い丸椀系で、61は外面に草木文、62は外面に草木と垣根、

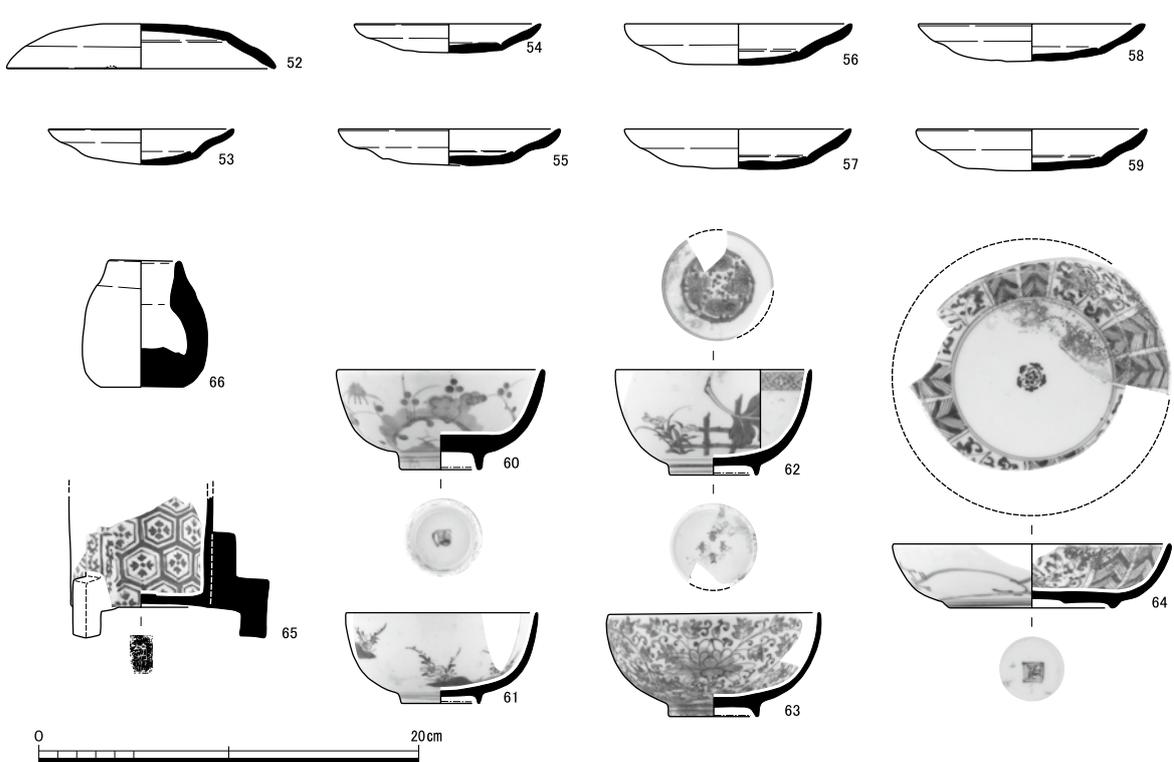


図31 土坑248出土土器実測図(1:4)

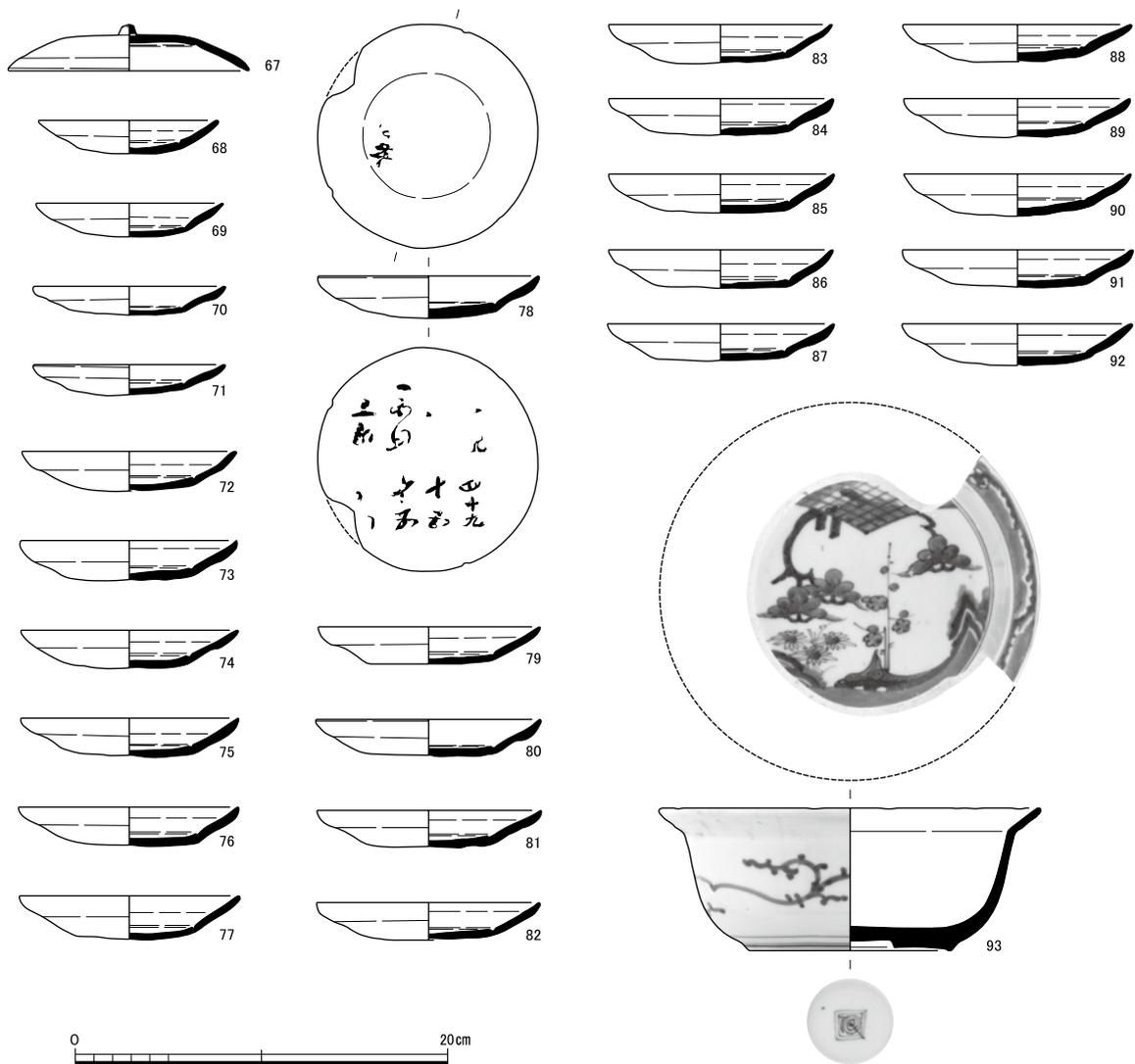


图32 土坑250出土土器实测图（1：4）

土坑231



土坑232

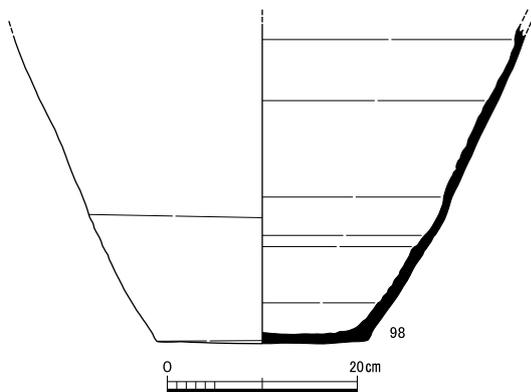
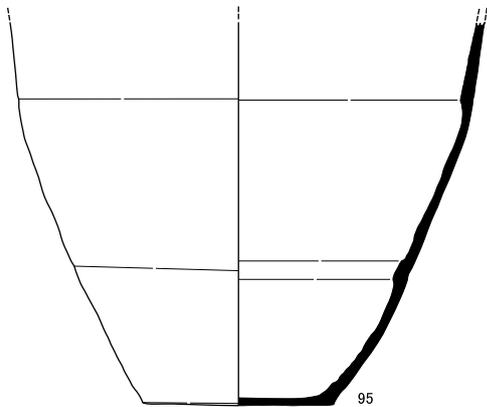


图33 土坑231·232出土土器实测图（1：4、95·98のみ1：8）

内面の見込みに草花文、口縁部には四方襷文。高台内に「富貴長春」。63は外面に唐草文。64は肥前染付鉢で、高台は蛇ノ目凹形、体部は内湾する。外面に唐草文、内面の見込みに五弁花文、側面に芙蓉手皿の模倣文。高台内には「福」銘。体部には焼継痕が見られる。65は京焼の筆置きである。三足脚が付く。外面体部に亀甲文、脚部には唐草文を描く。底部外面に「錦光山」の刻印。66は京都産の塩壺身で、

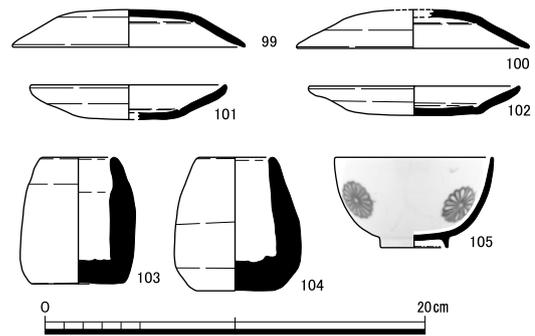


図34 溝145出土土器実測図(1:4)

口径3.6cm、器高6.7cmである。体部は内湾し、口縁部は直立ぎみである。口縁部内外面は横ナデ、体部外面はナデ調整を施される。京都XIV期中段階に属す。

土坑250(図32) 土師器、染付、施釉陶器、金属製品などが出土した。67は土師器蓋で、口径12.8cm、器高2.5cmである。天井部から湾曲して口縁部にいたる。内外面ともナデ調整を施される。68～92は土師器皿Sで、口径9.6～12.4cm、器高1.6～2.4cmである。底部はやや丸味のあるものが多い見られる。体部はやや屈曲して外へ開く、口縁部はやや内傾して、端部は丸くおさまるものと尖るものがある。凹線は付加型。78の外面に「四十、十五、十五など」、内面は判読不明の墨書がある。93は肥前染付鉢で、内は青磁である。高台は蛇ノ目凹形、体部はやや開きぎみで、口縁部は屈曲して開く。外面体部には唐草文、口縁部内面に草花文が巡り、見込みには草木文が描く。高台内には「福」銘。京都XIV期古段階から中段階に属す。

土坑231・232(図33、図版16) 土師器、施釉陶器、焼締陶器、瓦、銭貨などが出土した。94・96・97は土師器皿Sで、口径11.7～11.8cm、器高1.8～1.9cmである。扁平な底部から体部は屈曲して外へ開き、口縁部は内傾して端部は丸くおさまる。凹線は付加型。95・98は信楽甕で、底部から体部の中位までが残存する。体部は内湾ぎみに開く。外面底部を除き鉄泥が施される。94・95は土坑231、96～98は土坑232出土。京都XIV期古段階から中段階に属す。

溝145(図34、図版16) 土師器、染付、施釉陶器、土師質土器、瓦、金属製品などが出土した。99・100は土師器蓋で、内外面ともナデ調整を施される。101・102は土師器皿Sで、口径10.3cm・11.0cm、器高1.6cm・1.9cmである。扁平な底部から体部はやや屈曲して外へ開き、口縁部はやや内傾して、端部は丸くおさめる。凹線は付加型。103・104は京都産の焼塩壺身で、円柱状の粘土塊に、棒状の器具を差し込んで形作りする。103は口径3.9cm、器高6.8cm、体部・口縁部は内湾する。口縁部の内外面とも横ナデ調整を施される。104は口径3.9cm、器高7.1cm、底部から体部下位は外へ開き、中位から口縁部は内傾する。口縁部の内面は横ナデ、外面は口縁部から体部中位まで横ナデ調整を施される。105は肥前染付小椀で、体部は内湾する。外面にコンニャク印判の十六弁菊の丸文を描く。京都XIV期古段階に属す。

江戸時代中期(京都XIII期新段階、18世紀後半)

井戸280(図35) 土師器、染付、施釉陶器、土師質土器、瓦などが出土した。106～115は土師器皿Sで、口径10.2～12.4cm、器高1.9～2.3cmである。底部は丸味をもつものと平らなものがある

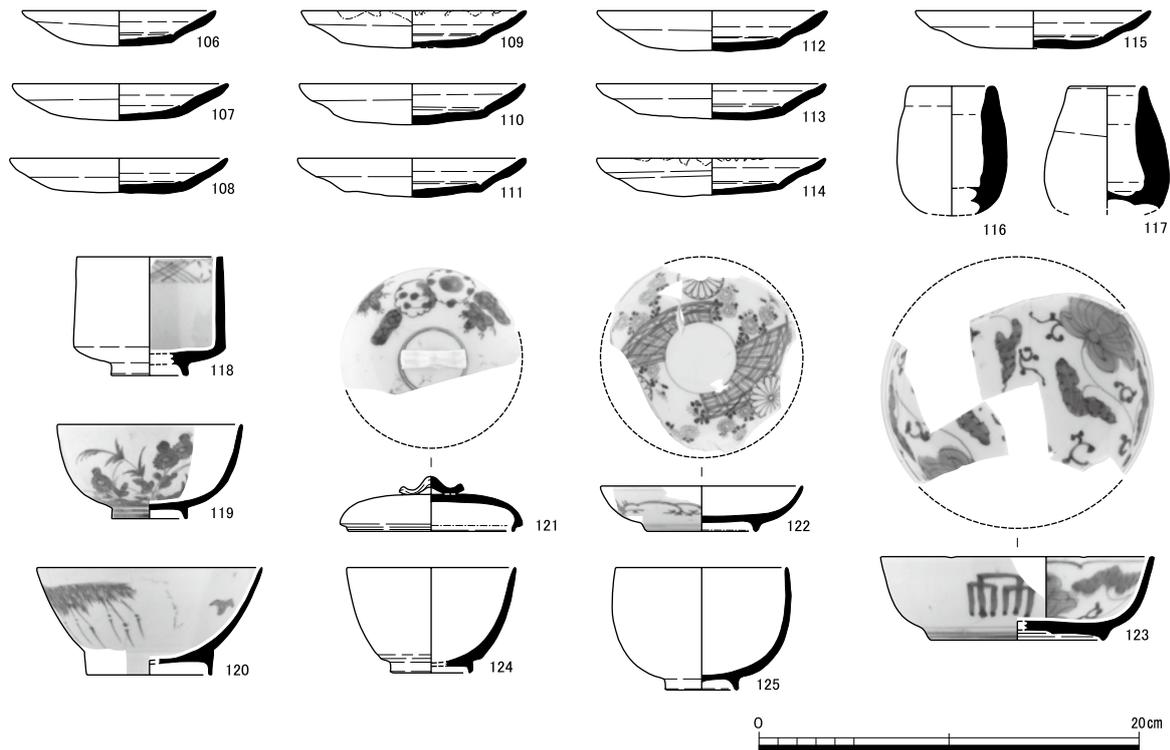


図35 井戸280出土土器実測図（1：4）

る。体部からやや屈曲ぎみに開く、口縁部は内傾し、端部は丸くおさまるものと尖るものがある。凹線状圏線の位置が体部側へやや上がるものが少数見られる。116・117は京都産の塩壺で、口径3.8cm・4.4cm、器高6.5cm・6.8cmである。底部は丸みもち、体部から口縁部は内湾する。体部外面はナデ、口縁部の内外面は横ナデ調整を施される。118～122は肥前染付である。118は外面青磁の筒形椀で、内面口縁部に襷文が巡る。119は小丸椀で、外面に草花文。120は小広東椀で、外面に草花文と鳥文を描く。121は鉢の蓋で、外面に草花文。122は皿で、外面に唐草文、内面には十六弁の菊花文と草花文・垣根を描く。作りは丁寧で、器壁は薄く仕上げられ、豊付けはナデ調整を施す。禁裏から伊万里（肥前）に注文された製品である。³⁾123は瀬戸美濃系の染付鉢で、高台は蛇ノ目凹形。釉に貫入が入る。外面に源氏香の図文、内面には草花文を描く。124・125は京焼系の椀で、124は体部から内湾して口縁部は開く。125は体部から口縁部は内湾する。胎土は灰白色で密である。124は淡い乳白色の透明釉、125は浅いオリーブ灰色の透明釉が施される。京都XIII期新段階に属す。

溝102（図36、図版16）土師器、染付、施釉陶器、土師質土器、瓦、金属製品、銭貨などが出土した。126・127は土師器皿Sで、口径10.2cm・11.9cm、器高1.8～2.1cmである。底部は丸味をもち、体部は外へ開き、口縁部は内傾し、端部は丸くおさまる。凹線状圏線は体部側にやや上がる。128～134は肥前染付で、128・129は丸椀、130～133は鉢の蓋、128・133は外面に寿文字と草文、128は見込みに寿・草文、口縁部には四方襷文が巡る。129・130は外面に小杉文。131は外面に草花文。132は外面に寿・福文字・扇文。134は外面が青磁染付の鉢で、高台は蛇ノ目凹形、体部は内湾ぎみに開き、口縁部は屈曲して外向する。内面見込みに花文、口縁部には草花文が巡る。高台

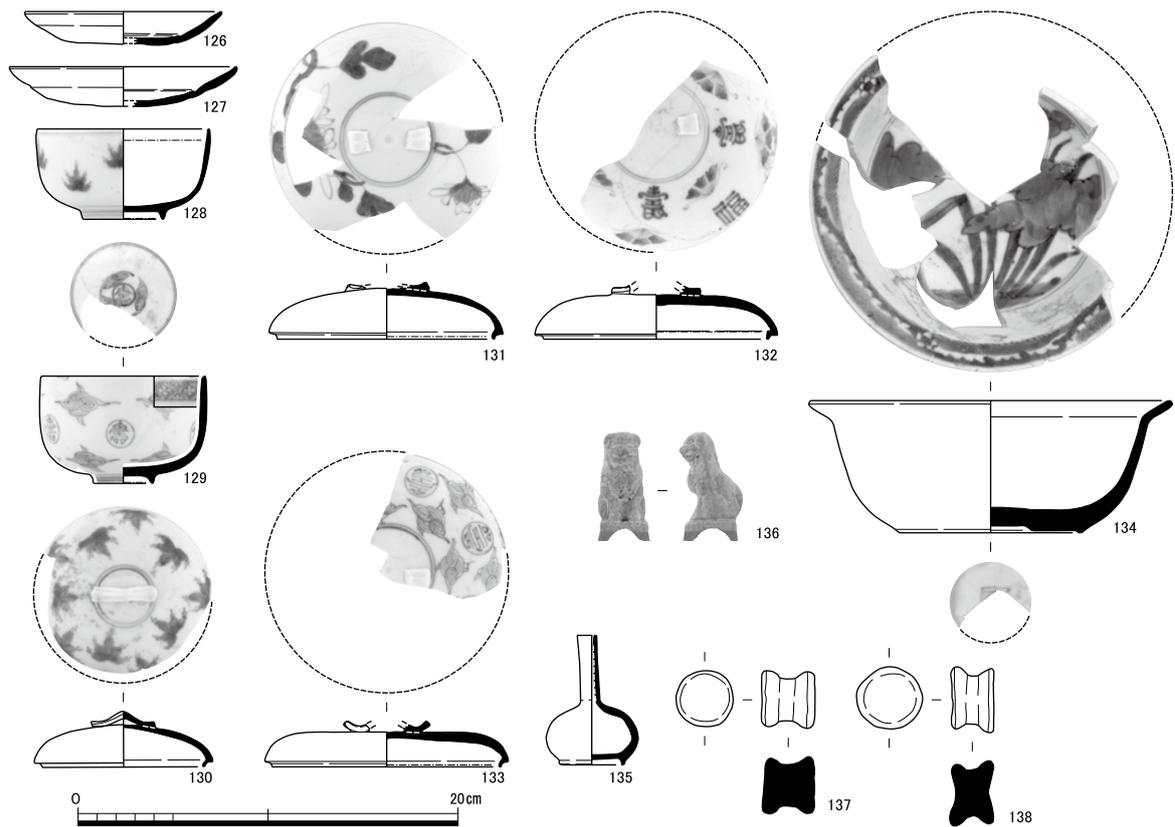


図36 溝102出土遺物実測図（1：4）

内に「福」銘。135は白磁の小瓶。136は京焼の狛犬の置物である。高さ5.8cmで、底部には四脚が付く。二次焼成（火災）で釉が変色している。137・138は土製の組紐錘で、器高2.3cm・2.8cmである。胴部が窪み、胎土は砂粒混じりで粗い。全面にナデ調整を施される。京都XIII期新段階に属す。

江戸時代前期（京都XI期中段階からXIII期古段階、17世紀前半から18世紀前半）

土坑187(図37、図版14) 土師器、染付、施釉陶器、金属製品、貝、瓦、壁土などが出土した。139は土師器皿Nrで、口径5.3cm、器高1.1cmである。内面はナデ調整、外面は指オサエである。140～142は土師器蓋で、口径9.5～12.2cmである。つまみは欠損している。内外面ともナデ調整を施される。142の口縁部内外面に煤が付着しており、灯明具として使われたと思われる。143～157は土師器皿Sで、口径8.9～12.1cm、器高1.8～2.215cmである。底部は丸味をもち、凹線は体部側へ上がる。体部は外へ開き、口縁部端部は丸くおさまる。少数口縁部が内傾するもの見られる。158～161は肥前染付である。158は蓋で、外面に草花文。159は皿で、外面に唐草文、内面見込みには草花文・鶴が描く。160・161は椀で、160の外面に草文のような文様で、高台内には大明年製の銘。161の外面に草花文・垣根が描く。162・163は京焼の施釉陶器である。162は小丸椀で、体部は内湾し、口縁部はやや開く。淡いオリーブ色の釉を施し、体部外面には錆絵で十六弁の菊花文を描く。胎土は灰白色を呈し密で、器壁は薄く、丁寧な作られている。禁裏からの注文品と思われる。163は丸椀で、体部から口縁部は内傾する。体部外面に錆絵で小さな梅文を描く。径の小さい高台が付く。164は塩壺蓋で、口径6.0cm、器高1.9cmである。165は焙烙で、体部は型作りし、口縁部を貼り付ける。口縁部の内外面は横ナデ調整を施す。京都XIII期古段階に属す。

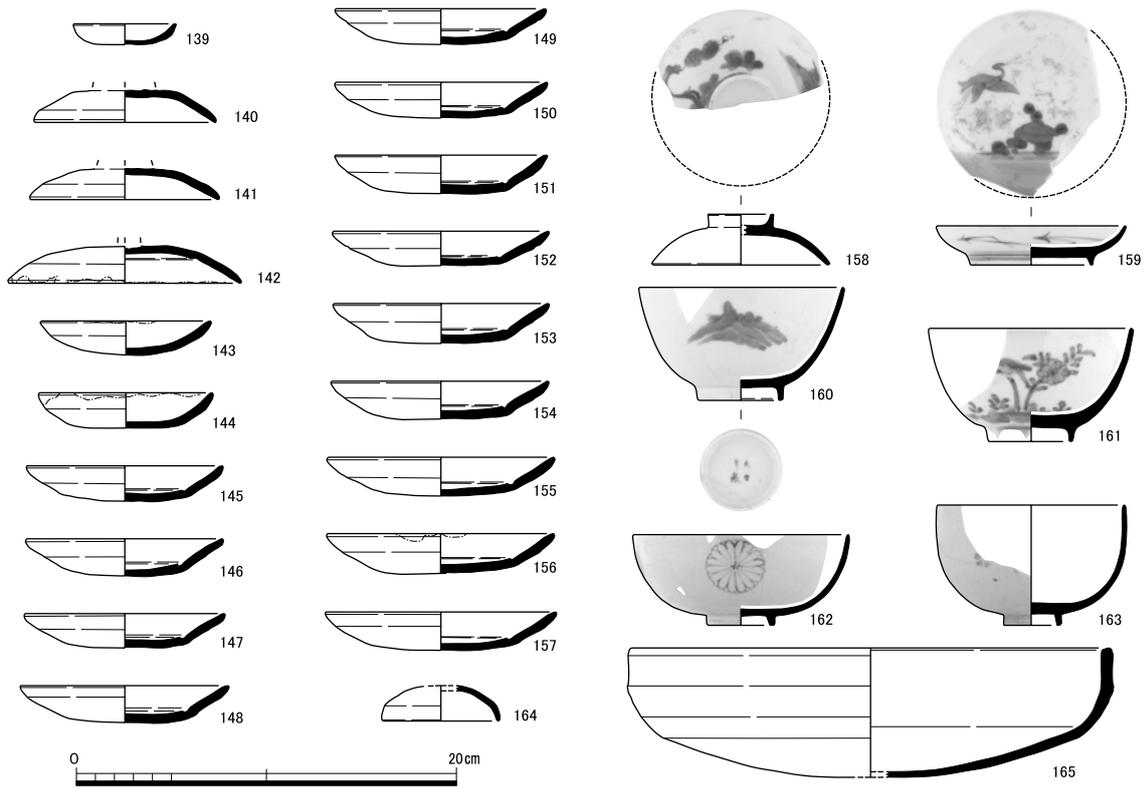


図37 土坑187出土土器実測図（1：4）

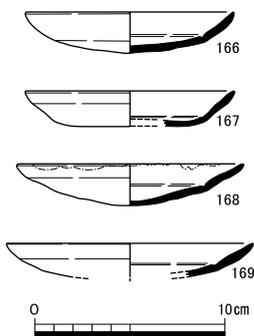


図38 溝146出土土器実測図（1：4）

溝146（図38） 166～169は土師器皿Sで、口径10.9～13.0cm、器高1.8～2.2cmである。底部は丸味もち、凹線状圈線は体部側に上がる。体部は短く、やや屈曲ぎみに外へ開き、口縁部が内傾するものもある。口縁はやや尖る。凹線状圈線は体部側に上がり、京都Ⅻ期新段階からⅩⅢ期古段階に属す。

土坑129（図39） 土師器、染付、焼締陶器、瓦などが出土した。170～172は土師器蓋で、口径11.5～12.8cmである。天井が平らなものや丸みをもつものがあり、湾曲して口縁部へ外傾する。内外面ともナデ調整を施す。170・171はつまみが欠損。172は円柱形につまみが付き、この時期のものは中心からはずれていない。171の口縁部に煤が付着する。173～183は土師器皿Sで、口径10.5～16.0cm、器高1.7～2.3cmである。底部は丸味をもち、体部は外へ開き、口縁部が内傾するもの少ない。口縁はやや尖る。凹線状圈線は体部側へ上がるものが大半を占めている。京都Ⅻ期中段階に属す。

土坑201（図40、図版15） 土師器、染付、施釉陶器、焼締陶器、土師器質土器、瓦、貝、魚骨などが出土した。184・185は土師器皿Sbhで、口径6.6cm・6.8cm、器高1.5cmである。内面はナデ調整を施される。186～189は土師器皿Sbで、口径9.2～9.8cm、器高1.8～2.1cmである。内面はナデ調整を施される。190～199は土師器皿Sで、口径9.4～12.0cm、器高1.9～2.5cmである。底部は丸味をもち、凹線は体部側に上がり、体部は外へ開いて口縁は丸くおさまる。200は土師器蓋で、

丸味をもつ天井部から外へ開いて口縁部へ下傾する。端部やや尖る。外面口縁部から天井部はナデ調整を施される。つまみは欠損する。201は塩壺蓋で、外面口縁部から内面はナデ調整を施される。202は京都産の塩壺で、口径3.3cm、底部は欠損する。体部は内湾し、口縁部はやや開く。口縁部の内外面と体部上位まではナデ調整を施される。203は肥前白磁碗で、体部から内湾し、口縁部はやや外へ開く。204は信楽播鉢で、上部は欠損する。内面の播目は全面に施され、底部の播目は一単位9本で格子状に施される。京都Ⅱ期古段階から中段階に属す。

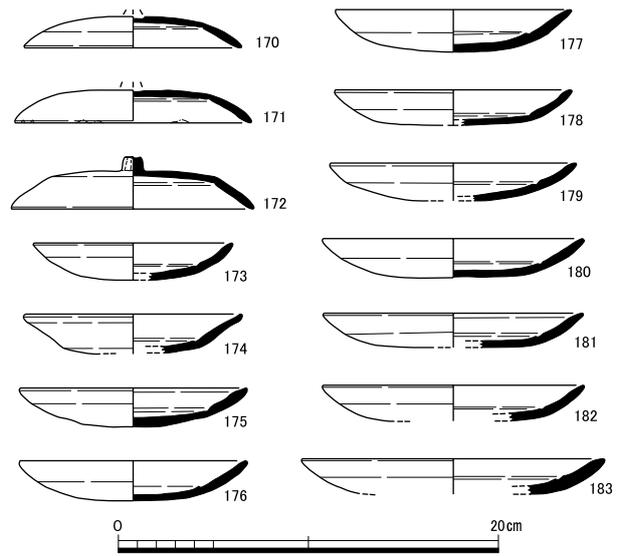


図39 土坑129出土土器実測図（1：4）

土坑196（図41、図版16）土師器、染付、施釉陶器、焼締陶器などが出土した。205は土師器皿Sbhで、口径7.5cm、器高2.0cmである。内面はナデ調整を施される。206・207は土師器皿Sbで、口径8.5cm・9.0cmである。内面はナデ調整を施される。208～216は土師器皿Sで、口径10.5～12.5cm、器高1.9～2.2cmである。底部は平らなものより丸味をもつものがやや多い。体部は外へ開き、口縁部は丸くおさまる。凹線状圏線は体部側にやや上がっている。217～219は土鈴で、217・218

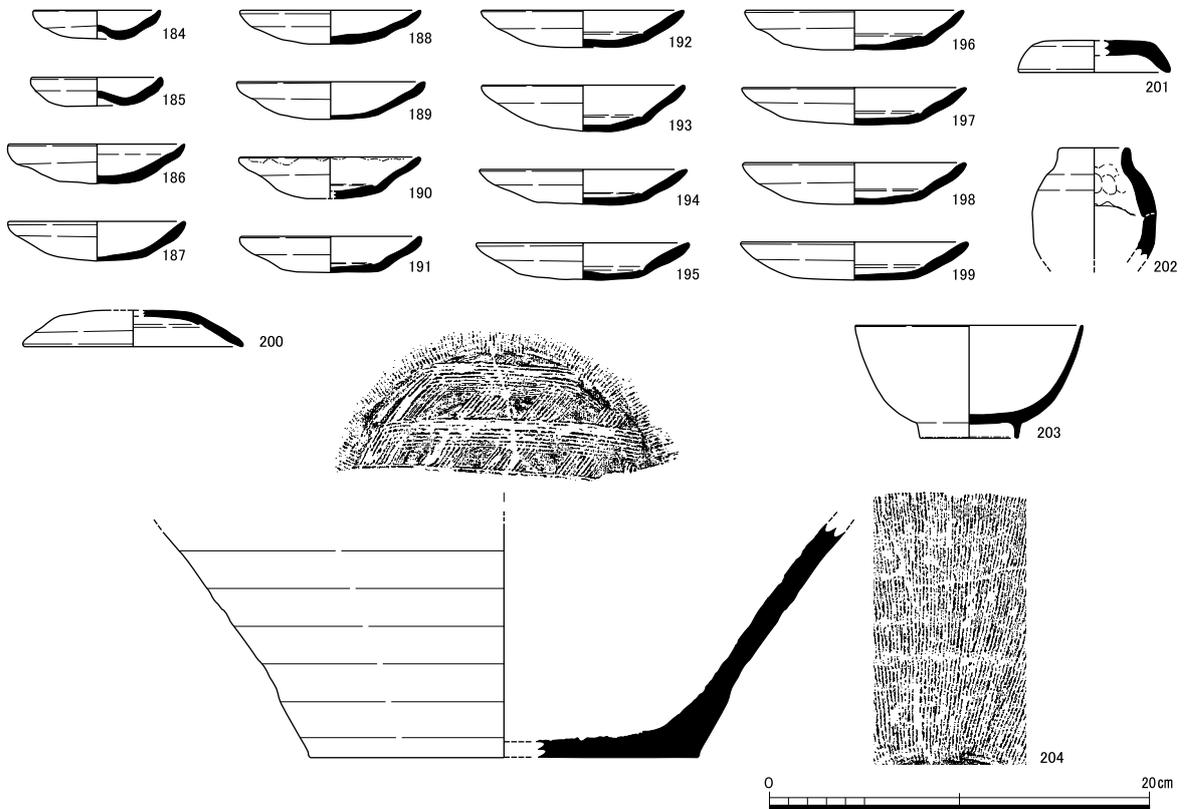


図40 土坑201出土土器実測図（1：4）

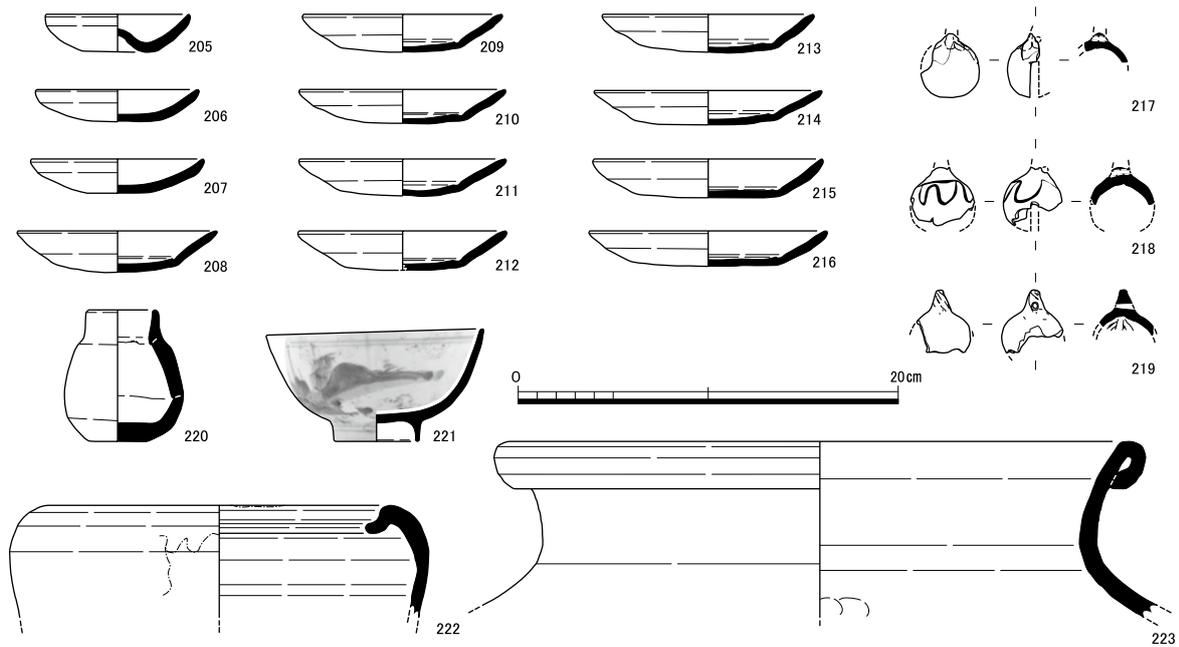


図41 土坑196出土土器実測図（1：4）

には頸部から肩部にかけて墨で葉の文様が加飾されている。220は京都産の塩壺で、口径3.5cm、器高7.0cmである。底部から体部は湾曲し、肩から口縁部はやや反りぎみで、端部は内傾する。体部外面はナデ、口縁部内外面は横ナデ調整を施される。221は肥前染付椀で、体部から内湾ぎみに開く。体部外面に草木文を描く。高台内には円を描く。222・223は信楽の焼締陶器である。222は水指で、大部分は欠損する。胎土は灰白色で堅く焼き締まっている。口縁は矢筈口で、口縁部から灰釉を流し掛けされる。分銅形の水指と思われる。223は甕で、堅く締まった胎土で長石・石英を含む。口縁は玉縁である。京都Ⅻ期古段階に属す。

土坑205（図42、図版16）土師器、染付、施釉陶器、焼締陶器などが出土した。224は土師器皿Nrで、口径5.4cm、器高1.1cmである。225・226は土師器皿Sbで、口径8.8cm・9.3cm、器高2.1cm・

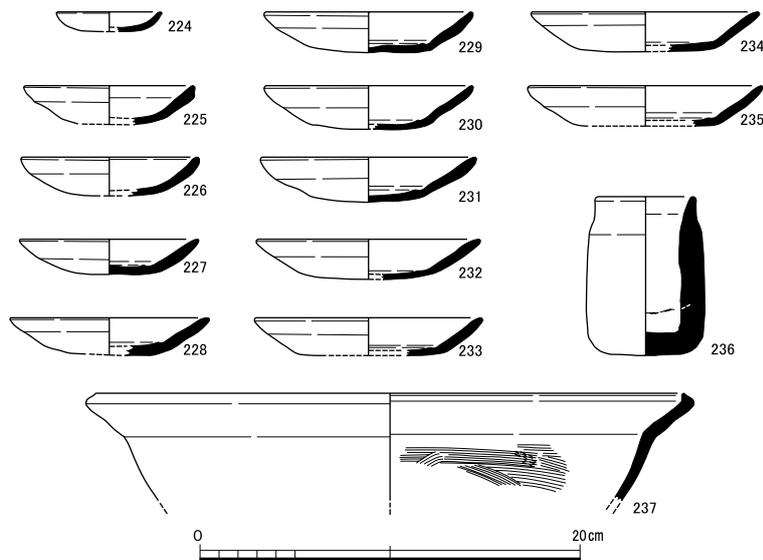


図42 土坑205出土土器実測図（1：4）

2.1cmである。内面と外面口縁部はナデ調整を施される。227～235は土師器皿Sで、口径9.4～12.2cm、器高1.9～2.4cmである。底部は丸味をもち、体部から口縁部へ上方する。端部は丸くおさまるものが多く見られるが、端面をもつものが少数見られる。凹線状圏線はナデ調整痕として内面底部側へ凸状の突起が見られる。器壁は厚目である。236は塩壺で、口径5.0

cm、器高8.4cmで、先に粘土を底型に押し当て底部を作り、体部も板状の粘土を巻き付けて作る。そして底部と体部を接合してコップ型の塩壺を作る。体部は直立し、口縁部はやや外反する。口縁部の内外面は横ナデ、体部外面はナデ調整を施される。237は土師質の大和型焙烙である。京都XI期中段階から新段階に属す。

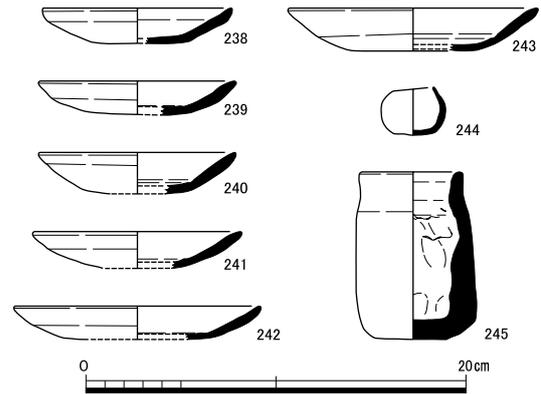


図43 土坑218出土土器実測図（1：4）

土坑218（図43、図版16） 土師器、染付、瓦などが出土した。238は土師器皿Sbで、口径9.9

cm、器高1.9cmである。口縁部の内外面は横ナデ調整、内面はナデ調整を施される。239～243は土師器皿Sで、口径10.2～12.8cm、器高1.8～2.3cmである。底部から体部から口縁部へ上方する。端部は丸くおさまるものもあるが、端面をもつものが多く見られる。凹線状圏線はナデ調整痕。244は土師質の小壺のいわゆる「つぼつぼ」である。口径2.0cm、器高2.6cmである。底部は平坦で、体部は円弧状を呈し、口縁部はやや上向き、薄く仕上げられている。京都XI期中段階に属す。

（2）瓦・塼類（図44～46、図版17・18）

棟丸瓦（図44、図版17） 瓦1～12は菊花文の棟丸瓦で周縁を有する。瓦1～3は凸線花卉16葉の一重菊で、瓦1の瓦当径7.8～8.1cm、中房径5～8mmである。瓦1が花卉幅も中房径も小さく、小振りの棟丸瓦である。瓦4～12は凹弁8葉の一重菊で、瓦当径7.6～8.4cm、中房径6～9mmである。瓦4は凹線が太い。当面にキラコが見られるのが瓦4・6～9・12である。周縁部はナデ調整、凹面はヘラケズリなどで成形後、ナデ調整を施す。裏面はナデ調整のみである。瓦1・2は土坑260で出土で江戸時代末期以降。瓦3・9・10が溝102、瓦4・5が柱穴107、瓦6が柱穴114、瓦7・8が溝145出土で江戸時代後期から末期。瓦11が第3面焼土層、瓦12が土坑187出土で江戸時代中期から後期である。

軒丸瓦（図44・45、図版17） 瓦13～18・30は軒丸瓦で、瓦13は陽刻の菊花弁である。周縁はナデ調整、周縁上端は面取り、凹面はヘラケズリ後、ナデ調整、瓦当裏面・凸面はナデ調整を施す。大型の棟丸瓦の可能性もある。瓦14～18は右巻きの三巴文軒丸瓦である。珠文は15個、瓦当径15.7～17.1cm。周縁、裏面はナデ調整。瓦14の凹面はヘラケズリ後、ナデ調整を施す。瓦当面にキラコが見られるのは瓦14～18である。瓦30は軒丸瓦で、瓦当部が欠損している。残存長31.9cm、幅17.3cm、厚さ2.0cmである。尻側に止釘用の直径1.6cmの穿孔がある。凸面はナデ調整を施す、凹面は端部をヘラケズリ成形後、ナデ調整を施す。瓦13が第2面掘り下げ中、瓦14・15が溝145、瓦16が柱穴117、瓦17が土坑91出土で江戸時代後期から末期。瓦18が土坑201、瓦30が土坑218出土で江戸時代前期。

軒平瓦（図45、図版18） 瓦19～27は軒平瓦で、文様は唐草文である。中心飾りは瓦19が8弁の菊文で、他は花文である。唐草文様は瓦23・24が凹線で、これ以外は凸線である。周縁はナデ

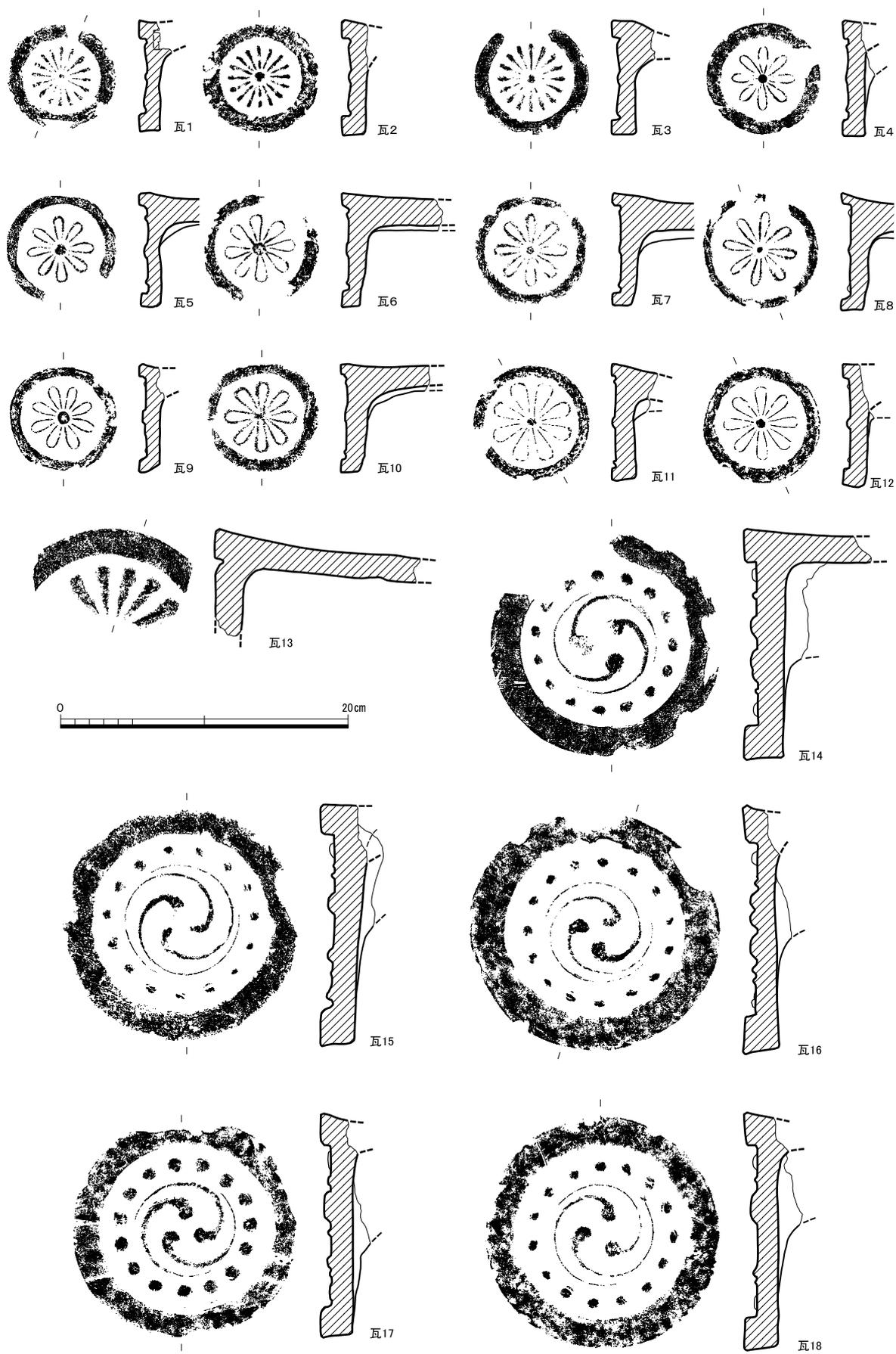


图44 棟丸瓦·軒丸瓦拓影·实测图 (1 : 4)

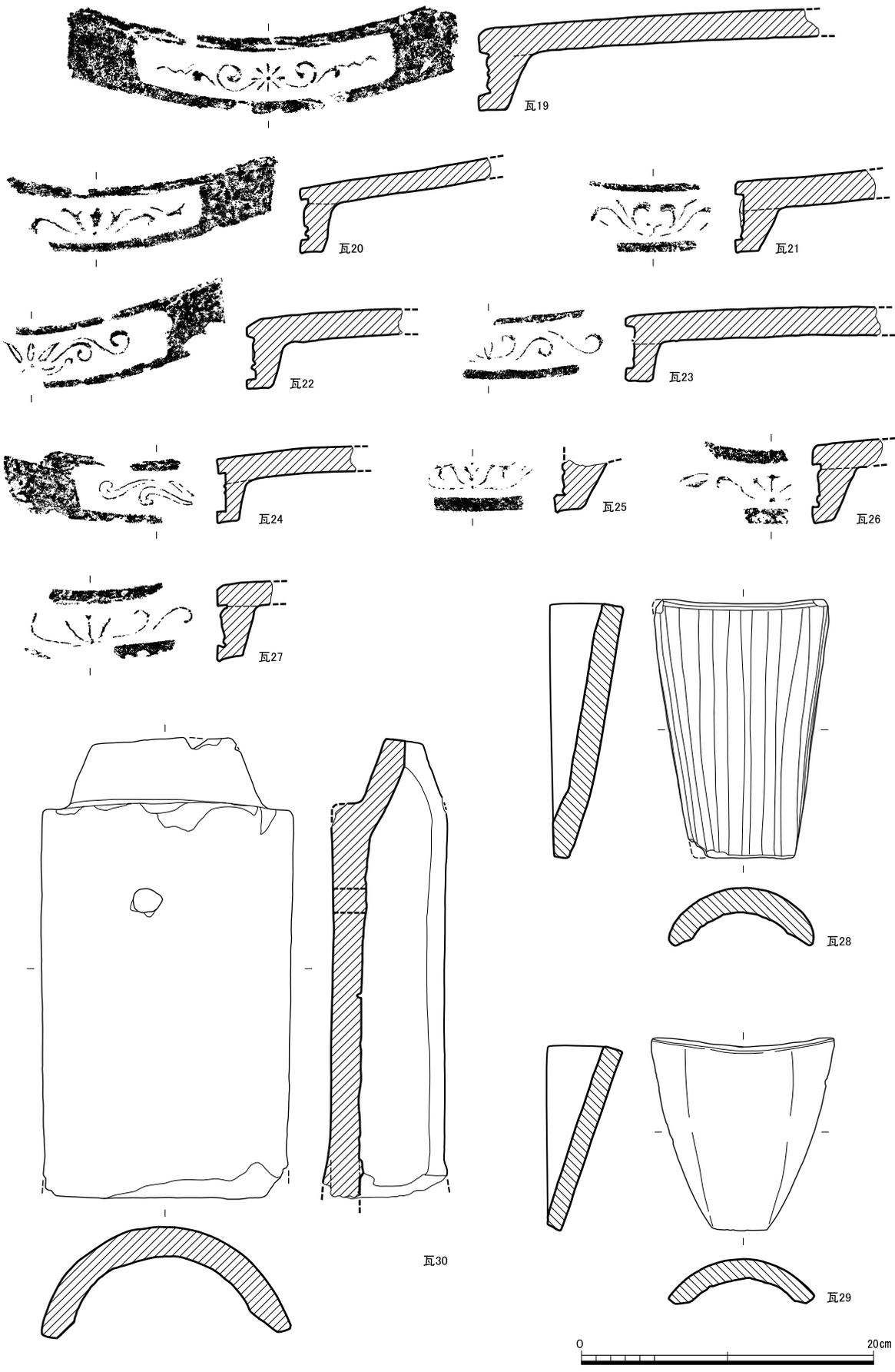


图45 軒平瓦·輪違瓦·軒丸瓦拓影·实测图 (1:4)

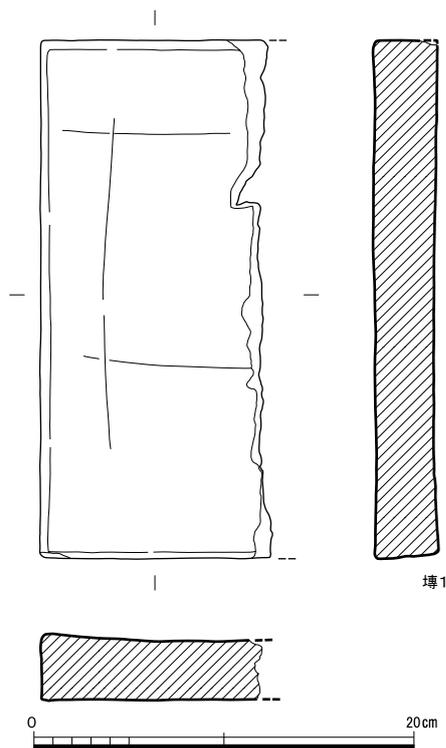


図46 磚実測図（1：4）

磚（図46、図版18） 磚1は磚で、長さ27.5cm、残存幅12.2cm、厚さ3.54cmである。上面はナデ調整で平滑にする。側面はヘラでナデ調整を施す。下面はヘラで粗く調整を施す。柱穴120出土。江戸時代後期に属す。

（3） 銭貨（図47、図版19）

出土したのは合計10枚あり、判読できたものが8枚で、渡来銭が2枚、国内銭が6枚である。銭1は「文久通寶」で、鑄造が1863年である。書体は草書体であり、老中板倉勝静の筆とされ

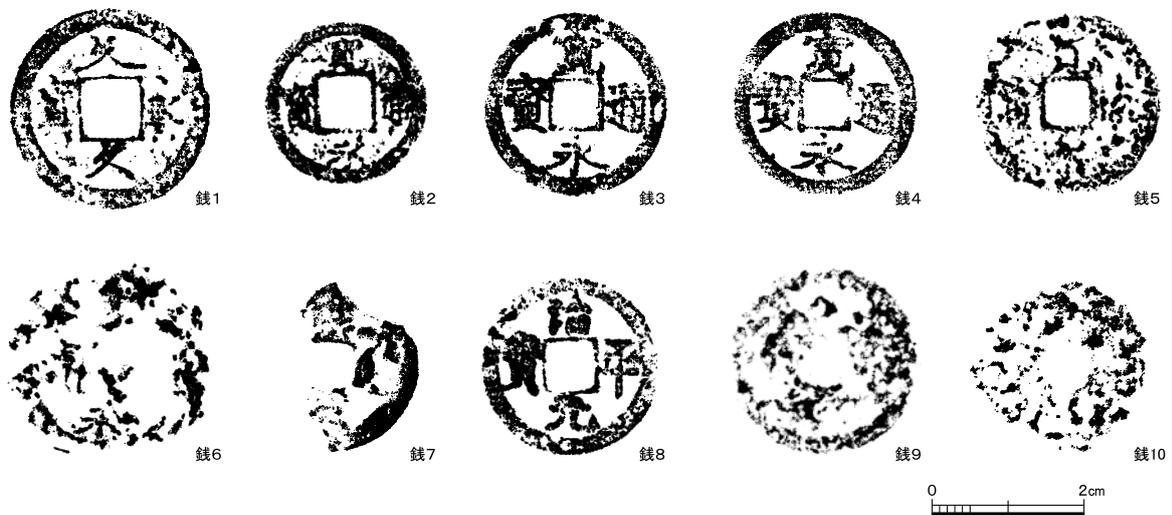


図47 銭貨拓影（1：1）

調整、周縁上端の面取りは瓦19・22・26・27。顎下面、裏面はナデ調整。外面はナデ調整、裏面は未調整である。瓦当面にキラコが見られるのは瓦19～25である。瓦19・22が柱穴97、瓦20が土坑249、瓦21・23が溝145、瓦24が土坑94、瓦25が柱穴120出土で江戸時代後期から末期。瓦26・27が土坑205出土で江戸時代前期。

輪違瓦（図45、図版18） 瓦28・29は輪違瓦で、大棟の熨斗瓦の下で上向きと下向きに交互にはめ込む瓦である。瓦28は長さ13.3cm、幅は広端面12.5cm、狭端面9.9cmである。凸面はナデ調整を施す。凹面はヘラケズリで端部を成形し、広端部はナデ調整を施す。溝145出土。瓦29は長さ17.9cm、幅は広端面11.3cm、狭端面9.9cmである。凸面はヘラケズリ後、ナデ調整を施す。凹面はヘラケズリで端部を成形し、広端部は横ナデ調整を施す。溝102出土。江戸時代後期に属す。

るものである。土坑67出土。

銭2～6は寛永通寶である。銭2は1697～1747年・1767～1781年鑄造の新寛永銭と思われる。土坑67出土。銭3・4は1636～1659年鑄造の古寛永銭。銭3は北区第3掘下げ、銭4は土坑228出土。銭5は土坑232、銭6は溝102出土。

銭7は北宋の「熙寧元寶」で、1068年鑄造。溝239出土。

銭8は北宋の「治平元寶」で、1064年鑄造。第2面掘下げ中に出土。

銭6・9・10は火災で2～4枚が溶着している。銭9は土坑231出土。銭10は土坑232出土。

(4) 金属製品 (図48、図版19)

釘 (金1～5) 金属製品の中で最も多く出土している。長さは短い方から3.2cm、4.05cm、5.45cm、6.45cm、12.3cmで5種類の長さのものが出土している。用途によって異なっているものと思われる。断面形は長方形と四角形の2種類である。いずれも巻頭式の釘と思われる。鉄製。溝102出土。18世紀後半

鋏 (金6・7) 金6は環状鋏で、長さ4.0cm、幅1.25cm、断面形は長方形である。板状の青銅を頭環にし、先の部分を細めて尖らす。鑄造。金7は長さ6.1cm、幅1.35cmである。円形の頭に、先が尖った断面形が四角形の棒が付く。鉄製。溝102出土。18世紀後半。

金具 (金8) 16葉の菊花文の金具で、直径3.7cm、厚さ0.3cmである。中央に一辺0.6cm程の長方形の孔を穿つ。銅製。土坑265出土。19世紀前半。

火箸 (金9) 残存長18.7cm、上部の筒状棒の長さ14.45cm、径0.45cm、断面形は円形。下部の棒状の長さ4.25cm、径0.35～0.1cm、断面形は四角形で先端部は細くなる。両端部は欠損する。銅製。溝145出土。

水滴 (金10) 長さ2.2cm、幅4.15cm、厚さ1.35cmの箱形の水滴である。中央に長方形の口頭部があり、一隅に注口を設ける。銅製。溝102出土。18世紀後半。

煙管 (金11) 煙管の雁首で、残存長6.75cm、灰皿径1.4cmで、灰皿の下には補強体がない。脂反りがやや長く、灰皿が高い。真鍮製。溝145出土。19世紀前半。

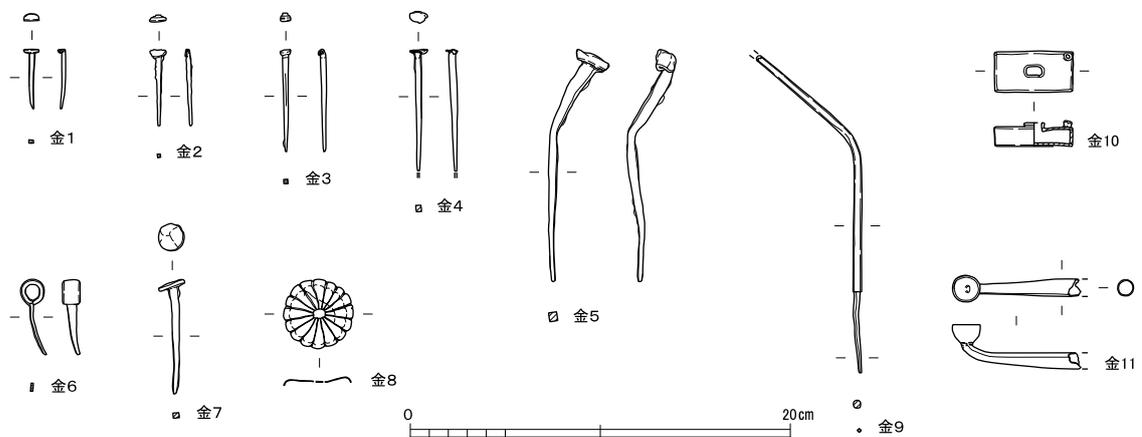


図48 金属製品実測図 (1 : 4)

(5) 石製品 (図49・50)

硯(石1) 二連の小型硯。長方形の硯面を2つ配置する。よく使い込んだと思われ、陸部に窪みが見られる。長さ9.4cm、幅4.2cm、厚さ1.2cmで、材質は粘板岩。溝102出土。18世紀後半。

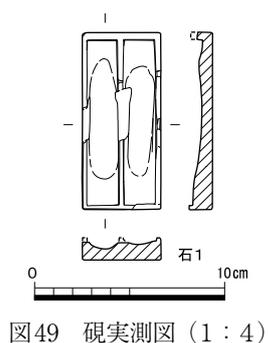


図50 硯

註

- 1) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房 2005年
小松武彦「近世の土師器」『平安京左京北辺四坊』第2分冊(公家町) 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 2) 小野善裕「三千院の天盃と土師器皿に関する二・三の問題」『学業』22号 京都博物館 2000年
- 3) 鈴田由紀夫「京都と伊万里焼」『冷泉家展 近世公家の生活と伝統文化』冷泉家時雨亭文庫、朝日新聞、アサツデー・ケイ 2002年

4. まとめ

調査地は、清所門の南東に位置している。この地が御所内に取り込まれたのは慶長度内裏造営(1611)からと考えられる。調査地は「番所」と「御使番部屋」にあたり、承応2年(1653)の火災後に再建された承応度内裏造営(1654)時に、この場所に建てられた。これ以降も寛文、延宝、宝永、天明、安政の5回の火災によって焼失し、その都度、再建されている。調査では、嘉永7年の火災(1854)・天明8年の火災(1788)・宝永5年の火災(1708)の焼土層を検出した。

以下では、各内裏¹⁾と検出した遺構との関係を比較検討していく。

第1面 第1面は安政度内裏造営(安政2年:1855)から現代までの遺構である。

『安政造営内裏図』(図52)は、嘉永7年(1854)の火災後に再建された内裏図(以下「安政図」とする。)である。今回は、旧番所建物(建物1)を解体し、それを参観者受付建物とするもので、建物と礎石などが解体、撤去されていた。現御所は安政度内裏造営以来、150年間被災していない。

建物1は、後世に一部改修・改変されていたが、礎石跡をほぼ完全に検出することができた。安政図の「番所」建物にあたる。礎石跡の配置から安政度内裏造営の「番所」建物であることが確認された。

井戸72は、建物1の南側で検出したもので、石組は抜かれていた。安政図にも同じ場所に井戸が描かれており、この井戸に相当するものと考えられる。

溝239は、「番所」建物の南側で検出した南北方向の石組溝である。安政図では穴門通路を挟んで南側には「御使番部屋」建物を囲む塀が描かれている。穴門通路を横断する排水路と思われる。

石列1は、西築地穴門の南東の位置で検出された。「御使番部屋」の北側の塀に伴う遺構と考えられる。

第2面 第2面は寛政度内裏造営から嘉永7年(1854)火災までの遺構である。

『寛政度御造営内裏平面図』(寛政2年:1790)(図54)は天明8年(1788)の火災後に再建された内裏図(以下「寛政図」とする。)である。

建物2は、建物1の2.85m南側で検出した建物である。寛政図では「番所」建物が描かれており、検出した位置や柱穴の配置から「番所」の北側の建物部分に想定するものと考えられる。

溝150・177・土坑190は、建物2の北側で東西方向に鍵型に曲がる溝で、建物2に平行していることから建物2の雨落ち溝と考えられる。

溝145は、西築地穴門の北東寄りで検出した東西方向の溝で、検出位置から寛政図に描かれている「番所」敷地南側の塀の内側溝と考えられる。

溝258・262は、石列1の下層で検出した東西方向の平行する溝で、西築地穴門の南側の位置から石列1と同じく「御使番部屋」の敷地を取り囲む北側の塀に相当すると考えられる。

土坑231・232は、南西隅で便所甕を据えた土坑で、「御使番部屋」の北西隅に描かれている2つ並ぶ便所と検出位置が一致している。

井戸280は、出土遺物の時期から寛政度内裏造営以前であることから「番所」南側に描かれてい

る井戸と考えられる。

第2面で検出した遺構の埋土から焼土層と焼けた瓦が出土しており、出土遺物から嘉永7年(1854)の火災で焼失した寛政度内裏造営(1790)の建物である。

第3面 第3面は宝永度内裏造営(1709)から天明8年の火災(1788)までの遺構である。

『宝永度御造営内裏平面図』(宝永6年:1709)(図56)は宝永5年(1708)の火災後に再建された内裏図(以下「宝永図」とする。)

第3面では建物跡を検出できなかったが、建物に付属する遺構が検出された。

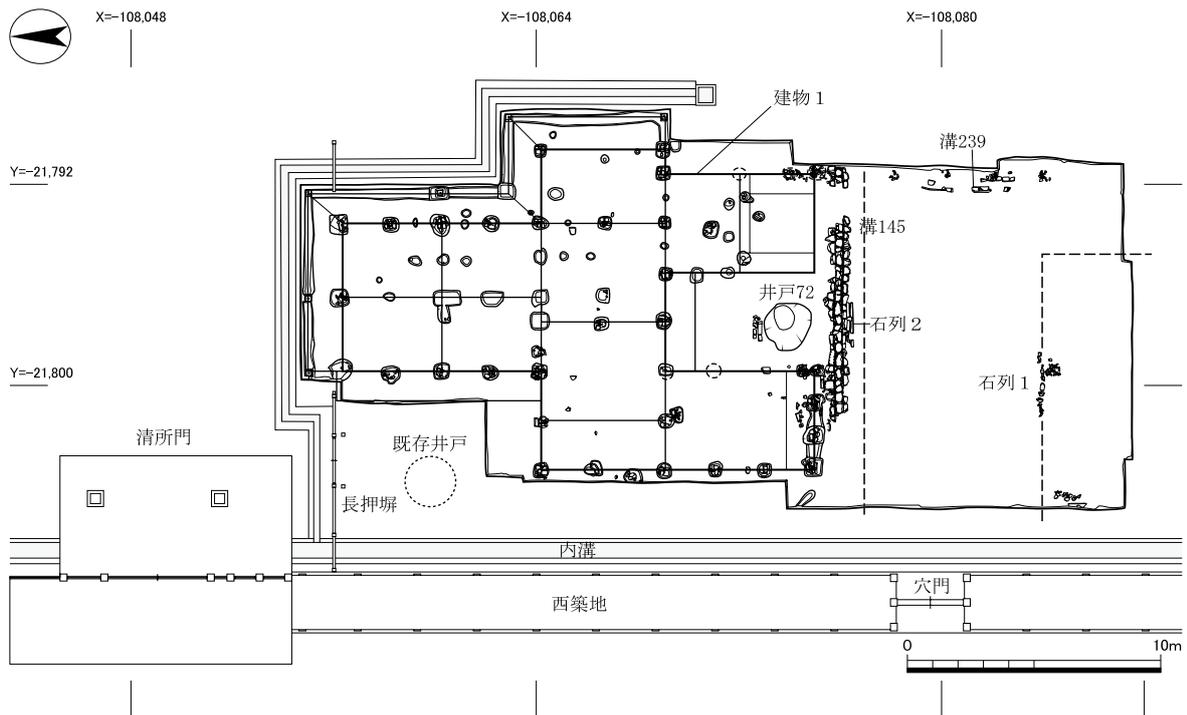


図51 第1面遺構配置図(1:300)

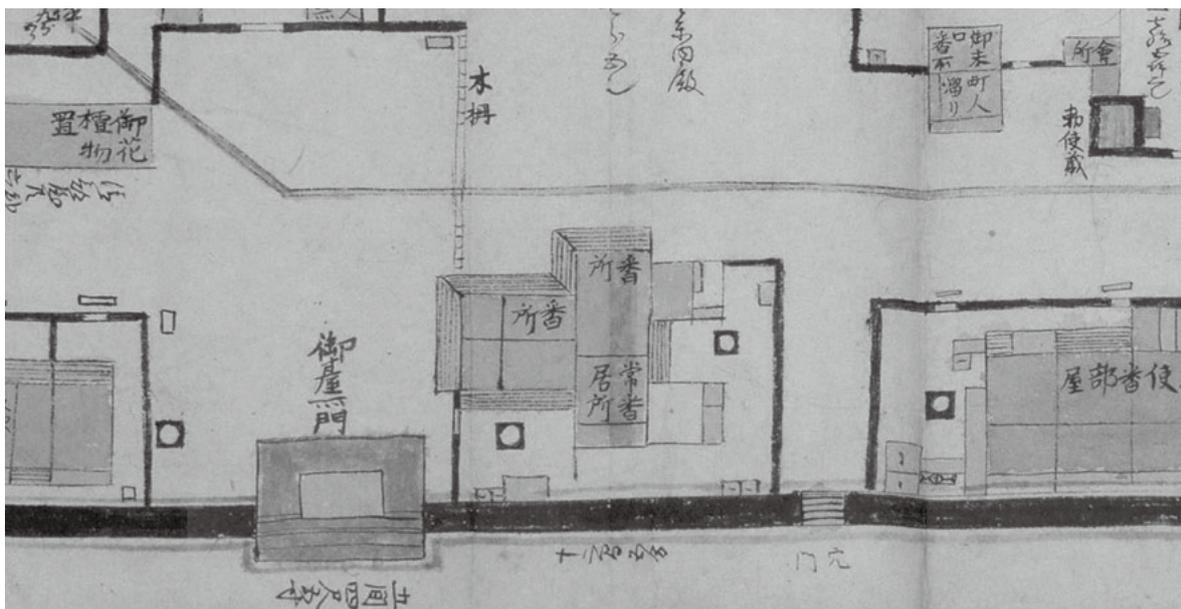


図52 『安政造営内裏図』(京都大学附属図書館所蔵)

溝102は、中央部の北側から東側と西側は南へ下がり「L」字に折れて東と西へ延びている。宝永図の「番所」建物の北側から東側には「縁」もしくは「廊下」と建物の東・西側には東西方向の塀も描かれている。石組溝102は「番所」建物に付随する雨落ち溝と考えられる。

溝197は、「番所」建物東側に取り付く塀の北側の雨落ち溝と考えられる。

井戸280は宝永図に描かれた「番所」建物南側の井戸であろう。

第4面 第4面は延宝度内裏造営（1675）から宝永の火災（1708）までの遺構である。

『延宝度御造営内裏平面図』（延宝3年：1675）（図58）は延宝2年（1673）の火災後に再建された内裏図（以下「延宝図」とする。）である。

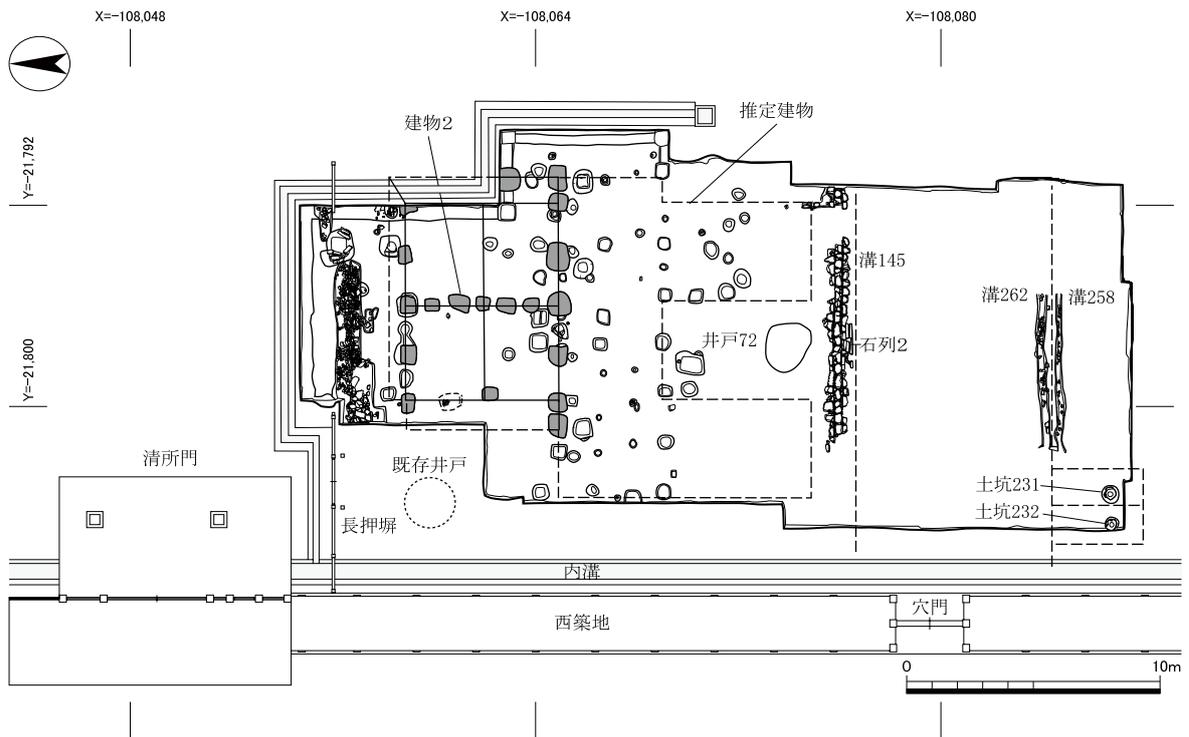


図53 第2面遺構配置図（1：300）

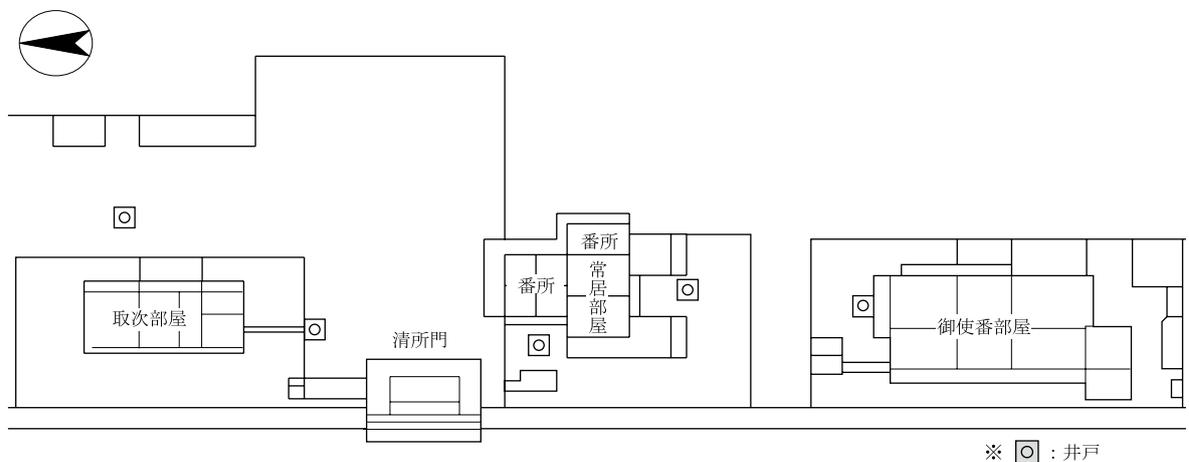


図54 『寛政度御造営内裏平面図』（寛政2年：1790）

第4面では、東西方向の石列5・柱列1・溝189と南北方向の溝146などが検出された。

石列5、柱列1、溝189は一体の遺構と考えられる。延宝図に西築地から「番所」建物の間に塀が描かれており、石列5は塀の地覆石か縁石に相当し、南に位置する柱列1は塀の添柱と考えられる。溝189は塀の外側の雨落ち溝と考えられる。これらから「番所」建物は東側の調査区外に想定できる。また、延宝図からも安政図、寛政・宝永図と比べると「番所」建物が清所門から南東側へ移動していることが窺われる。

溝146は、現西築地内溝より約1.4m東にある。出土遺物から宝永の火災で廃棄されたと考えられる。宝永の火災で焼失したのは、延宝度内裏造営で建てられた「番所」・「鳥飼部屋」の建物で、延

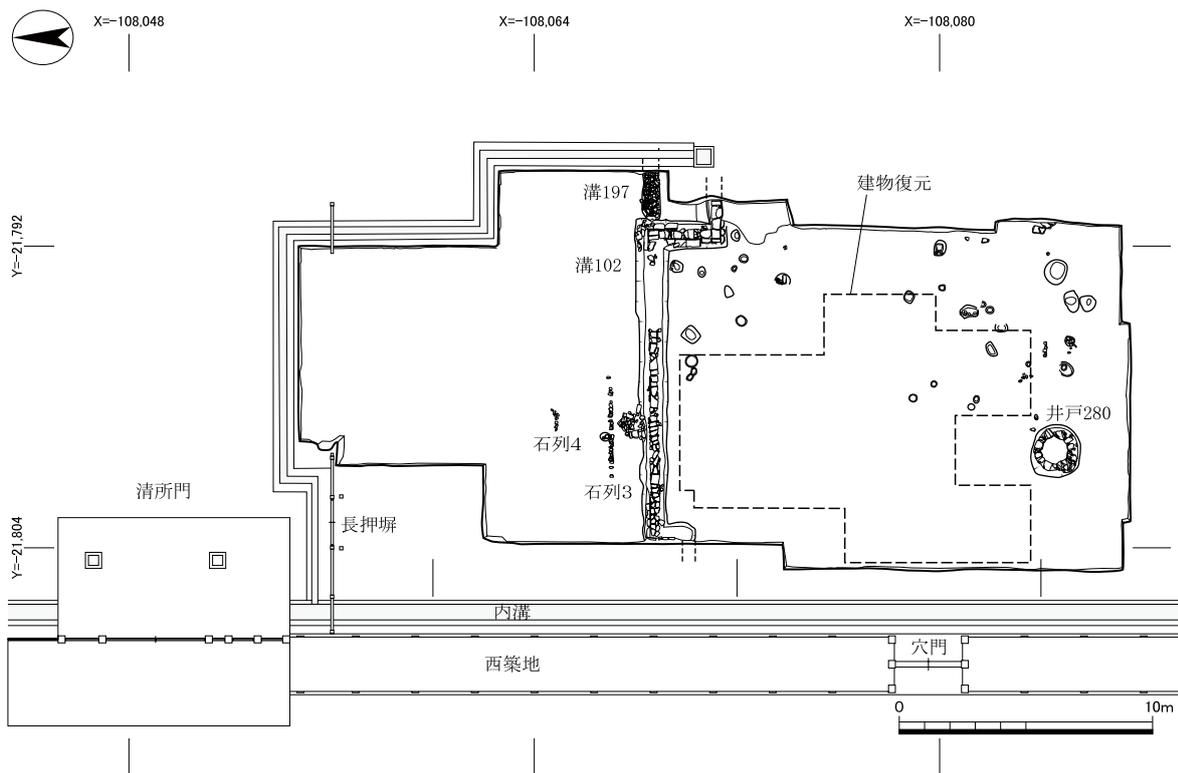


図55 第3面遺構配置図(1:300)

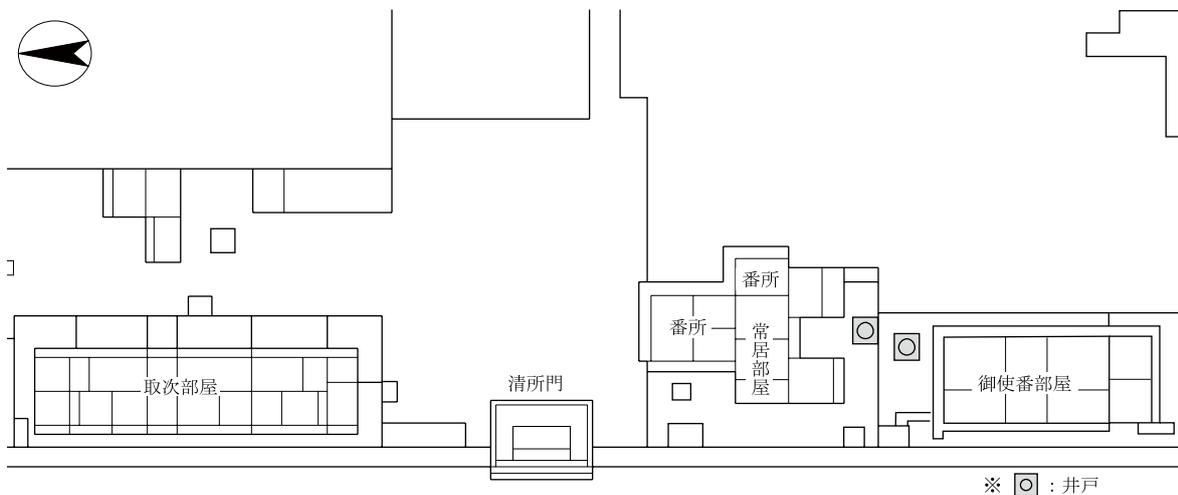


図56 『宝永度御造営内裏平面図』(宝永6年:1709)

宝図には南北方向の堀などの記載はない。このことから溝146は西築地内溝と想定できる。御所の敷地（図59）は慶長度造営で大きく拡大し、延宝度内裏造営まで引継がれる。しかし、宝永度内裏造営で再び拡大され、ほぼ現在の御所の東西幅となったのが宝永度の時である。溝146が寛文度内

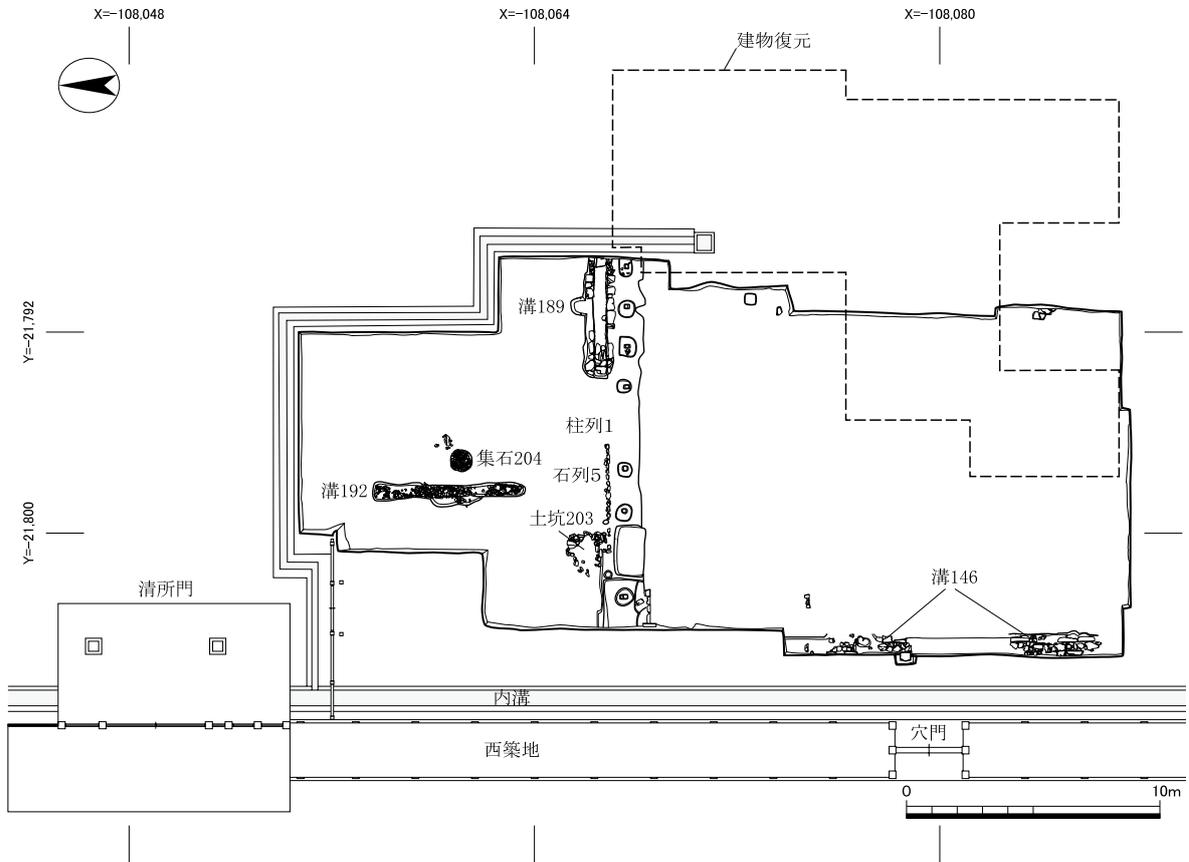


図57 第4面遺構配置図（1：300）

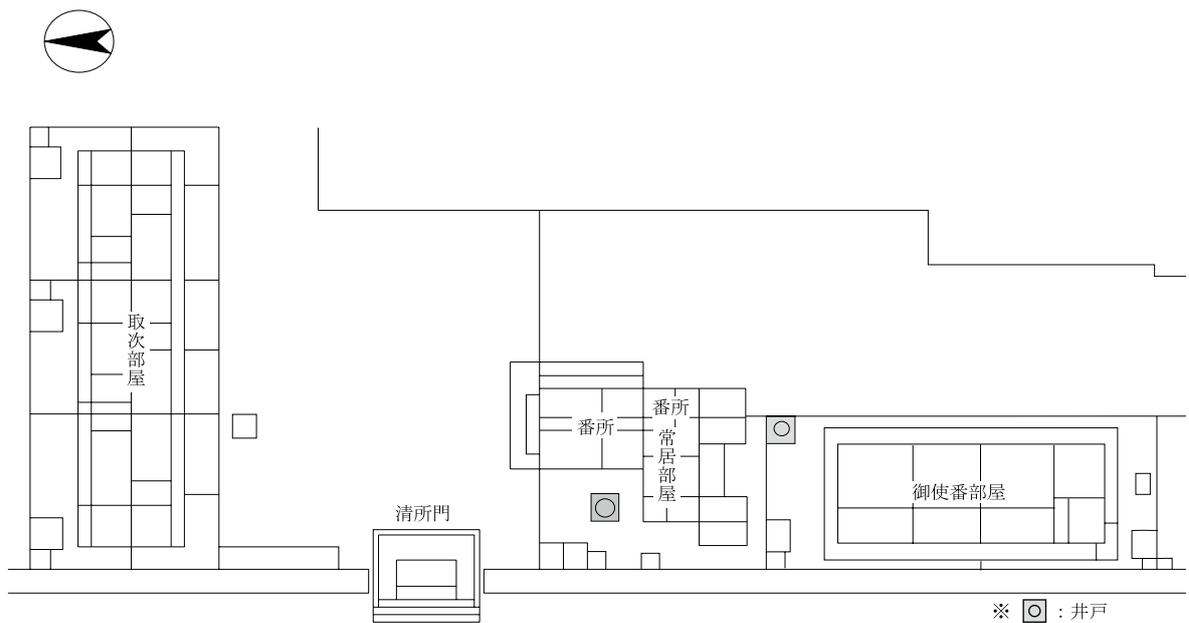
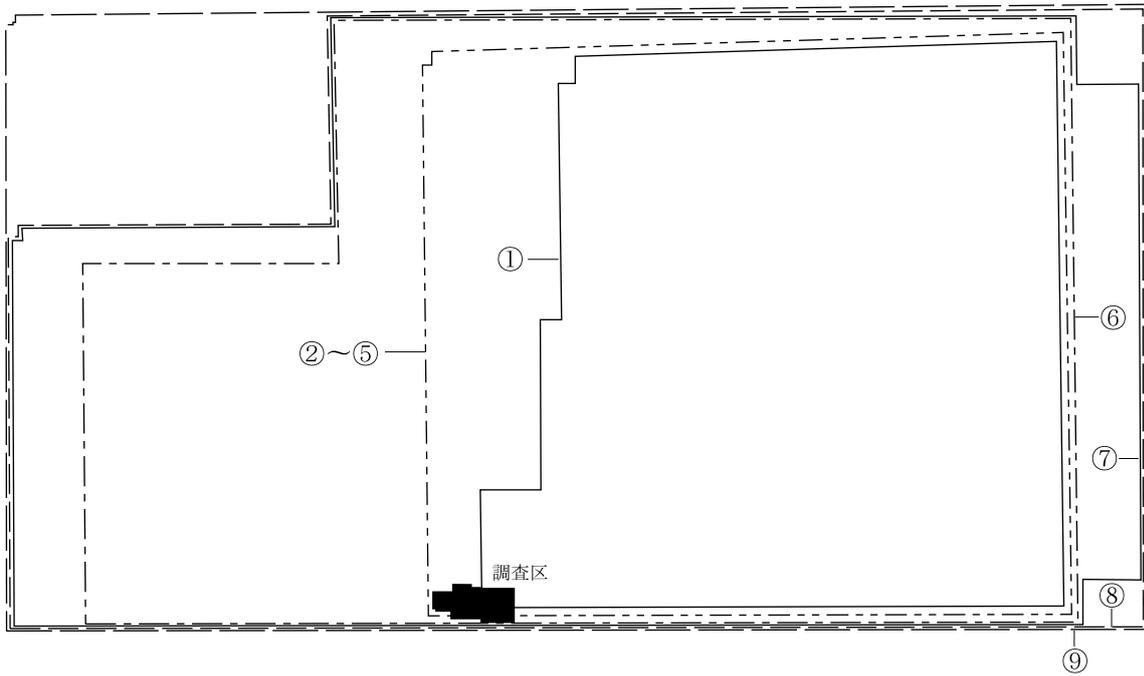


図58 『延宝度御造営内裏平面図』（延宝3年：1675）



1 変遷図



- ① 慶長度造営 (1613)
- ②～⑤ 寛永から寛文から延宝度造営 (1642～1675)
- ⑥ 宝永度造営 (1709)
- ⑦ 寛政度造営 (1790)
- ⑧ 安政度造営 (1855)
- ⑨ 現在



2 現況図

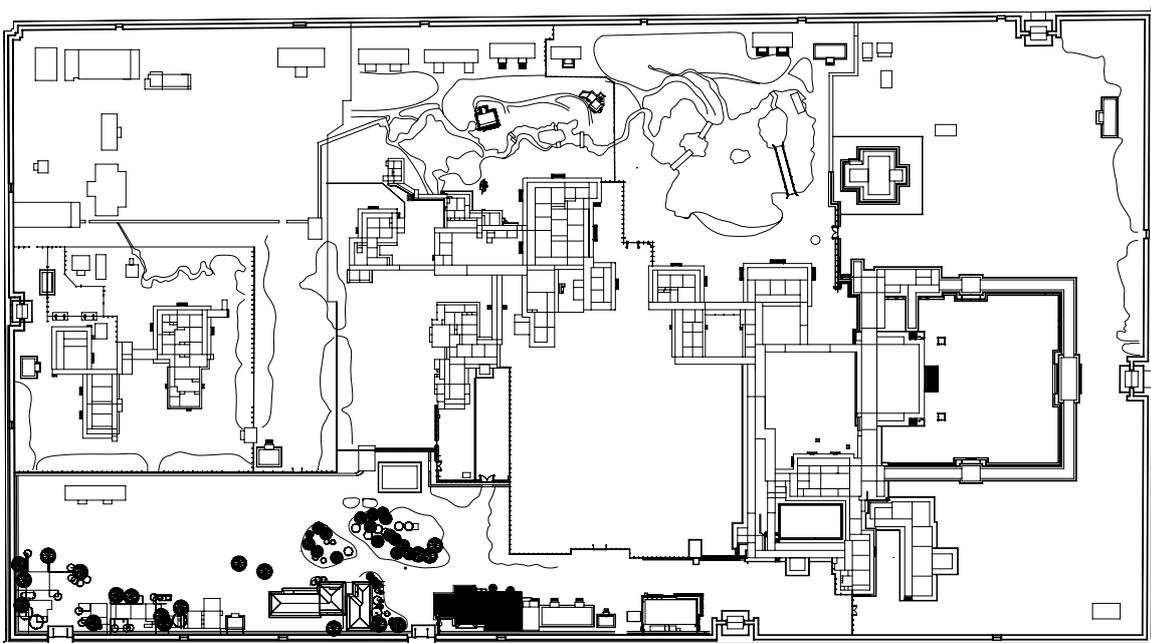


図59 御所敷地変遷および現況図

裏から延宝度内裏の西築地東側溝の可能性がある。

なお、延宝図には「番所」建物西側に井戸が描かれているが、検出されなかった。しかし、調査掘削制限深より下位に残存している可能性もある。

溝192は、西築地内溝と考えられる溝146から約5m東で、「番所」建物の塀と想定される柱列1から約3.5m北に位置する。埋土から京都Ⅺ期新段階の遺物が出土しており、承応度内裏(1654)・寛文度内裏(1664)・延宝度内裏(1675)(図58)のいずれかの遺構となる。そして、この位置には指図を見るかぎり清所門(台所門)の記載しかなく、その性格は不明である。

以上が検出した遺構と内裏図との検証である。指図でしかわからなかった御所の「番所」建物と「西築地」の変遷を明らかにすることができたことは今回の成果である。

註

- 1) 図54・56・58・59は、藤岡通夫『京都御所〔新訂〕』中央公論美術出版 1987年、を参考に作図した。

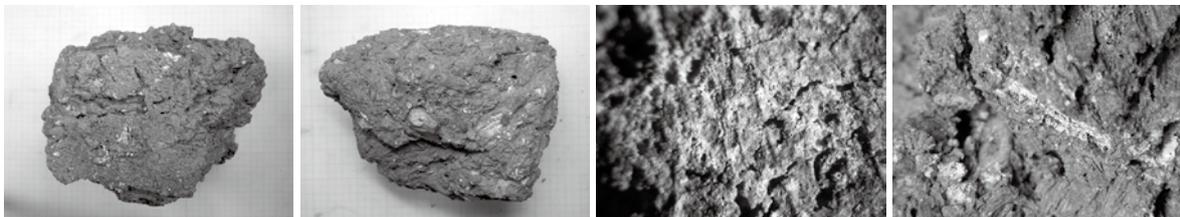
付章1 土塊サンプルについて

竜子正彦

固結した土塊4点について、目視・実体顕微鏡・薬品などで観察し、使用されていた用途について考察した。

土塊1（建物2柱穴97出土）粗い面が1面残り、大きき13cm×10cm×厚さ10cmで、高温の被熱により全体が赤変している。含まれる礫は最大2cmで粗く多い、スサは稲藁で最大幅1cm・長さ5cmで多い、その他厚さ約2mm・長さ約1cm前後の白色でやや粉状の湾曲した板状の物質が散在していた。希塩酸に激しく発泡反応呈するので、主成分は炭酸カルシウムであり石灰か貝が想定されるが、形状と表面の放射肋状の平行するラインから、貝を1cm前後に破碎し土に混入させたものと考えた。2箇所長細いものが当たった痕跡があり、1箇所は幅2.5cmで約1mm間隔の平行な線状痕跡があり木質のもの、他の1箇所は幅1.5cm以上で湾曲しているので竹と思われる。それぞれの方向は関連性がなく種類も違うので用途は不明である。この土塊は含まれる礫・藁スサ・厚さから考えると、土塀など厚みのある構造物が想定される。

土塊2（建物2柱穴123出土）直交する平滑に仕上げた面が2面残り、大きき13cm×10cm×厚さ6cmで、1面の面から数mmが淡く赤変し、他の部分は暗赤色を呈している。礫は最大4mmで多いが、スサはみられない。雲母が多く含まれている。平滑な面に炭化物様のものが付着している。



土塊1（柱穴97出土）表面

土塊1 裏面

土塊1 貝表面(拡大)

土塊1 貝断面(拡大)

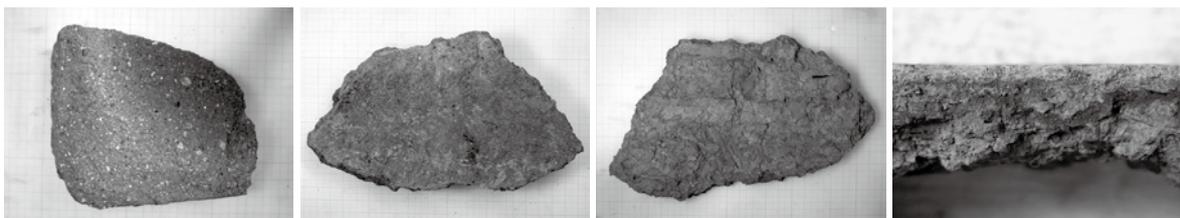


土塊2（柱穴123出土）表面

土塊2 裏面 木舞

土塊2 断面(拡大)

土塊3（掘下げ中出土）表面



土塊3 断面

土塊4（土坑281出土）表面

土塊4 裏面 木舞

土塊4 断面(拡大)

図1 土塊

土塊3（北区掘下げ中出土） 直交するやや粗い面が2面残り、大きさ10cm×9cm×厚さ5cmで、面から1～3cmが赤変し、それより内側は黒変している。礫は最大5mmが多いが、スサはみられない。雲母が多く含まれている。平滑な面に炭化物様のものが付着している。全体に土塊2に似通っているが、面が平滑でないのは被熱により面が荒れたと考えられる。土塊2・3は、ほぼ同様な形状・性状をしており、礫が細かく目視できるスサはなく雲母を多く含むなど、壁・土塀ではなく竈など建物に付随する用途が想定される。

土塊4（土坑281出土） やや平滑な面が1面残り、大きさ20cm×12cm×厚さ3.5cmで、被熱した痕跡はない。礫は最大1.5cm、藁スサは最大幅5mm、長さ5cmである。上塗りは数mmあり平滑に仕上げているが、埋土時にやや荒れたとみられる。面から2cm奥に平行に木舞と見られる当たりがあり、湾曲しているので割り竹と思われる。当たりは1枚の幅約1.7cm、木舞間の間隔は約3cmある。この土塊は木舞の当たりがあることから、壁土の一部と考えられる。残存している厚さから、壁土の厚みは約7cmと思われる。

付章2 動物遺存体の所見

丸山真史（奈良文化財研究所）

出土した動物遺存体は、いずれも食用となる種類ばかりである。破片数にして173点をかぞえ、種類や部位などを同定したものが170点にのぼる。

貝類は、セタシジミを除いて海水産である。セタシジミ、ハマグリなどの二枚貝が多く、巻貝は少ない。

魚類は、いずれも海水産であり、マダイ、キダイなどのタイ科が主体である。マダイの前頭骨には「兜割」されたものがあり、料理に利用されたと考えられる。マダイの大きさは、体長30cm以上の個体が大部分を占めるが、体長20cm以下の小形個体も含まれる。

鳥類は、カモ科が出土しており、いずれもカルガモ、スズガモなどのカモ類に相当する大きさである。

表1 動物遺存体集計表

貝類							魚類							
時期・遺構	小分類	部位	左	右	一	計	時期・遺構	種類	部位	左	右	一	計	
京都12期古～中 土坑196・201	クロアワビ	殻			1	1	京都12期古～中 土坑196・201	コチ科	前鰓蓋骨	1	1		2	
	アワビ属	殻			2	2		マダイ	角舌骨		1		1	
	サザエ	殻			2	2			歯骨	1				1
		蓋			1	1			主上顎骨	1	1			2
	アカニシ	殻			4	4			上後頭骨				2	2
	アカガイ	殻	2	2		4			前上顎骨	1				1
	フネガイ科	殻			1	1			前頭骨				2	2
	セタシジミ	殻	14	14		28			椎骨				5	5
ハマグリ	殻	8	11		19	キダイ		椎骨				5	5	
京都13期古 土坑187	サザエ	殻			6	6		タイ科	前頭骨				1	1
		蓋			2	2			椎骨				9	9
	アカガイ	殻	2			2		サバ属	前鰓蓋骨	1				1
	フネガイ科	殻			1	1			基後頭骨				1	1
	セタシジミ	殻	9	8	10	27		不明	椎骨				3	3
	ハマグリ	殻	4	7		11	尾舌骨					1	1	
京都14期中 土坑248・249	サザエ	殻			4	4	京都13期古 土坑187	マダイ	椎骨				1	1
		蓋			1	1		副蝶形骨				1	1	
	アカガイ	殻	1	2		3	不明	不明				1	1	
	ハマグリ	殻	2	1		3	京都13期新 柱穴108	マダイ	歯骨	1				1
鳥類	カモ科	尺骨	1			1		椎骨				2	2	
京都12期古～中 土坑201	不明	指骨			1	1	京都14期古～中 土坑232	マダイ	擬鎖骨	1				1
		橈骨	?1						肩甲骨	1				1
		京都13期古 土坑187	カモ科	尺骨		1		1	京都14期中～ 柱穴234	マダイ	歯骨	1		
								前上顎骨		1			1	

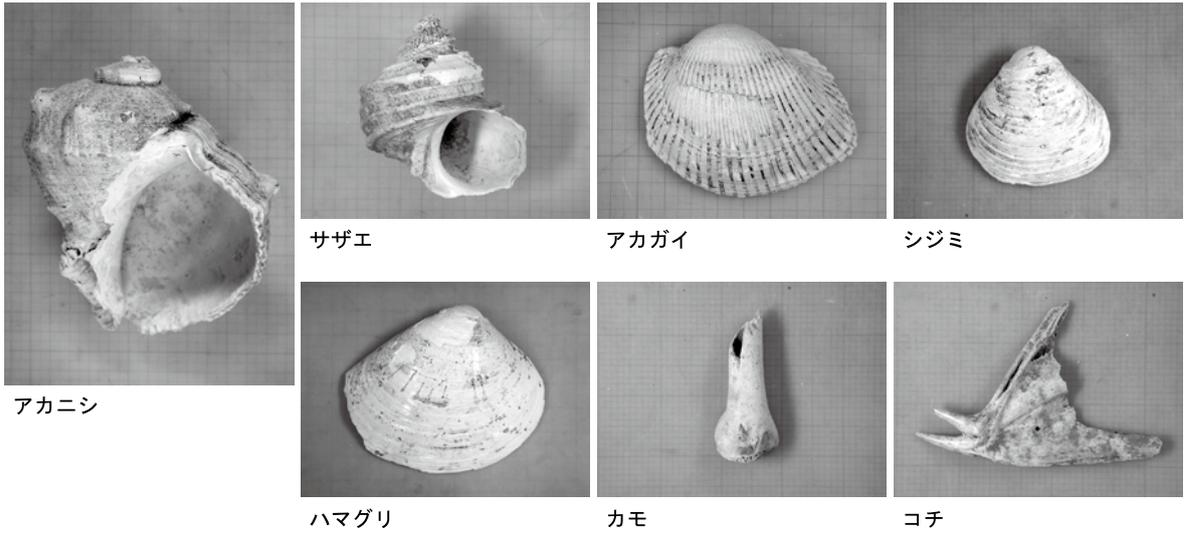
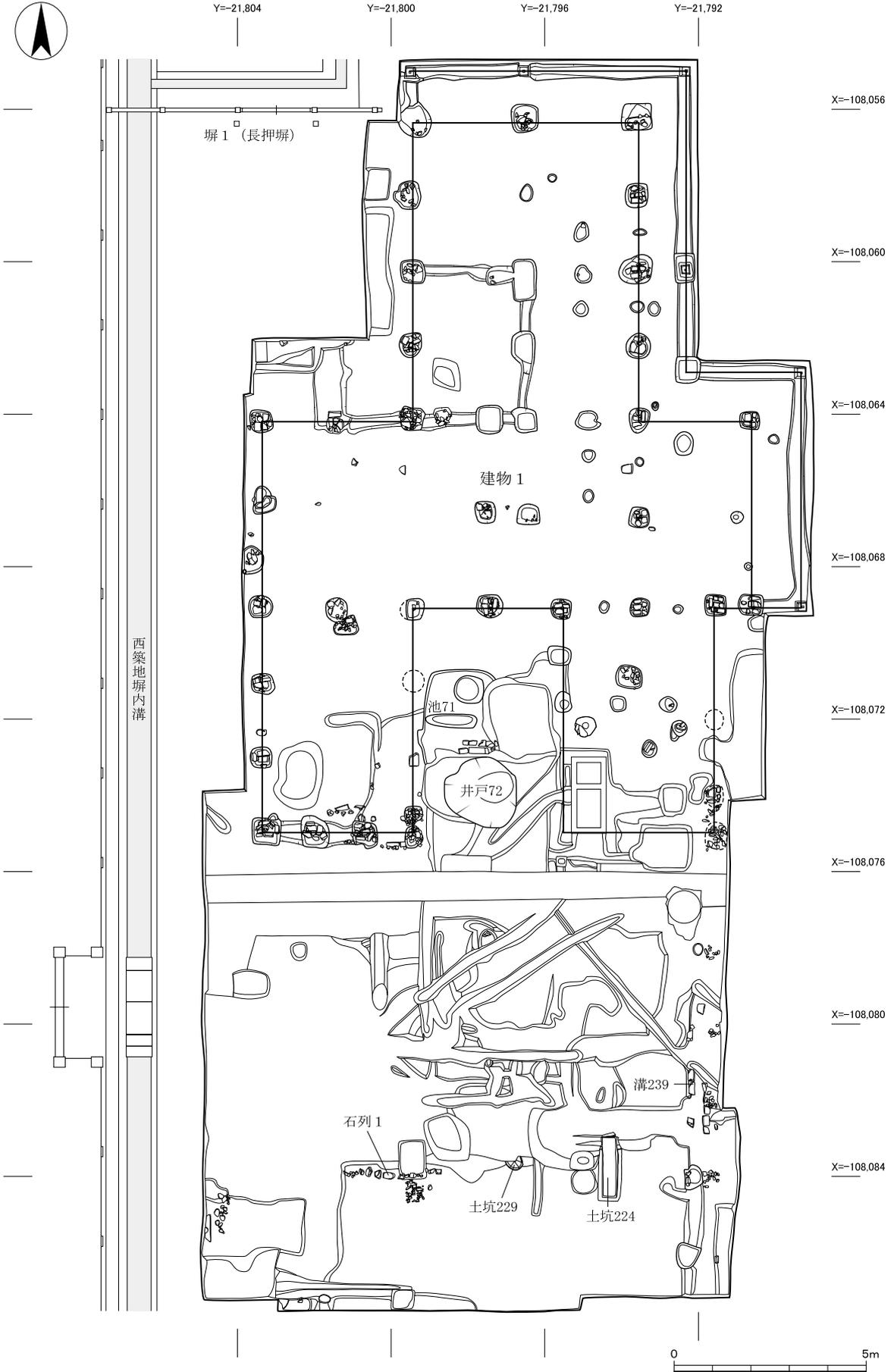
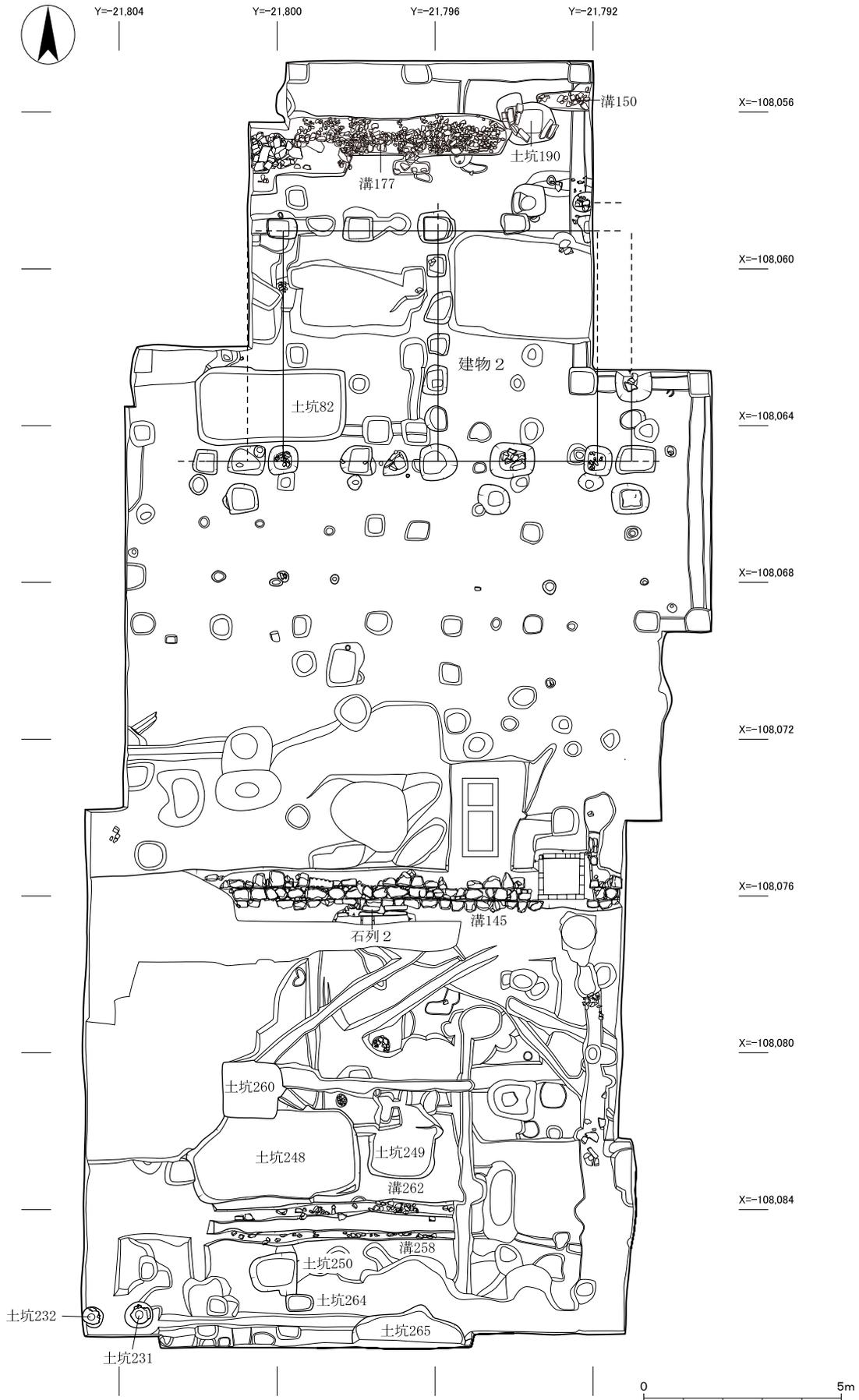


図1 動物遺存体

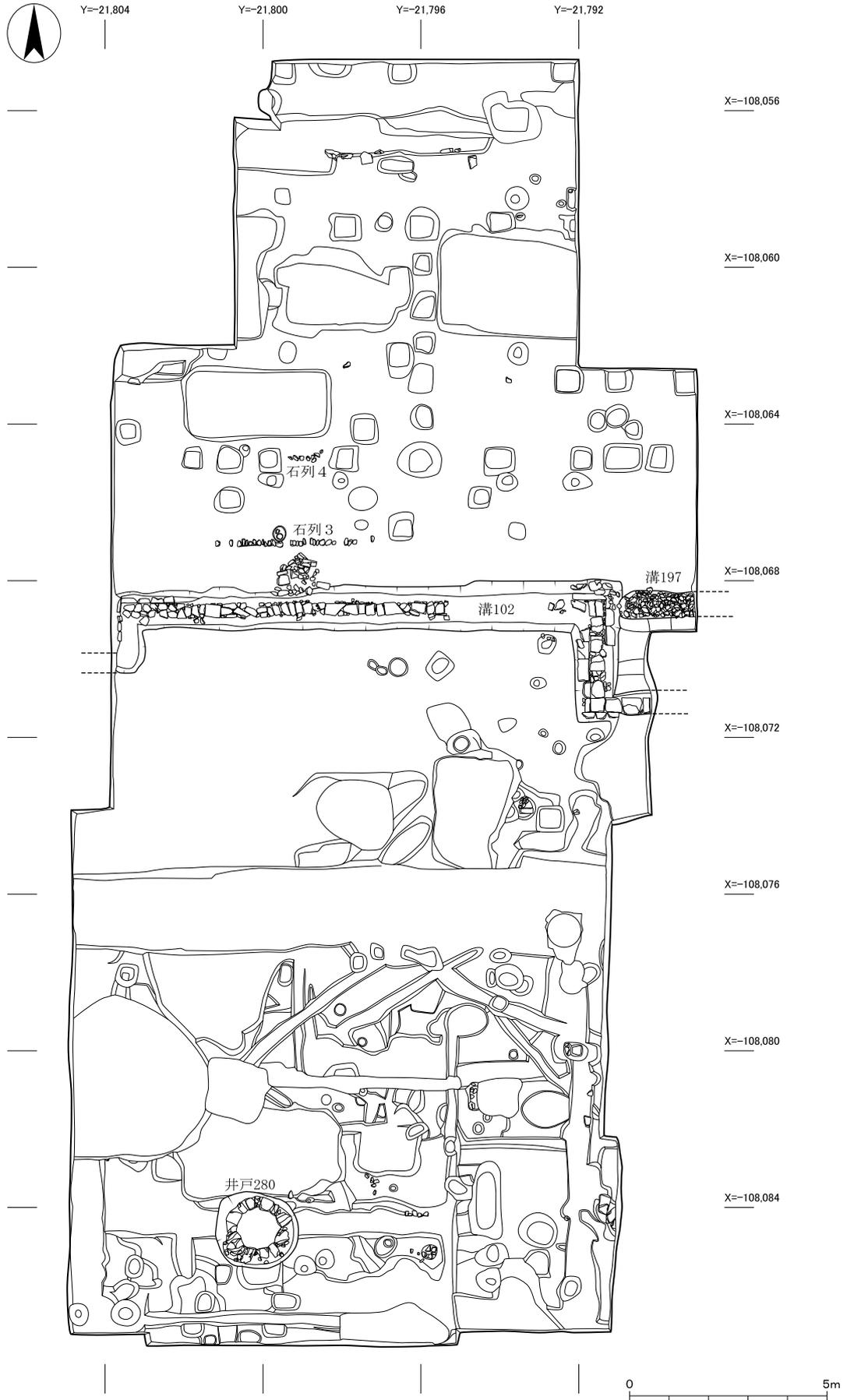
圖 版



第1面平面図 (1 : 150)

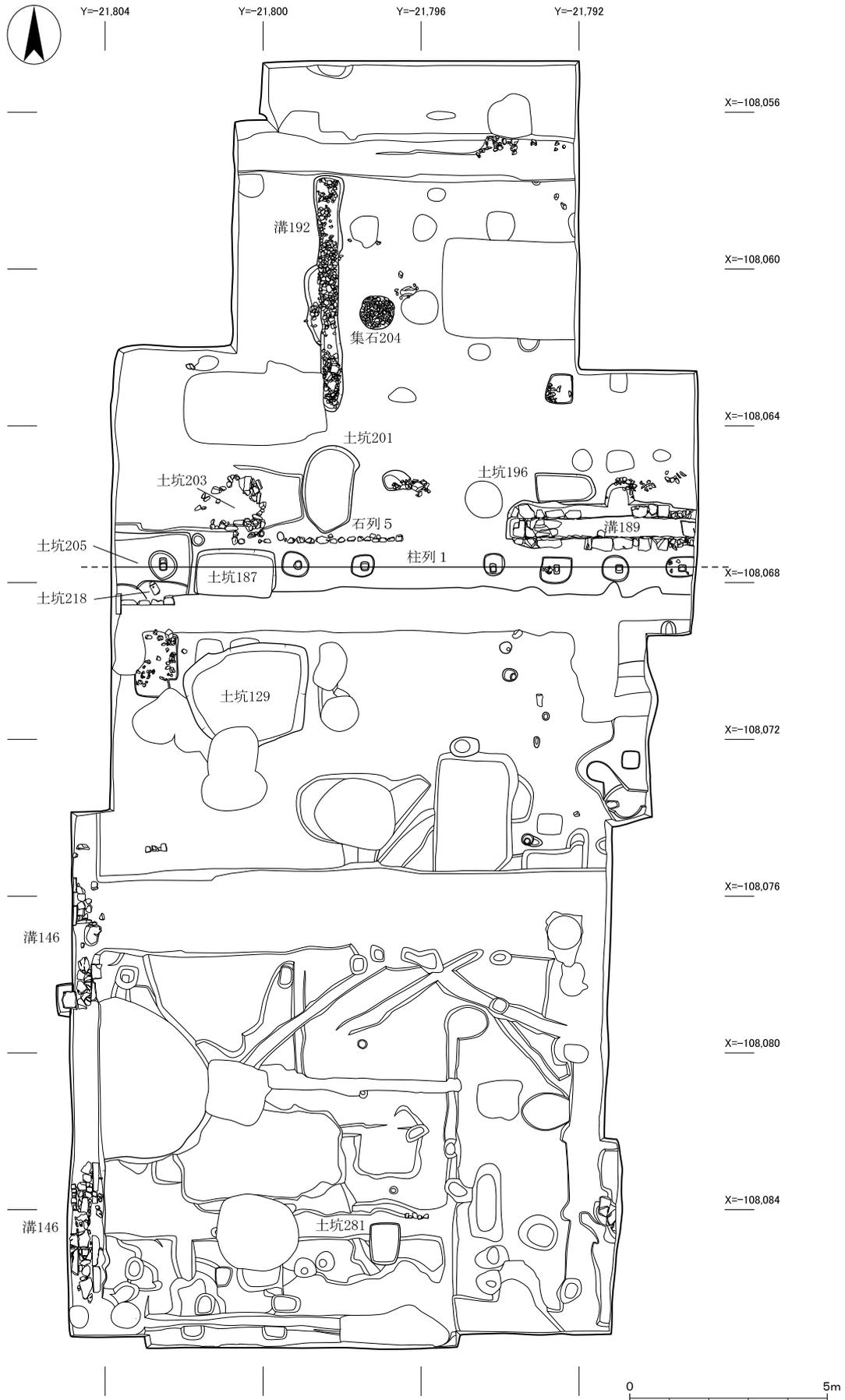


第2面平面図 (1 : 150)



第3面平面図 (1 : 150)

図版 4
遺構



第4面平面図 (1 : 150)



1 北区第1面全景（南から）



1 南区第1面全景（北から）



2 井戸72（西から）



3 石列1（東から）



1 北区第2面全景（南から）



2 南区第2面全景（北東から）



1 溝150・177、土坑190（東から）



2 溝145（西から）



3 溝258・262（東から）



4 土坑82（西から）



5 土坑231・232（北東から）



1 北区第3面全景（南西から）



2 南区第3面全景（北から）



1 溝102 (北東から)



2 溝197 (西から)



3 溝102断面



4 井戸280 (北から)



1 北区第4面全景（南西から）



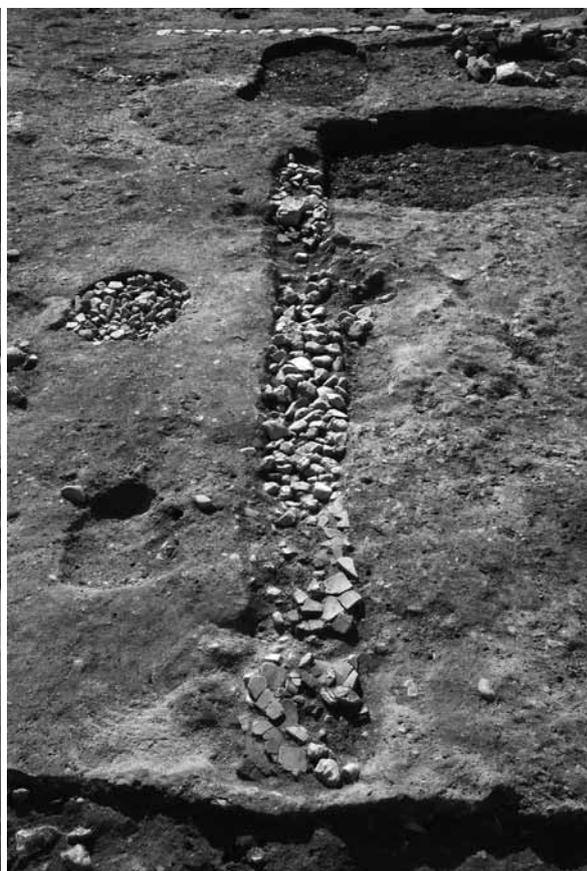
2 南区第4面全景（北から）



1 柱列1・石列5・溝189 (東から)



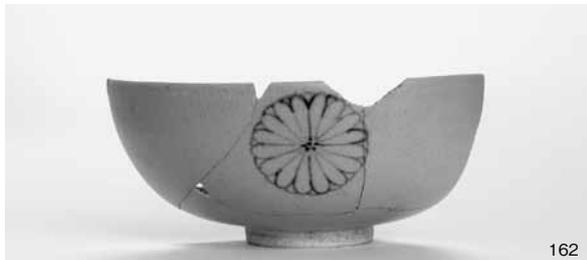
2 溝146 (北から)



3 溝192・集石204 (北から)



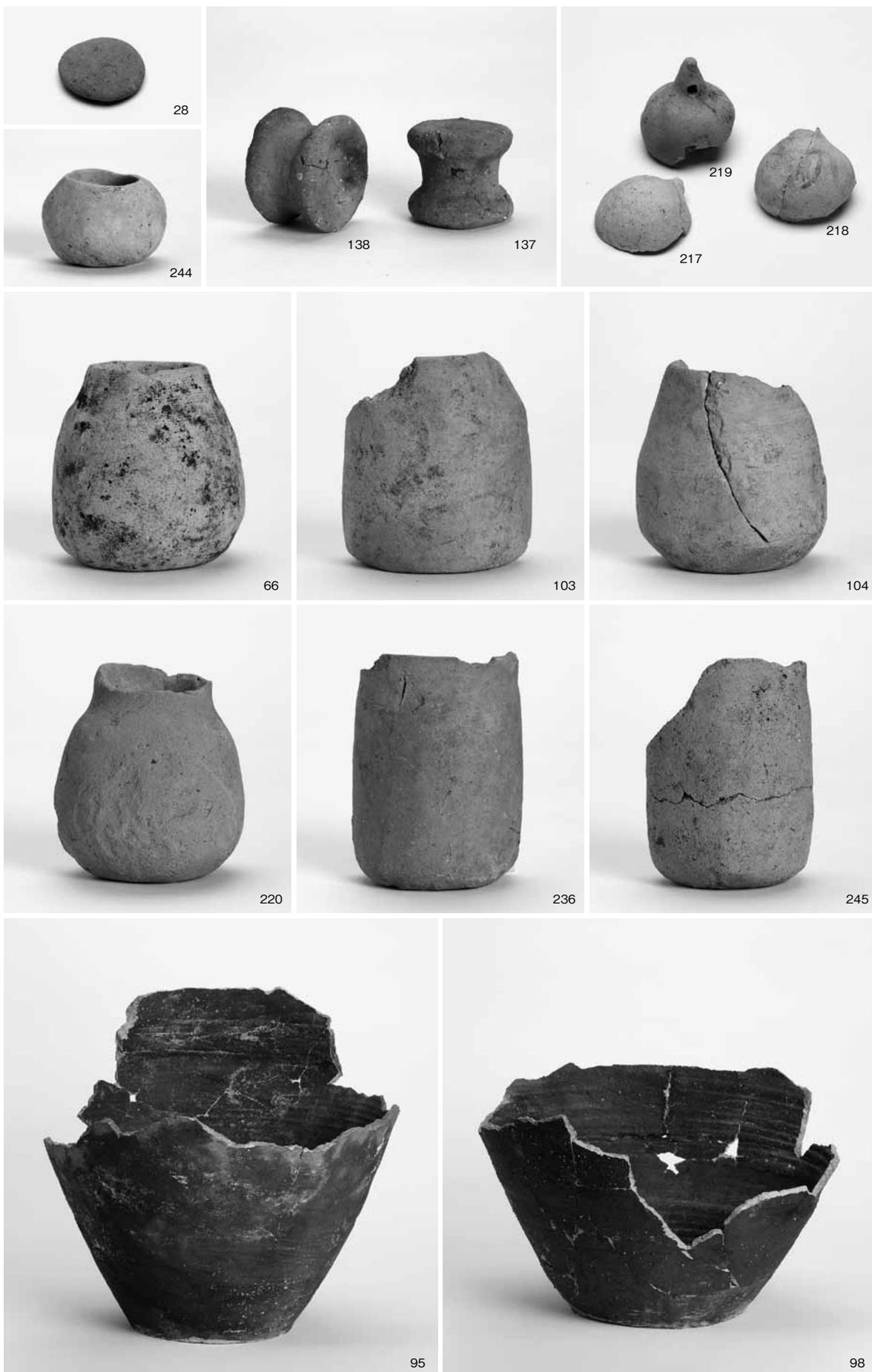
土坑249出土土器



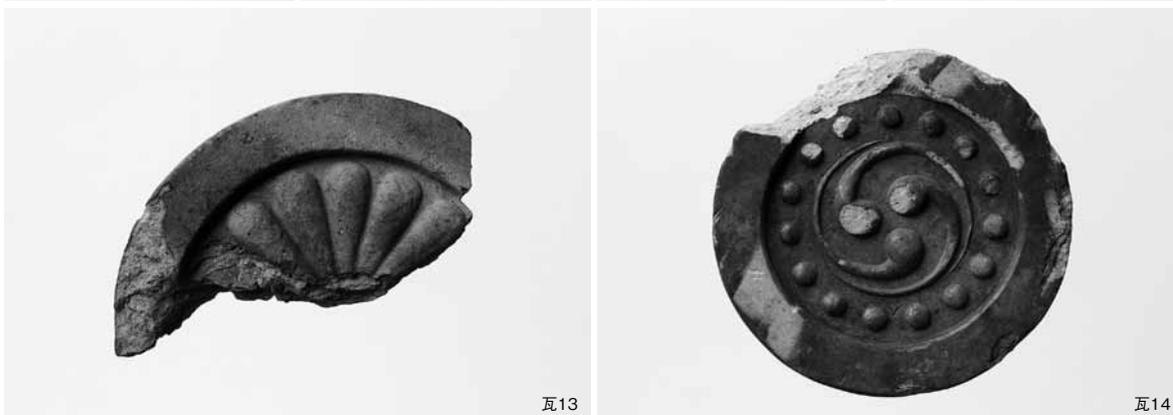
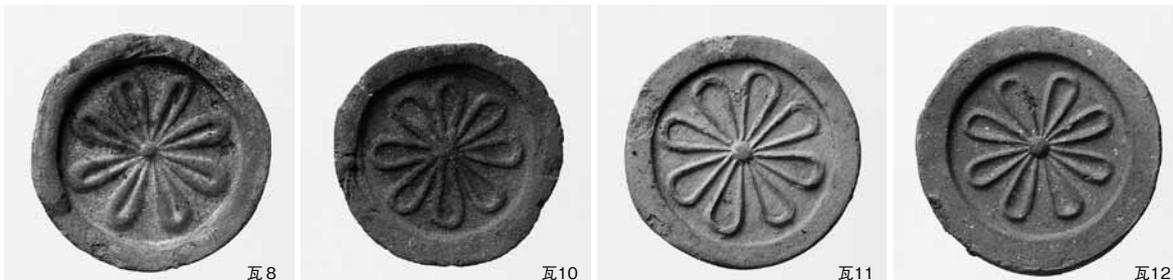
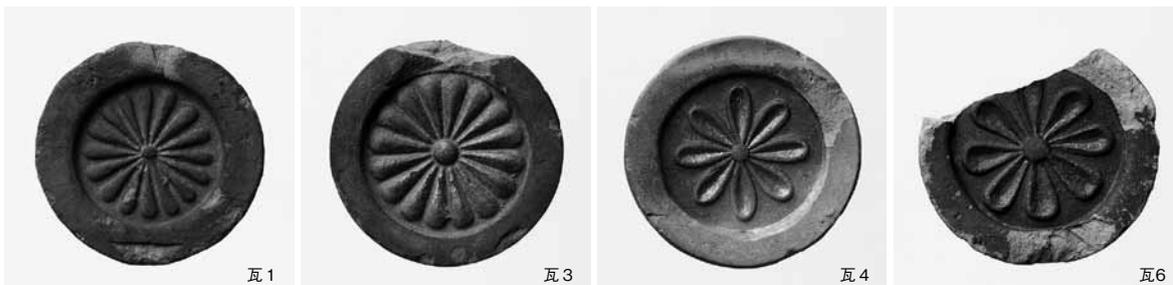
土坑187出土土器



土坑201出土土器



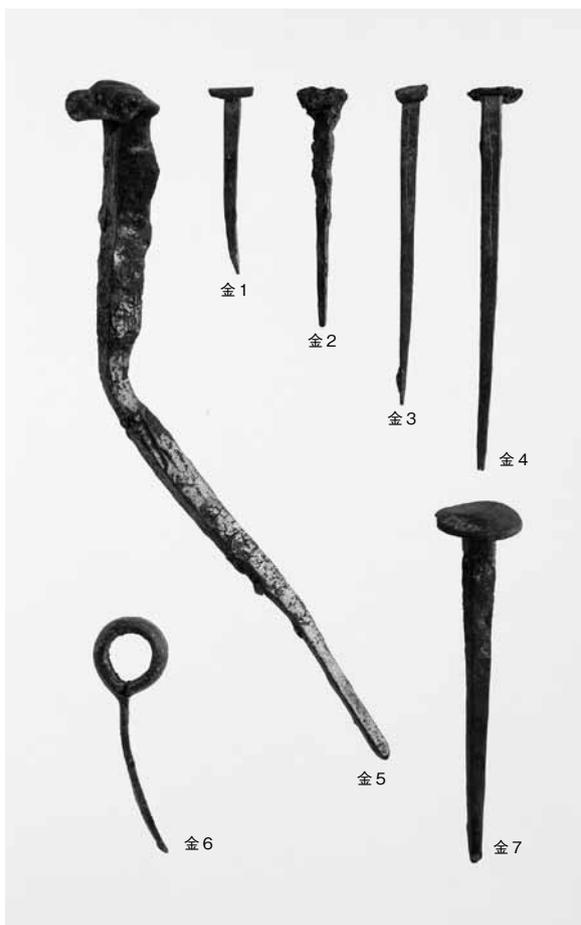
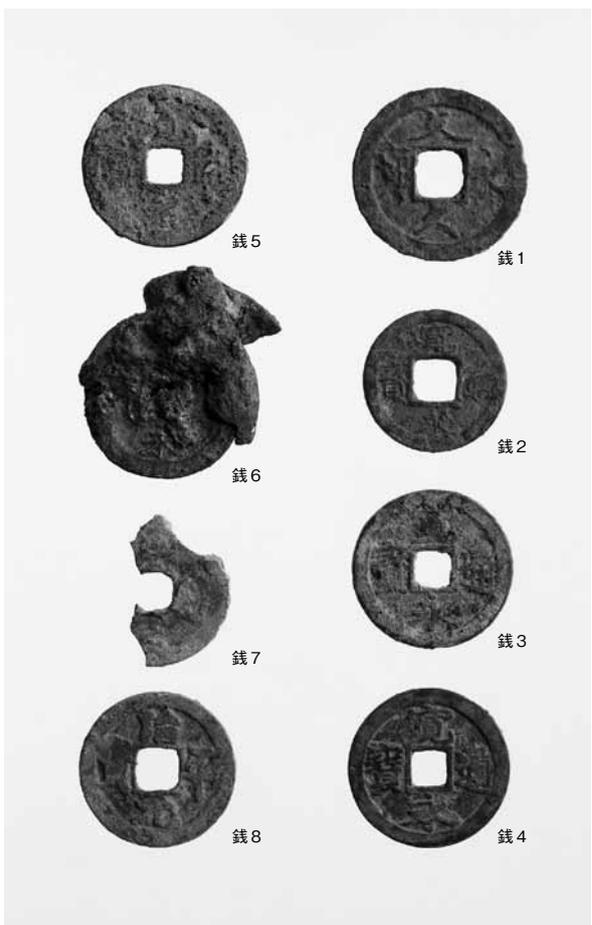
土製品・塩壺・信楽甕



棟丸瓦・軒丸瓦



軒平瓦・輪違瓦・埴



報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうほくへんしぼういっちょうあと・くげまちいせき							
書名	平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2013-12							
編著者名	小松武彦							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2014年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 くげまちいせき 公家町遺跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 きょうとぎょうえん 京都御苑3	26100	1 241	35度 01分 32秒	135度 45分 32秒	2013年10月 3日～2013 年12月9日	416㎡	建物新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡 公家町遺跡	都城跡 邸宅跡	江戸時代前期	溝、集石、柱列、 石列、土坑	土師器、陶磁器、土製 品、瓦、銭貨、金属製 品		承応度内裏・宝永 度内裏・寛政度内 裏・安政度内裏の 「番所」建物の変 遷と承応度内裏の 御所の西築地内溝 を確認した。		
		江戸時代中期	溝、石列、土坑、 井戸	土師器、陶磁器、瓦、 銭貨、金属製品、石製 品				
		江戸時代後期	建物、溝、石列、 土坑	土師器、陶磁器、土製 品、瓦、銭貨、金属製 品				
		江戸時代末期 ～昭和時代	建物、溝、石列、 井戸、土坑	土師器、陶磁器、瓦、 金属製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-12

平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡

発行日 2014年3月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961